

耶穌降生千八百廿七年 大英國聖書會社

舊約
聖書
詩
篇

明治二十年

日本橫濱印行

詩篇

第一篇

惡きもの謀害にあゆまずつとびどの途にたらず順るもの
 座にすわらぬ者のさいはひあり
 かゝる人のエホバの法をよるこひて日も夜もこれをあもふ
 かゝる人の水灌のはどりにうゑし樹の期にいたりて實をむす
 び葉もまた潤まざるごとくうの作どころ皆さかえん
 あしき人のまからず風のよきさる枇椹れごとし
 然バあしきものの審判にたへず罪人の報きものゝ會にたつみ
 とを得ざるあり
 うのエホバいたとしきものゝ途をあらたまふされど惡きもの
 の途にはろびん

第二篇



海老澤有道文庫

一 何^いかき^きばもろ^ろの國^{くに}人^{ひと}のさわきたち諸^{あか}民^{みん}のむかしきことを
 謀^{はか}るや
 二 地^ちのもろ^ろの王^{わう}いたちかまへ群^{ぐん}伯^{はく}バどもに諷^ふり、エホバどろ
 の受^う膏^{こう}者^{しや}にさからひていふ
 三 わきらの械^{くわい}をてばち、ろの繩^{じゆ}をすてんど
 四 天^{てん}に坐^ざするもの笑^{わら}ひたまへん主^{ある}うれちを嘲^{あざわ}りたまふべし
 五 かくて主^{ある}の忿^い怒^どをもてものいひ大^{おほ}ある怒^いをもてかきらを怖^{おそ}ま
 六 せしめて宣^{のたま}給^{たま}ふ
 七 流^{なが}かれども我^{われ}わが玉^{たま}をわがきよきシオン^{シオン}の山^{やま}にたてたりと
 八 われ命^{いのち}をのべんエホバわきお宣^{のたま}まへり、かんなちわが子^こ
 あり今日^{けふ}わきかんなちを生^はり
 九 わきに求めよ、さらば汝^{なんぢ}もろ^ろの國^{くに}を嗣^{つぎ}業^{ぎやう}としてあたへ地^ち
 の極^{はた}をなんちの有^あとしてあたへん

十 汝^{なんぢ}くろさねの杖^{つえ}をもて彼^{かれ}等^らをうちやぶり陶^{たう}工^{こう}のうつはものよ
 十一 ごとくに打^う碎^{さい}かんと
 十二 ざきバ汝^{なんぢ}等^らもろ^ろの王^{わう}よ、さどかき地^ちの審^さ士^し輩^{はい}をしへをうけよ
 十三 長^{なが}をもてエホバあつかへ戰^{いくさ}慄^{りよう}をもてよろこべ
 十四 子^こにくちつけせよ、おうちくわれ怒^いをはち、かんなち途^{みち}には
 十五 ろひん、ろの忿^い怒^どのすみやかに燃^もべけれバあり、すべてかれに依^よ
 頼^{たの}むもの口^{くち}福^{ふく}ひあり

第三篇 ダビデ、ろの子アブサロムを避^はしどき

一 エホバよ我^{われ}にわたする者^{もの}のいかに發^は延^{えん}きるや、我^{われ}にさからひて
 二 起^{おこ}りたつもの多^{おほ}し
 三 わが靈魂^{たましい}をわけつらひて、かれの神^{かみ}にすくえろよとぞなしとい
 四 ふ者^{もの}ろあはき、もつ

三 さきぞエホバよ、なんぢの我をかこめる盾わが榮わが首をもた
 げ給ふものなり
 四 わき壁をあげてエホバによそよればうの懸山より我にこたへ
 たまふ、セラ
 五 わき臥ていね、また目さめたり、エホバわきを支へたまへばな
 り
 六 われをゐとて立かまへたる千萬の人をも我のあうきじ
 七 エホバよ、ねがはくはく起たまへ、わが神よわれを救ひたまへ、あん
 ち我にわがすべての仇の頰骨をうち、恐きものゝ齒我をりたま
 へり
 八 救ひエホバにあり、ねがはくはく思恵なんぢの民のうへに在んこ
 とを、セラ

第四篇 琴にあはせて伶長あうたいしめたる

ダビデの歌

一 わが義をまもりたまふ神よ、ねがはくはくわが呼るときに答へた
 まへ、わがなやみたる時なんぢ我をくつろがせたまへり、ねがは
 二 くは我をあこきみ、わが祈をきよたまへ
 三 人の子よ、なんぢらわが榮をはかして幾何時をへんとするか、
 四 なんぢらむなしき事をこのミ虚偽を奉たひていくらのときを
 五 經んとするか、セラ
 六 然ぞなんぢら知き、エホバの神をうやまふ人をわかちて己につ
 七 かしめたまひしあどを、わきエホバによそよらば聴たまはん
 八 さんぢら憤しをのよきて罪我をかすかき、臥床にておの心
 九 にかたりて黙せ、セラ
 十 さんぢら義のうなへものを献てエホバに依頼め
 十一 おはくの人はいふ、たきか嘉事をわきらに見するものあらんや

ぞ、エホバよねむはくハ聖顔の光をわれらの上にのぼらせたまへ

七 かんちのわが心あわたへたまひし歡喜のかさらの穀物と酒との豊かある時にまさりき

八 わき安然にして臥またねふらん、エホバよわきを獨にて坦然おをらしむるもの汝なり

第五篇 篇にあはせて伶長にうたひしめたる

ダビデのうた

一 エホバよねむはくハ我がことゑに耳をかたむけ、わが愚にみこころを注たまへ

二 わが王よ是る神よ、わが號呼のこゑをきよたまへ、われ汝にいのれバあり

三 エホバよ朝にるんちわが壁をきよたまへん、我あしたになんち

四 の爲にうかへして俟望むべし

五 かんちの惡きことをよろこびたまふ神にあらす、惡人のかんちの賓客たるを得ざるあり

六 たかふる者のかんちの目前にたつをえず、なんちのすべて邪曲をあてふものを憎みたまふ

七 かんちの虚偽をいふ者をはろばしたまふ、血をあおすものと讒計をなすものぞエホバ憎みたまふなり

八 然むわれハ豊かなる仁慈によりてなんちの家にいらん、われ汝をあうとつゝ聖宮にむかひて拜さん

九 エホバよ願くハわが仇のゆゑになんちの義をもて我をみちびき、なんちの途をわが前におほくしたまへ

十 あれらの口には眞實なく、うの衷ハよこしま、うの腹ハあをける、うの舌ハへつらひをいへばなり

十 神よねがはくのかれらを刑なひ、うの謀略によりて、きづから仆れしめ、うの愆のあはきによりて之をおひいだしたまへ、かれら
 十一 の汝にうむきたまふなり
 十二 されど凡ておんちに依頼むものを、よろめをせ永遠によろめびよを
 十三 まらせたまへ、おんち期る人をまもりたまふなり、名をいつくしむ者にもおんちによりて歡喜をえしめたまへ
 十四 エホバよなんちの義者にさいはひし盾のごとく恩恵をもて之を
 十五 かてみたまへん

第六篇 八音ある琴にあてせて、俗長にうたひ

一 エホバよねがごくりの忿怒をもて我をせめ烈しき怒をもて我を
 二 みらしめたまふなり
 三 エホバよわれを憐れたまへ、われ義とおどろふるなり、エホバよ

四 わをを醫したまへ、わが骨わなまきふるふ
 五 わが靈魂さへも甚くふるひわさく、エホバよかくて幾何時を
 六 へたまふや

七 エホバよ歸りたまへ、わがたましひを救ひたまへ、なんちの仁慈
 八 の故をもて我をたすけたまへ

九 ろの死にありて汝をおもひいづることなし、陰府にありてい
 十 誰かなんちに感謝せん

十一 われ歎息にてつかきたり、我よなく床をたよりせ涙をもて
 十二 わるををひたせり

十三 わる目うれへによりておどろへ、もろくの仇ゆゑに老ぬ
 十四 なんち邪曲をおみなふ者ことく我ををなまよ、エホバの

十五 わが泣てををきたまひたり
 十六 エホバわが懇求をきたまへり、エホバわが祈をうけたまへん

わがもろくの仇のたて大にあぢまきひ、あわたましく恥て
あらずきぬ

第七篇 ベニヤシンの人クシの言につきダビデ

わが神エホバよわれ汝によりたのむ願くひすべての遠せまる
ものより我をすくひ我をたすけたまへ
あうらくひかき蘇のさどくわが靈魂をかきやふり援るものな
き間にさきてすだくに爲ん
わが神エホバよもしねき此事をなしよならんにい、わが手によ
こしまの難りをらんにと
故なく仇するものをさへ助けしに禍害をもてわが友にむくい
しならんに
よし仇人わがたましひを遠どらへ、わが生命をつちにふみにじ

り、わが榮を塵にあくだも、うの作にまかせよ、
エホバよさんちの怒をもて起わが仇のいきどほりにむひて
立たまへ、わがために目をさましたまへ、さんちの審判をあはせ
出したまへり
もろくの國人の會をさんちのまじりに集めしめ、うの上なる
高座にかへりたまへ
エホバのもろくの民にさむきを行ひたまふ、エホバよわが正
義とわが裏ある完全とにたたひて我をさむきたまへ
ねおさくひ悪きもの曲事をたちて義しきものを堅くたたま
へ、たとしき神の人のこゝろと腎とをさぐり知たまふ
わが肩をさるもの心のなほきものをすくふ神あり
神のたしき審士ひさどお慈悲をおみしたまふ神あり
人もしかへらずバ神のうの剣をさき、うの弓をさりてかせへ

一三 みきお死の器をうかへ、ろの矢に火をうへたまへん
 一四 祇よろの人によこしを産んどしてくるしむ、被害をそらみ處
 一五 偽をうむかり
 一六 また坑をはりてふかくし己がつくさるろの溝におちいれり
 一七 ろの被害の首にかへり、ろの強暴の首の頭上にくだら
 一八 ん
 一九 われろの義によりてエホバに感謝し、いとたうきエホバの名を
 二〇 はめうたえん

第八篇

ギデトの琴にあひせて伶長にうたえ
 太めたるダビデの歌

一 わきらの主エホバよ、なんちの名の地にあまねくして尊きかな、
 二 ろの榮光を天におきたまへり
 三 さんちの嬰兒ちのまごの口おより力の基をおきて敵にうかへ

四 たまへり、この仇人どうらをも報るものとを鎮靜めんがためな
 五 り

六 我なんちの指のわきある天を觀かんちの設けたまへる月と星
 七 ををるに

八 世人のいかなるものなればこれを聖念にぞめたまふや、人の子
 九 のいかなるものなきばこれを顧みたまふや

一〇 只すこしく人を神よりも卑つくりて榮と尊貴とをかうふらせ
 一一 またこきに手のわきを治めしめ萬物をろの足下に置きたまへ
 一二 り

一三 すべての羊うしまた野の鹿らちの鳥、うみの魚、もろくの海路
 一四 をあよふものをまて皆忠かなせり

一五 われらの主エホバよ、なんちの名の地にあまねくして尊きかな
 一六 第九篇 ムツラベン(四) 名子ああせて伶長にう

一 われ心をつくしてエホバに感謝し、うのもろくの奇しき事述
 二 をのべつたへん
 三 われ汝によりてたのしむと、臣よろこむ、至上者よ、あんなちの名を
 四 はめうたこん
 五 わが仇、あきりてくどき、頭きたふきて、御前にはろふ
 六 なんぢわが義とわが誠とをまもりたまへばなり、あんなちたき
 七 しき審判をしつゝ、寶座おすわりたまへり
 八 またもろくの國をせめ、恐きものをほろぼし、世々かぎりあ
 九 くれらる名をけしたまへり
 一〇 仇いたえはてし世々あきすたまたり、汝のくつおへしたまへる
 一一 もろくの邑、うせてうの跡だにもなし
 一二 エホバのとしへに聖位にすわりたまふ、審判のため、にうの寶
 一三 座をまうけたまひたり
 一四 エホバの公義をもて世をささむ、直をもてもろくの民に審判
 一五 をあておひたまへん
 一六 エホバの處げちるもの、城また都、きのどきの城あり
 一七 聖名をあるもの、あんなち、依頼、うの、エホバよ、あんなちを尋る
 一八 もの、あんなちしてと斷ておけきばなり
 一九 エホバに仕たまふエホバに對ひてはめうたへうの事述をもろ
 二〇 もろの民のあかにのべつたへよ
 二一 血を同化したまふもの、苦しむものを心にどめてうの號呼を
 二二 わすれたまへず
 二三 エホバよ、我をあてき、またまへ、われを死の門よりすくいだし
 二四 たまへる者よ、ねおはく、仇人のわさを難むるを視たまへ
 二五 さらば、我、あんなち、すべての頌美をのぶるを得、またエホバのむ

すめの門にてなんぢの救をよこそん

もろゝの國民のあのおつくる開ふあちいり、ろのかくしま

うけたる網にその足をとりへらる

エホバの己を知らしめ審判をおこなひたまへ、あしき人のあ

のる手のわきなる路あかされり、ヒガイオン、セツ

あしき人の陰府にかへるべし、神をわするともろゝの國民も

またまからん

貧者のつねに忘るるゝあらず苦しむものゝ望はどこしへに

滅ぶるあらず

エホバよ起たまへ、ねおはくり、勝を人にえしめたまふあられ御

前にてもろゝのくにびとに審判をうけたまへ

エホバよ願ひをかきりに憐れみをあこさしめたまへ、もろゝの國民

民にのれたまへ人なることを知らしめたまへ、セツ

第十篇

あまエホバよ何うはるゝに立たまふや、なんぞ患難れどきに匿

たまふや

あしき人のたかふりて苦しむものを甚だしくせむ、かれらをろ

のくさだての謀略にさらされしめたまへ

あしきひと己がこころの欲望をはかり貪るものを脱してエ

ホバをろしむ

あしき人の得たりかにいふ、神のさぐりもどむることをせざる

なりと、凡てろのおもひに神なしとせり

かれの途のつねに堅く、おんちの審判のろの眼よりはなれてた

かし、彼らのもろゝの敵をくちさきらにて吹く

かくて己がこころの中にいふ、我うおかざるゝことなく世々わ

れに禍害なかるべしと

ろの口くちにいのろひと虚偽いつはりとまへたげとみち、ろの舌したのまたにハ
殘害そくごとよみしとあり

あれハ村里むらのかくきたる處ところにをり隠かくやかなるどころにて罪つとな

きものをころす、ろの眼めハひろかに倚伏よつなきものをうかまひ

窟ほらにをる獅しのごとく潛ひそみまぢ苦しむものをとらへんために伏ふ

ねらひ賞あづかしきものをろの網あみにひきいきてとらふ

また身みをかまめて踏ふみまる、ろの強勁きやうきんによりて依伏よつなきものハ作し

る

かれ心こころのうちにいふ、神かみハわすれたり神かみハろの面おもてをかくせり神

ハみるふとあかるべしと

エホバよ起たたまへ、神かみハ手てをあげたまへ、苦しむものを忘わすれたま

ふなかれ

いかなれば惡わるきもの神かみをいやしめて心中こころうちにかんぢ探求たんぐうむるこ

とをせしといふや

かんぢハ鹽しほたまへり、ろの殘害そくごと怨恨うらみとを見てふきに手てをくだ

したまへり、倚伏よつなきものハ身みをなんぢに委ゆづぬ、かんぢハ昔むかししよ

り孤子かこしをたすけたまふ者ものあり

ねるはくの惡わるきものハ臂かた我われをりたまへ、あしきものハ惡事わるわざを一ひと

つだにのこらぬまでに探究たんぐうしたまへ

エホバハいやどはなぐに王わうなり、もろくの國民こくたみハほろびて神かみ

の國くにより跡あとをたちたり

エホバよ汝なんぢハくるしむものハ懇求こんぐうをききたまへり、ろの心こころをか

たくしたまへん、なんぢハ耳みみをかたふけてきよ

孤子かこしと虐あへげらるる者もののために審判しんぱんをかち地ちにつける人にふ

たよび惡嚇おそをもちぬざらしめ給たまへん

第十一篇 うたのかみに誦よみはしめたるダビデ

のうた

一 われエホバに依頼めり、なんぢら何ぞわが靈魂にむかひて鳥の
 二 ごときなんぢの山にのぐまよといふや
 三 視よあじきもの、暗處にかくれ、心なほきものを射んとて弓を
 四 はり、絃に矢をつがふ

三 基ミなやふきたらん、に義者なにをなさんや

四 エホバ、はうの聖宮にいます、エホバの寶座、天にあり、うの目の
 五 ひどのこを鹽の眼、隙にかれらをもろみたまふ

五 エホバの義者をこころむ、うのみこころの、恐きものと強暴をこ
 六 のむ者どをにくミ

六 跡をあじきもの、うへに降したまはん、火と硫磺ともゆる風ど
 七 はかきらの酒杯にうくべきものなり

エホバ、いたしき者にして、義きことを愛したまへばなり、直き

もの、はうの聖顔をあふぎミん

第十二篇 八音にあはせて、伶長にうたはしめ

たるダビデのうた

一 あまエホバよ、助けたまへ、うの神をうやまふ人、いた文、誰あるも
 二 の、人の子のなかより、消失るなり

二 人、みな虚偽をもて、うの隣どあひかたり、滑かなるくちびると
 三 貳心どをもて、ものいふ

三 エホバ、はすべての滑かなるくちびると、大なる言をかたる舌ど
 四 をほろぼし給はん

四 かきらいふ、われら舌をもて、勝をえん、この口唇、わがものな
 五 り、誰かわれらに主たらんやと

五 エホバのたまはく、苦しむもの、掠めらば、貧しきもの、歎くがゆゑ
 六 に、我いま起て、こをうの意ひもどむる、平安にあめん

六 エホバの言ことばのきよきみどをなり、地にまうけたる爐いろにてねり七
次つぎきよめたる白銀しろがねのごとし
七 エホバよ汝きみのかきらをまもり之これをたすけてどこしへにこの類たぐひ
より免まなれしめたまはん
八 人の子このなかに穢けがしきことの崇たかめらるゝときハ惡者あしきものこそやあ
しこにあるくなり

第十三篇 伶長たのぶにうたはしめたるダビデのう

一 あゝエホバよ、かくて幾何時いかにをへたまふや汝きみどこしへに我われをわ
すきたまふや、聖顔かほをかくしていくらのときを歴へたまふや
二 わき心のうちに終日ひねすかなしみをいだき、籌畫おとくはしりをたましひに用もちゐ
て幾何時いかにをふべきか、わが仇あだわがうへに崇たかめられて幾何時いかにを
ふべきか

三 わが神エホバよ我われをかへりみて答こたへをなしたまへ、わが目をあき
らかにきたまへ、恐おそらくいじき死しの睡ねにつかん
四 おうらくわが仇あだいはん我われかれに勝かちりど、おうらくわが敵あだわ
がうごかざるゝによりて喜よろこむん
五 されど我われのなんぢの憐憫あはれみによりたのみ、わが心こころのなんぢの救すくひに
よりてよろこぶん
六 エホバのゆたかに我われをあしらひたまひたまはば、われエホバに對むか
ひてうたえん

第十四篇 うたのかみに誦よみはしめたるダビデ

のうた

一 愚おろかなるものハ心のうちに神かみあしといへり、かきらの腐くさきたり、く
きらの憎にくむべき事をなせり、善よきをあこなふ者ものなし
二 エホバ天てんより人ひとの子こをのぞみよて悟さとるもの神をたづぬる者ものあ

二 りやど見たまひしに
 三 みな逆きいでゝみどく腐れたり、善をなすものなし一人だ
 四 になし
 五 不義をおこなふ者のみな智覺なきう、かゝらの物くふむどくわ
 六 民をくらひ、またエホバをよぶことをせざるなり
 七 視よりくる暗うれらの大におうれたり、神いたしきものゝ類
 八 のおかに在せばかり
 九 かんちらの苦しめるものゝ謀略をあかとり辱かしむ、さきどエ
 十 ホバの道の遺所なり
 十一 ねがはくいのレオンよりイサエルの救のいでんみどを、エホバ
 十二 うの民のどらはれたるを返したまふときヤコブのよろこびイ
 十三 スラエルの樂まん

第十五篇

ダビデのうた

一 エホバよかんちの戦慄のうちによとらん者いたれう、かんちの
 二 聖山にすまはんものゝ讃う
 三 直くわゆる義をおこなひ、うのこゝろに眞實をいふものうの
 四 人ある
 五 かゝる人の舌をもてうしらす、うの友をうこなはず、またうの隣
 六 をはちしむる言をあげもちゐず
 七 惡にまづめるものを見ていどひかろしめ、エホバをあるまもの
 八 をたふどび、誓ひしものとあのに禍害となるも變ることなし
 九 貨をかしめて過たる利をむさぼらず、賄賂をいきて無幸をうこな
 十 はざるなり、斯ることせむを行ふものゝ永遠にうごかざるまて
 十一 どなかるべし

第十六篇

ダビデがエタタムの歌

一 神よねらはくいのわれを護りたまへ、我なんちに依頼ひ

二 わきエホバにいへらく、なんちのわが主なり、なんちのはかにわ
 三 ダ福祉のなしど
 四 地にある聖徒のわが極めてよろこぶ勝れしものなり
 五 エホバにかへて他神をどるものと悲哀のいやまさん、我がまら
 六 びささぐる血の御酒をうがす、その名を口にどなるみどを
 七 せじ
 八 エホバのわが嗣業またわが酒杯にうくべき有なり、なんちのわ
 九 が所領をまもりたまはん
 一〇 準繩のわがために樂しき地にちちたり、宜わきよき嗣業をえた
 一一 るかな
 一二 われの調諭をさづけたまふエホバをはめまづらん、夜のわが心
 一三 われ汝をしふ
 一四 わき常にエホバをわが前にあけり、エホバわが右にいませバわ
 一五 き動かさるゝことあるべし
 一六 このゆゑにわが心のしき、わが榮のよろこぶ、わが身もまた
 一七 平安にをらん
 一八 うの汝わがたましひを陰府にすてきたまはず、なんちの聖者
 一九 を墓のなかに朽しめたまはざる可れバなり
 二〇 なんち生命の道をわきに示したまへん、なんちの前に充足る
 二一 よろこびあり、なんちの右にのろくの快樂どこしへにあり
 二二 第十七篇 ダビデの祈禱
 二三 あゝエホバよ公義をきゝたまへ、わが哭聲にきこゝろをどめた
 二四 まへ、いつはりなき口唇よりいづる我がいのりに耳をかたふけ
 二五 たまへ
 二六 わがはく、わが宣告みまへよりいでよ、なんちの目公平をみた
 二七 ませんみどを

二 なんぢわが心をこゝろに、また夜わきにのすまたまへり、斯てわ
れを組したまへど我に赤にの想念あるをも見出たまはざりき、

四 わが口いつみを犯すことありらん
人の行為のこどをいはき我あんなのくちびるの言によりて暴
るものゝ途をさけたり

五 わが歩のうたたくあんなの途にたち、わが足はよろめくことあり
りき

六 神よあんな我にこたへたまふ我あんなをよべり、ねがはくは汝
の耳をうたふけてわが陳るところをきたまへ

七 なんぢに依頼むものを右手をもて仇ずるものより救ひたまふ
者よ、ねがはくはあんなの妙ある仁慈をあらはしたまへ

八 願くはわれを嘘のおどくにまもり汝のつむさの蔭にあくし
我をなやむるあしき者また我をうみこてわが命をうこなはん

十 どする仇よりのがきしめ給へ

十一 あきらみの心をふさぎうの口をもて誇りにものいへり
いつみにまき往どころにてわきらを打圍み、わきらを地にたふ

十二 さんど目をどむ

十三 うきけの振裂んどいらだつ獅のごとく、應やうなるところに潛み
まつ狙獅のごとし

十四 エホバよ起たまへ、ねがはくはうきに立對ひてこれをたふし御
劍をもて悪きものよりわが靈魂をすくひたまへ

十五 エホバよ手をもて人より我をたすけいだしたまへ、あのがうく
べき有をこの世にてうけ、汝のたからにてうの腹をみたさるゝ

十六 世人より我をたすけいだし給へ、かれらのおはくの子にあきた
り、うの富茂をさなごに還す

十七 さきどわれの義にありて聖顔をみ目さむるとき容光をもて飽

足ることをえん

第十八篇

俗長にうたはしめたるエホバの僕

ダビデの歌このうたの詞のもろくの仇あよ
びサウロの手より救えしときエホバに對ひて

うたへるなり云く

エホバわれの力よわき切になんちを愛しむ

エホバわが敵わが城われをすくふ者はよりたのむ神わが

堅固なるいははわが盾わがすくひの角わがたつき楯なり

わき諸稱ふべきエホバをよびて仇人よりすくはるゝことをえ

ん

死のつな我をめぐり惡のみなきる泣われをおろそしめたり

陰謀のなは我をうこみ死のわな我にたちむりへり

われ窮苦のうちにありてエホバをよび又わが神にさけびたり

エホバわがの宮よりわが聲をききたまふうの前にてわがよび

し聲わがの耳にいれり

このときエホバ怒りたまひたれば地いふるひうきき山の基い

ゆるぎうききたり

燭の鼻よりたち火の口よりいでまやきつくし炭いこそお

ために燃あがれり

エホバの天をたれて臨りたまふうの星の下にくらきこと甚だ

し

うくてケルブに乗りてまび風のつをさにて翔り

闇をあはひとなし水のくらきところらの密雲ををのまはりの

幕となしたまへり

うのみまへの光輝よりくろくもをへて雲ともえたる炭とより

一三 エホバの天に雷鳴をどよろかせたまへり、至上者のこゑいでよ
 一四 雷どもえたる炭どふりきたり
 一五 エホバ矢をぞとせてかれらを打ちらし、數えあげき電光をはなち
 一六 エホバよ、斯るどきになんぢの叱咤、なんぢの鼻のいぶきどに
 一七 よりて水の底みえ地の基あらはきいでたり
 一八 エホバのたかきより手をのべ我をとりて大水よりひきあげ
 一九 わづつよき仇とわれを憎むものどより我をたすけいだしたま
 二〇 へり、かれらの我あまさりて最強かりき
 二一 うれらのわが災害の日にせまりきたれり、然どエホバのわが支
 二二 柱とかりたまひき
 二三 エホバのわれを悦びたまふ、おゆゑにわれをたづさへ廣處にい
 二四 だして助けたまへり

二五 エホバのわが正義にまたがひて恩賜をたまひ、わが手のきよき
 二六 にまたがひて報貨をたれたまへり
 二七 忌きエホバの道をまもり惡をさしてわが神よりはなきしものと
 二八 あけれバあり
 二九 うのすべての審判のわがまへにありて、われらの律法をすてし
 三〇 こどなけれバあり
 三一 われ神にむかひて缺るとゐろなく己をまもりて不義をはなさ
 三二 たり
 三三 この故にエホバのわがたましきと、うの目前にわが手のきよき
 三四 どにまたがひて我にむくいをなじ給へり
 三五 あんな憐愍あるものに憐みあるものとなり完全ものに全
 三六 きものとなり
 三七 きよきものに潔きものとなり、僻むものにはひびむ者となり

たまふ
 二七 うの汝くるしめる民をすくひたまへと高ぶる目をひくゝまた
 二八 まふ可ればかり
 二九 かんちわが燈火をどもし給ふべけむなりわが神ニホバわが
 三〇 暗をてらしたまはん
 三一 我なんちによりて軍の中をはせどほりわが神によりて垣戕を
 三二 せりみゆ
 三三 神いしもうの途またくニホバの言いきよしニホバのすべて依
 三四 頼むものゝ盾なり
 三五 うのニホバのはかに神いたれやわれらの神のはうに隠いた
 三六 れやや
 三七 神のちうらをわれに帯しめわが道を全きものとなしたまふ
 三八 神のわが足を崖のあしのごとくし我をわが高處にたゝせたま

ふ
 三九 神のわが手をたゝうひにならせせてわが臂に銅弓をひくこと
 四〇 を得しめたまふ
 四一 又なんちの救の盾をわれにあたへたまへりなんちの右手わき
 四二 をさゝへなんちの謙卑わきを大ならしめたまへり
 四三 なんちわが歩むところを寛濶ならしめたまひたればわが足ふ
 四四 るはさりき
 四五 われ仇をおひてこれに追及かれらのほろぶるまで歸ること
 四六 をせし
 四七 わきかれらを撃てたつことを得さしめんかれらに足が足の
 四八 下にたふるべし
 四九 うのなんち戦争のために力をわきに帯しめわれにさからひて
 五〇 おこりたつ者をわが下にかまませたまひたればあり

四十一 我われをにくむ者をわが滅ほろしえんがために汝なんぢまたわが仇あだの背そむをわ
 四十二 れにむけしめ給へり
 四十三 かれら明あきびたれども救すくふものなく、エホバに對むかひてさけびたれ
 四十四 ども答こたへたまふさきりき
 四十五 我われかれらを風かぜのさへの塵ちりのごとくに搗ぶ碎くだき、ちまたの堀ほりのごと
 四十六 くに打う撃げたり
 四十七 あんちわれを民たみのあらうひより助けいだし我われをたてゝもろも
 四十八 ろの國くにの長みさどおしたまへり、わがまらざる民たみわきにつかへん
 四十九 かれらわが事ことをきゝて立刻たちわきにしたるひ異邦人よこくにびとのきたりて
 五十 仗たすりつかへん
 五十一 こどくにびとの哀かなへてろの城しろよりをのよきいでん
 五十二 エホバの活いていませり、わが第いははむべきかあ、足あがすぐひの神
 五十三 のあがむべきかあ

四十七 わがために難あやをむくい異邦人よこくにびとをわきに服ははせたまふのみ神
 四十八 あり
 四十九 神かみのわれを仇あだよりすぐひたまふ實じにさんちの我われにさからひて
 五十 起たりたつ者のうへに我われをあげ、あらふる人より我われをたすけいだ
 五十一 し給ふ
 五十二 この故ゆゑにエホバよ、われもろゝの國人くにびとのあかにてさんちに感あはれ
 五十三 謝いひ、さんちの名なをはめうたはん
 五十四 エホバのあはれある救すくをうの王きにあたへ、うの受膏者たうまダビデと
 五十五 うの膏あぶに世々よかぎりなく憐憫あはれみをたれたまふ
 五十六 第十九篇 うたのかみに調しらへしめたるダビデ
 五十七 のうた
 五十八 もろゝの天ての神かみのえいくわをあらとし穹蒼くわうそうのうの手てのわ
 五十九 きを止めず

二 この日こそをかの日につたへ、このよ知識をるの夜にあくる
 三 暗らずいはすうの聲きこえきるに
 四 うのひびきい全地にあまねくうのみどをい地のはてにまで
 五 よふ、神のかしみに帷帳を日のためにまうけたまへり
 六 日の新郎がいはひの殿をいづるごとく勇士おきうひはしるを
 七 よろこぶに似たり

八 うのいでたつや天の涯よりし、うの運りゆくや天のはてにいた
 九 る、物としてうの和照をかうふらきるのよし

一〇 エホバの法のまたくして靈魂をいきかへらしめエホバの
 証詞のかたくして愚かるものを智からしむ

一一 エホバの訓諭のあはくして心をよろこせしめエホバの訓命の
 一二 きよくして眼をあきらかからしむ

一三 エホバをほめあうるゝ道なきよくして世々にたゆることさく、

一四 エホバのさむきい眞實にしてことごとく正し
 一五 こきを黄金にくらぶるも、あはくの純精金にくらぶるも彌増り

一六 てしたふべく、これを室にくらぶるも蜂のすの滴源にくらぶる
 一七 もいやまさりて甘し

一八 かんちの僕にこれらによりて儆戒をうく、これらをまもらば大
 一九 なる報賞あらん

二〇 たれかあ、れの過失をきりえんや、ねがごとくい我をかくれたる
 二一 愆より解放ちたまへ

二二 願くはかんちの僕をひきよめて故意ある罪愆をかさしめすう
 二三 きをわが主たらしめ給ふあかれ、さればわが玷あきものどかり

二四 て大なる愆をまぬかるゝをえん
 二五 エホバわが磐石が贖主よ、わがくちの言わがみゝろの思念かん

二六 ちのまへに候たるゝみどを得しめたまへ

ねおはくろエホバをやみの日にあんちにてたへヤコブのかみの名あんちを高にあげ

聖所より援助をあんちにおくりシオンより能力をあんちにあ
たへ

汝のものゝの献物けんぶつをみてゝろにどめ、あんちの燔祭ほんさいをうけた
よせんことをせう

ねむくのかんちのころの願望をゆるしなんちの謀略をみ
どく選しめたまはんとぞを

我儕なんぢの報によりて歎ひうたひ、われらの神の名によりて
 神をたてん、ねがふくハエホバ汝のものゝの求をせげしめた
 せんことを

われ今いまエホバの受じゆ育いく者しやをすくひたまふをし知しるるエホバのき
よき天てんより右みぎ手てなるすくひの力ちからにてかれに應こたへたゞごん

あるひに車をたのみ、あるひに馬をたのみとする者あり、さきぞ
われらのわが神エホバの名をとなへん
かきらの屈みまた作る、わきらの起てかたくたてり

第二十一篇 俗長にうたはしめたるダビデの

うた

エホバよ王のなんぢの力によりてたのしみ汝のすくひによりて奈何におほいなる歡喜をなさん
なんぢ彼をよろの願望をゆるしうのくちびるの求をいなみ
給はざりき、セシ

あつきたまもの主悪をもてうれを迎へまじりなきふがねの
 どもむもてうきの首にいたまうせ給ひたり

一 命をもどめしに汝こそをあたへてうの齡の目を世々々
 二 なんぢの救によりてうの榮光を得いなり、なんぢの尊貴と祿威
 三 どをうきに衣せたまふ
 四 うの之をどこしへに隠ひなるものとなし聖顔のまへの歡喜を
 五 もて樂しませたまへばなり
 六 王ハエホバに依頼し、いとたうき者のいつくしきを蒙るがゆゑ
 七 に動かさるゝみどなうらん
 八 なんぢの手はうのものろくの仇をたづねいだし、汝のまぎの手
 九 のあのを憎むものを探ねいだすべし
 十 なんぢ怒るときは彼等をもゆる爐のごとくにせん、エホバはけ
 十一 しき怒によりてうきらを吞たまはん、火にかきらを食ひつくさ
 十二 ん

十 汝かれらの畜を地よりはろばし、かきらの種を人の子のなかよ
 十一 りはろばさん
 十二 かきらの汝にむかひて惡事をくはだて違ふたき謀略をおもひ
 十三 まはせばなり
 十四 汝うれしむを背をむけしめ、うの面にむひて弓、箭をひらん
 十五 エホバは能力をあらはしてみづからを高くしたまへ、我憤ひな
 十六 んぢの祿威をうたひ且はめたまへん
 十七 第二十二篇 わけぼの鹿の調にあはせて俗
 十八 長にうたはしめたるダビデの歌
 十九 わが神わが神なんや我をすてたまふや、何なれば遠くはなきて
 二十 我をすくはず、わが歎きのたまをきき給はざるや
 二十一 あゝわが神われ豈よむれども汝こたへたまえず、夜よむれ
 二十二 どもわれ平安をえず

然^ニのあれイスツエルの讃美^{ツメ}のなうに住たまふものよ汝^{なん}のきよ
 し
 わ^ニのらの列祖^{レキゾ}のなんちに依^よ頼^{たの}めざりてら依^よ頼^{たの}みたればこそを
 助^{たす}けたまへり
 う^ニれら汝をよびて援^{たす}をえ汝によりたのきて恥を免^{ゆる}へることな
 かりき
 然^ニのあきどわれの蟲^{むし}にして人にあらず世^よにうしられ民^{たみ}にいや
 しめらる
 すべてわれを見^みるものわれをあさみわらひ口唇^{くちん}をうらし首^{くび}
 をふりていふ
 か^ハきわエホバによりたのめりエホバ助^{たす}くべしエホバかれを援^{たす}
 びたまふ故^{ゆゑ}にたすくべしと
 さ^ニきと汝^{なん}のわきを胎内^{はたい}よりいだし給^{たま}へるものなりわが母^{はは}のふ

ど^ニころにありしとき既になんちに依^よ頼^{たの}ましめたまへり
 我^{われ}うまれいでしより汝にゆだねらきたりわが母^{はは}われを生^うしと
 きより汝^{なん}のわが神^{かみ}なり
 わ^ニれに遠^{とほ}ざりたまふなれ患^{うれ}難^{がた}ちるづき又^{また}すくふものなけ
 ればなり
 あ^ニづくの牡牛^{おし}わきをめぐりバサンの力^{ちから}つよき牡牛^{おし}わきをゐて
 めり
 ろ^ニきら口^{くち}をあけて我^{われ}にむらひ物をあきさき吼^{こゑ}うたへ獅^しのこ
 とし
 わ^ニを水^{みづ}のこどくうとぎいださきわがもろくの骨^{ほね}のこづきわ
 が心^{こころ}の蠟^{ろう}のこどくなりて腹^{はら}のうちに銷^{しょう}たり
 わ^ニが力^{ちから}のわきて陶器^{たうき}のくだけのこどくわが舌^{かた}の酌^{しやく}にひたつ
 けりなんちわきを死^しの塵^{ちり}にふさせたまへり

一六 うの夫われをめぐり惡きものゝ群われをゐてみてわが手あよ
 一七 びわが足をさしつちぬけり
 一八 わが骨のふとく數ふるをりになりぬ惡きもの目をどめ
 一九 て我をみる
 二〇 あきらたがひにわが衣をわち我が去たきを圖にす
 二一 エホバよ速くはなき居たまふなあれわが力よぬおはくぬ速き
 二二 たうてわきを援けたまへ
 二三 わがたましひを劍より助けいだしわが生命を夫のたけきいき
 二四 得ひより脱れしめたまへ
 二五 足きを鮮の口また野牛けつのより救ひいだしたまへ、なんぢ我
 二六 にこたへたまへり
 二七 われなんぢの名をわが兄弟にのべつたへ、なんぢを會のな
 二八 るにて讃たふへん

二九 エホバを懼るゝものよエホバをはめたふへよ、ヤコブれもろも
 三〇 ろくの裔よエホバをわがめよ、イスラエルのもろくのすゑ
 三一 よエホバを畏め
 三二 エホバのなやむものゝ辛苦をかるしめ樂たまはず、みれに聖顔
 三三 をあはふことなくしてうの叫ぶときにききたまへばなり
 三四 大なる會のなゐにてわが汝をはめたふるの汝よりいづるな
 三五 り、わが抱ひしことよエホバをゐるゝ者のまへにてことく
 三六 く償はん
 三七 誦運者いくらひて飽とをえ、エホバをたづねもとむるものい
 三八 エホバを得めたふへん、願くなんぢらの心とこしへに生んこと
 三九 を
 四〇 地のはての者おもひいだしてエホバに歸り、もろくの國の族
 四一 のをな前にふしをさむべし

國の^{二八}エホバはものなき^{二九}なり、エホバの^{三〇}もろくの國人をすべ
 をさめたまふ
 地の^{三二}てえたるもの^{三三}皆くらひてエホバ^{三四}我を^{三五}ぐみ^{三六}底にく^{三七}だるも
 の^{三八}己^{三九}が^{四〇}たましひを^{四一}存^{四二}ふること^{四三}能^{四四}は^{四五}きるもの^{四六}皆^{四七}うのみまへ
 に^{四八}拜^{四九}跪^{五〇}らん
 た^{五一}の^{五二}裔^{五三}の^{五四}うちにエホバ^{五五}につ^{五六}る者^{五七}あらん^{五八}主^{五九}の^{六〇}こと^{六一}の^{六二}代々
 に^{六三}あ^{六四}たり^{六五}つた^{六六}へ^{六七}らるべし
 る^{六八}き^{六九}ら^{七〇}来^{七一}りて^{七二}此^{七三}の^{七四}エホバ^{七五}の^{七六}行^{七七}爲^{七八}なりとて^{七九}う^{八〇}の^{八一}義^{八二}を^{八三}後^{八四}に^{八五}う^{八六}ま^{八七}る
 と^{八八}民^{八九}に^{九〇}の^{九一}べ^{九二}つた^{九三}へん

第二十三篇 ダビデのうた

エホバ^二の^三わが^四牧^五者^六なり、わ^七き^八乏^九しき^{一〇}こと^{一一}あらじ
 エホバ^{一二}の^{一三}我^{一四}を^{一五}み^{一六}せ^{一七}りの^{一八}野^{一九}に^{二〇}ふ^{二一}さ^{二二}せ^{二三}い^{二四}こ^{二五}ひ^{二六}の^{二七}水^{二八}濱^{二九}に^{三〇}とも^{三一}な^{三二}ひ^{三三}た
 べ^{三四}ふ

エホバ^一の^二わが^三靈^四魂^五を^六い^七る^八し^九名^{一〇}の^{一一}ゆ^{一二}ゑ^{一三}を^{一四}も^{一五}て^{一六}我^{一七}を^{一八}た^{一九}ま^{二〇}し^{二一}き^{二二}路^{二三}に
 み^{二四}ち^{二五}び^{二六}き^{二七}給^{二八}ふ
 た^{二九}と^{三〇}ひ^{三一}わ^{三二}れ^{三三}死^{三四}の^{三五}あ^{三六}げ^{三七}の^{三八}谷^{三九}を^{四〇}あ^{四一}ゆ^{四二}む^{四三}とも^{四四}禍^{四五}害^{四六}を^{四七}あ^{四八}う^{四九}れ^{五〇}じ^{五一}、なん^{五二}ち
 我^{五三}と^{五四}とも^{五五}に^{五六}在^{五七}せ^{五八}ば^{五九}なり、なん^{六〇}ち^{六一}の^{六二}咎^{六三}なん^{六四}ち^{六五}の^{六六}杖^{六七}わ^{六八}きを^{六九}思^{七〇}む
 なん^{七一}ち^{七二}わ^{七三}が^{七四}仇^{七五}の^{七六}ま^{七七}へ^{七八}に^{七九}我^{八〇}を^{八一}た^{八二}め^{八三}に^{八四}籠^{八五}を^{八六}ま^{八七}う^{八八}け^{八九}、わ^{九〇}が^{九一}首^{九二}に^{九三}あ^{九四}ふ^{九五}ら
 を^{九六}う^{九七}ま^{九八}ぎ^{九九}た^{一〇〇}ま^{一〇一}ふ、わ^{一〇二}が^{一〇三}酒^{一〇四}杯^{一〇五}の^{一〇六}あ^{一〇七}ふ^{一〇八}る^{一〇九}ま^{一一〇}かり
 わ^{一一一}が^{一一二}世^{一一三}に^{一一四}あら^{一一五}ん^{一一六}限^{一一七}り^{一一八}の^{一一九}か^{一二〇}なら^{一二一}ず^{一二二}思^{一二三}惑^{一二四}と^{一二五}偶^{一二六}偶^{一二七}と^{一二八}われ^{一二九}に^{一三〇}う^{一三一}ひ^{一三二}きた
 ら^{一三三}ん、我^{一三四}の^{一三五}こ^{一三六}し^{一三七}へ^{一三八}に^{一三九}エホバ^{一四〇}の^{一四一}宮^{一四二}に^{一四三}す^{一四四}ま^{一四五}ん

第二十四篇 ダビデのうた

地^一ど^二ろ^三き^四に^五充^六る^七もの^八の^九世^{一〇}界^{一一}ど^{一二}ろ^{一三}の^{一四}中^{一五}に^{一六}す^{一七}む^{一八}もの^{一九}の^{二〇}と^{二一}皆^{二二}エホバ^{二三}の
 も^{二四}の^{二五}なり
 エホバ^{二六}の^{二七}う^{二八}の^{二九}も^{三〇}と^{三一}ゐ^{三二}る^{三三}を^{三四}大^{三五}海^{三六}の^{三七}う^{三八}へ^{三九}に^{四〇}置^{四一}て^{四二}れ^{四三}を^{四四}大^{四五}川^{四六}の^{四七}う^{四八}へ^{四九}に^{五〇}定^{五一}
 め^{五二}たま^{五三}へ^{五四}り

三 エホバの山にのぼるべきもの、御す、うの聖所にたつべき者の
 四 たさす
 五 手さよく心のさぎよき者うれたまし、虚きことを仰ぎれず、
 六 ず偽り、いひをせざるもれず、うの人なる
 七 かゝる人のエホバより祝福をうけ、うのすくひの神より義をう
 八 けん
 九 斯れど、さもれ、神を忘れたまふもれ、族類なり、ヤコブは神よな
 十 んち、聖顔をもとむる者なり、セラ
 十一 門よ、なんぢらの首をあげよ、とみしへの戸よ、あざれ、榮光の
 十二 王
 十三 王いりたまはん
 十四 え、いくわうの王、たれなる、ちのちをもちたまふ、猛きエホバ
 十五 なり、戦闘にたけきエホバなり
 十六 門よ、なんぢらの首をあげよ、とこしへの戸よ、あざれ、榮光の王い

十七 りたまはん
 十八 みの榮光の王、たれなる、萬軍のエホバ、是すえいくわうの王
 十九 なる、セラ

第二十五篇 ダビデれうた

一 あゝエホバよ、わがたましひに汝をあふぎ望む
 二 わが神よ、われなんぢを依頼めり、ぬがはく、わきに愧をぬはし
 三 めたまふなる、わが仇、われに勝る、ことなからしめたまへ
 四 實になんぢを俟望むもれ、はちしめられず、故なくして信をう
 五 じなふもれ、愧をうけん
 六 エホバよ、あんぢは大膽をわれにぬめし、なんぢは徑をわきにを
 七 しへたまへ
 八 我をなんぢの真理にみちびき、我ををしへたまへ、汝はわがすく
 九 ひは神あり、われ終日、なんぢを俟望む

六 なんぢはあはれみと仁慈といひにしへより絶すあり。エホバよ
七 七 色を思ひいだしたまへ
八 わがわがきときれ罪どわが愆といふもひいでたまふなれ。エ
九 ホバよ汝れめをまはれ故あなんぢは仁慈あまたがひて我をおも
十 ひいでたまへ

八 エホバのめを深くして直くましませり。斯るがゆゑお道を
九 みびとををしへ
十 証だるものを正義おもちびきたまはん。うれ道をへりくだる者
十一 あまめしたまはん

十 エホバはもろくは道いろけけいやくと諛詞をまもるもれ
十一 あり仁慈なり異理なり
十二 わが不義のあつたなり。エホバよ名のために之をゆるしたまへ
十三 エホバをえらるゝ者のたきなる。之のうけえらふべき道を志

二 二 めしたまはん
三 三 ありる人のたましいの平安おすまひ。うれ畜のくおをつぐべし
四 エホバは親愛の。エホバをえらるゝ者どもおあり。エホバのう
五 れ契約をかきらお重したまはん

二 二 わが目のつねおエホバ。おむのふ。エホバわがあしを網よりどり
三 三 いだしたまふ可れをなり
四 四 ねがはくは歸りきたりて我をあはれまたまへ。われ獨わびしく
五 五 また苦しみをるなり

二 二 願くはわが心けうきへをゆるめ我をわきはひより脱れしめ
三 三 たまへ
四 四 わが患難わが辛苦をのへりみ。わがすべては罪をゆるしたまへ
五 五 わが仇をみたまへ。われらに難いおはし情なき憐れをもてわを
六 六 にくめり

わがたましひをまもり我をたすけたまへ、われ小愧をかはしめ
たまふなれ、我なんぢに依頼めをなり

われあんちを俟望む、ねがはくは完全と正直とわれをまもれ
し

神よすべては憂よりイスマエルを贖ひいだしたまへ

第二十六篇 ダビデの歌

エホバよ、ねがはくはくわれを鞠きたまへ、われは完全によりて
あゆみたり、然のみならず我たゆたはずエホバに依頼めり

エホバよ、是れを糺したまは試みたまへ、わが腎どころどを録さ
よめたまへ

うの汝のいつくしみわが眼前にあり、我なんぢの眞理により
てあゆめり

是れは虚しき人どもに座らざりき、怨をいつはりかざる者ど

どもにのゆかじ
惡を亦すもの、會をにくき惡者どもにすわることをせじ

われ手をあらひて罪なきをあらはず、エホバよ指てなんぢの祭
壇をめぐり

感謝のこゑを聞えしめ、すべてあんちの奇しき事をのべつたへ
ん

エホバよ、我あんちのまします家どなんぢが榮光のまする處
をいつくしむ

願くはわがたましひを罪人どもに、わが生命を血をなす者
どもに、取取めたまふなかれ

かゝる人の手にあはさくはだてあり、うの右の手の手、助臨にて
みつ

さきどわきのわが完全によりてあゆまん、願くはわれをあがな

十二 ひ我をあはきみたまへ
わがあしは平坦なるどころにたつ、われもろくの會のなかに
てエホバを讃まつらん

第二十七篇 ダビデの歌

一 エホバのわが光見お救あり、わき誰をかあうれん、エホバのわが
生命のあからなり、わが懼るべきものいたきや
わきの敵われの仇あるあしきもの、蟻ひきたりてわが肉をくら
はんとせしが、獸きかつ作きたり
二 縦ひいくさひと然をつらねて我をせむるどもわが心あうれし
たどひ戰ひあてりて我をせむるども我にさは持あり
三 われ一事をエホバにこへり我これをもどむ、われエホバの美し
きを仰ぎうの宮をまんがためにわが世にあらん限り、エホバ
の家にするまんどふう願ふかき

四 エホバのあやみの日にうの行宮のうちに我をひうませうの幕
屋のあくにわきをかくし、巖のうへに我をたかく置たまふべけ
れバあり

五 今わが首のわきをめぐる仇のうへに高くあげらるべし、この
故にわきエホバのまぐやにて歡喜のろかへものを獻ん、わきう
たひてエホバを得めたとへん

六 わが聲をあげてさけぶときエホバよきと給へ、また憐みて
われに應へたまへ

七 あんちらわが面をたづねもどめよ、斯る聖言のありしときわ
が心あんちにむかひてエホバよ我あんちの聖顔をたづねんと
いへり

八 ねおはく聖顔をかくしたまふおかれ、怒りてあんちの僕をど
はさけたまふおられ、汝のわれの助あり、慰わがすくひの神よ、わ

十 色を愛ひいだし我をすてたまふなかき
 わる父母わきをすつるどもエホバわきを造へたまはん
 十一 エホバよなんぢの途をわれにをしへわが仇のゆゑに我をたひ
 ちかなる途にまぢびきたまへ
 十二 いつはりの譚をなすもの暴厲を吐も我にさあひて起りた
 ても願くはわれを仇にわたしてうれ心けまゝに爲しめたまふ
 なれ
 十三 われもしエホバの恩寵をいけるもけし地にて見るに特なら
 ざしうバ奈何や
 十四 エホバを俟望すめ雄々しあれ汝はこゝろを堅うせよ必ずやエ
 ホバをまぢれすめ
 第二十八篇 ダビデは歌ふ

一 あゝエホバよわれ汝をよむんわが誓よねおそくは我にむりひ
 二 墓に在るものどひとしうらん
 三 わき汝にむりひてさけび聖所は奥にむりひて手をあぐるとき
 四 わが懇求のこゑをききたまへ
 五 あしき人また邪曲をあこなふ者どもに我をとりてひきゆ
 六 き給ふなりれうきらうは隣にやはら死をうたれども心に
 七 殘害をいだけり
 八 うは事にあたがひうのなす惡にまたおひて彼等にあたへうは
 九 手は行爲にしたおひて與へこれにうれ受べきものを報いたま
 十 へ
 十一 うきらひエホバれもろくは事どうは手はなしわざをうへ
 十二 りますこれ故にエホバうきらを毀ちて建たまふことなからん

エホバのわが力ちからが盾たもとなり、わがこゝろこれに依頼よたのみたれば我
たすけをえたり、然るゆゑにわが心いたくよろこぶ、われ歌をも
てほめまつらん

エホバのうけ民たみはちうらなり、うけ受うけ音者おとこはよくひは城しろなり
なんなれ民たみをすくひ、なんなれ嗣業あとがをさきはひ且かつこををやしな
ひ之これをどしなへに懷いだきたすけたまへ

第二十九篇 ダビデは歌

あんちら神かみれ子こらよエホバに献ささげまつれ榮さかと能ちからとをエホバに
ささげまつれ

うけ名なにふさはしき榮光さかひのりをエホバにささげ奉ほうれ、きよき衣きぬをつ
けてエホバを拜まつまつれ

エホバはまてゑの氷こほりれうへにあり、えいくわうれ神かみの雷いかづちを
どろりせたまふ、エホバの大氷おほいのかみれうへにいませり

エホバは聲こゑのちからあり、エホバはみてゑの後威かゐあり

エホバはまてゑの香柏かふさく茂さかをりくなく、エホバはレバノンレバノンれかう之
くを折をりくだきたまふ

これを續つづはこどくをせらせレバノンレバノンとシリオンシリオンとをわかき野の
牛うしれこどくをどらせたまふ

エホバはみてゑの火ひの焰はをわうけ

エホバはまてゑの野のをふるのせエホバのカデレカデレは野のをふるの
せたまふ

エホバはみてゑの鹿かに子こをうませ、また林木はやしをはだかにす、うけ
宮みやにあるすべてはもの呼よはりて榮光さかひあるかきといふ

エホバの洪水こうすいれうへに坐ましたまへり、エホバの寶座たけくらにさし
て永遠とこしへに王わうたり

エホバのうけ民たみにちあらをあたへたまふ、平安やすみをもてうけ民たみを

さきはひたまへん

第三十篇 歌をささぐるときに誦へるダビデ

けうた

エホバよ是れ汝をあがめん、かんぢ我をあみしてわが仇はわが
ことによりて喜ぶをゆるし給へさればあり

わが神エホバよ、われ汝によをよれば汝をいやしたまへり

エホバよ汝わがたましひを陰府よりあげ我をおがらへしめて

墓にくだらせたまへざりき

エホバは聖徒よ、エホバを得めうたへ奉れ、きよき名に感謝せよ

うた怒れたまふをしにてうた恵のいけちどもにあがし、夜の

よもすがら泣かみしむども朝にいよろこびうたへん
われ安けかりしときに謂く、どこしへに動かさるゝことかあら

七

エホバよかんぢ恵をもてわが山をかたく立てたまひき、然いあ

八

エホバよわれ汝によをよきり、我ひたすらエホバにわがへり

九

われ墓にくだらばわが血赤にの益あらん塵のかんぢを讃た

十

エホバよ聴たまへ、われを憐れたまへ、エホバよ願くわが助

十一

なりたまへ
なんぢ踴躍をもてわが哀哭にかへ、わが露服をとき歡喜をもて

十二

わが帯とまたまへり
わが榮をもてはめうたひつゝ黙すことかからんためあり、わが

神エホバよ、わが永遠になんぢに感謝せん

第三十一篇 伶長にうたひしめたるダビデ

うた

一 エホバよわれ汝によりたれむ、願くはいづれれ日までも愧をお
 二 へしめたまふおかれ、なんぢは義をもてわを助けたまへ
 三 かんぢは耳をきたふけて達しにわをすくひたまへ、願くはわ
 四 がためにかたき難となり我をすくふ保障は家とありたまへ
 五 かんぢはわが難を救ひて、されば名はゆゑをもてわれを引わ
 六 れを導きたまへ
 七 かんぢ我をかれらに密かにさうけたる網よりひきいだしたま
 八 へ、かんぢはわが保者なり
 九 われ靈魂をかんぢは手にゆだね、エホバよこぞは神よ、なんぢは
 十 われを贖ひたまへり
 十一 われはいのちよりけ虚きふとに心をよする者をにくむ、わをい獨
 十二 エホバによりたれむなり
 十三 我がかんぢの憐憫をよろみびたれしさん、かんぢはわが難を救

一 へりみ、わがたましひは禍害をしり
 二 われを仇れ手にとちてめしめたまはず、わが足をひろきどころ
 三 に立たまへばなり
 四 わき迫りくるしめり、エホバよ我をあはれきたまへ、わが目のう
 五 へによりておどろふ靈魂も身もまた喪へぬ
 六 わが生命のかおしきによりて消えゆき、わが年華はなげきによ
 七 りて消ゆけばなり、わが力のわが不義によりてたどろへ、わが骨
 八 のわれえてたり
 九 わきもろく、れ仇ゆゑにうしらる、わが隣にわけて甚だし相
 十 識もれに思憚らる、憐れにてわれを見るもれ避てけがる
 十一 わきの死するもれとてく忘られて人れとるに置れず、わを
 十二 のやぶきたる器もれとてくなれり
 十三 うの我おはくは人れうしりをきと到るどころお懼あり、うれら

我にさうらひて互おはありしが、いのち生命をさへどらんと企てたり

されどエホバよわれ汝によりたれめり、また汝のわが神なりといへり

わが時のすべてなんぢ手にあり、わがくわれを仇れ手よりたすけ、おほこれに追迫るもれより助けいだしたまへ

さんぢの僕れうへお聖顔をのまやうせ、さんぢは仁慈をもて我をすくひたまへ

エホバよわれお仇をおはしめ給ふおかれうの我なんぢをよべばなり、おほ聞くのあしきもれお恥をうけしめ陰府にありて口をつぐましめ給へ

傲慢と輕侮をもて義きもれおむりひ張りおれよしるいつはりの口唇をつぐましめたまへ

汝をおうるよ者はためおたくはへ、なんぢお依頼むれよためお人の子はまへおて得とふしたまへる汝のいつくしみの大おるおな

汝のれらを御前なるひうのなる所にのくして人け謀害よりおぬかれしめ、また行宮れうちにひうませて吾れあらうひをさけしめたまはん

讃べきかなエホバの堅固なる城なりおて奇しまるよばありの仁慈をわれに顯したまへり

わが驚きあわてよいへらく、さんぢは目れまへより絶れたりど、然ぞわが汝よびもどめしとき汝わがねがひは壁をきよたまへり

なんぢらもろくは聖徒よエホバをいつくしめ、エホバの眞實あるもれをまもり傲慢者おちもく報を得てこしたまふ

すべてエホバを俟望むもれよ。進々しめられ、なんぢら心をあたうせよ。

第三十二篇 ダビデは調翰せうた

一の 怨をゆるされ、その罪をきり、同はきしめられ、福ひあり。
 二の 不義をエホバに負せられざるも、心にいのちはりなき者のいさいはひなり。
 三の 我いひあはさざりしとき、終日かなしみさけびたるが故、わが骨ふるひあどろへたり。
 四の なんぢの手によるも、霊もわがうへありて重し、わが身は潤澤ひかはりて、夏の旱れごとくなれり。
 五の 斯てわれなんぢに前わが罪をあらはし、わが不義をあははさざりき、我いへらくわが怨をエホバに、いひあはさんど、期るときしも、汝わが罪の邪曲をゆるしたまへり。
 六の されば神をうやまつ者、なんぢに遇てをうべき間、なんぢに祈らん、大水あふれ流るゝとも、うけ身におよむじ。
 七の 汝いわがくるべき所あり、さんち患難をふせきて、我をよもり救へうたをもて、我をのこみたまはん。
 八の われ汝を救し、汝をあゆむべき途にまちびき、わが目をなんぢに注ぎて、さとしん。
 九の 汝等わがまへなき馬、れごとく、驢馬れごとくなるなうれ、かれらに、鎗たづかれ、ごとき具をもて、ひきどめず、近づきよたること、おし。
 十の 惡者の、かおしみ多あれ、エホバに依頼むもの、憐愍にてりて、まれん。
 十一の たゞしき者よ、エホバを喜びたのしめ、凡てこゝろの直きも、れよ、喜びよ、とふべし。

第三十三篇

たきしき者よ、エホバによりてよろめ、讚美のきはきもれに適
 はしきあり
 琴をもてエホバに感謝せよ、十絃はこどもをもてエホバをほめう
 たへ
 あたらしき歌をエホバにむかひてうたひ、歡喜の聲をあげてた
 くみに琴をうきあらせ
 エホバはみこどもに直くうたすべて行ひたまふところ眞實か
 ればなり
 エホバの義と公平とをこのまたまふうの仁慈にあまねく地お
 そつ
 もろく、天の、エホバはみこどもによりて成てん、萬軍の、エ
 ホバは口、に氣によりてつくちきたり

エホバのうみの水をあつめてうづだかくし、深淵を庫をさめ
 たまふ
 全地のエホバをあられ、世おすめるもろく、人、エホバをお
 ちりしこむべし
 ろい、エホバ言たまへば成り、おほせたまへば立る、おゆゑなり
 エホバはもろく、は國はうりこどもを虚くし、もろく、は民は
 おもひを徒勞にたたまふ
 エホバの謀略はどこしへに立ちうたてこころは、おもひに世々
 おたつ

エホバをおの神とする國のさいはひなり
 エホバ、嗣業にせんとて撰ひたまへるもの民のさいはひなり、エ
 ホバ、天よりうりこひてすべて、人の子を見
 ろの在すところより地にすむもろく、の人をみたまふ

一五 エホバのすべてをきらの心をつくり、うれ作ところをこどく
く鑒みたまふ

一六 王者いくさびと多をもて救をえず勇士ちあら大なるをもて助
をえざるあり

一七 馬のすくひお益なく、うの大なるちからも人をたすくことな
あらん

一八 腕よエホバは目のエホバをみるもの並うは憐憫をけずむ
もけうへにあり

一九 此のかれらのたましひを死よりすくひ饑餓たるときおも世に
おさるへあめんむためなり

二〇 われらのたましひのエホバを俟望めり、エホバのわれらの援わ
れられ居なり

二一 われらのきよき名およりたれめり、指てすわれらの心のエホバ

二二 にありてよろこばん

二三 エホバよわれら汝をまちのすめり、これに循ひて憐憫をわれら
のうへに垂たまへ

第三十四篇

ダビデ、アヒメレクにまへにて狂
へる狀をなし返れていでさりし
ときに作れるうた

二四 われつねにエホバを祝ひまつらん、うれ願詞のわが口にたまふ

二五 わがたましひのエホバによりて誇らん、謙だるもれい之をきく
てよろこまん

二六 わきとよもにエホバを崇めよ、われらどもにうれ名をあげたま
へん

二七 わきエホバを尊ねたればエホバわれふてたへ我をもろくの
畏懼よりたすけいだしたまへり

五 あれらエホバを仰ぎの予にて光をかうふまじ、あれらの面はこ
 六 ちあゝらむことなし
 七 これ苦しむもれ叫びたればエホバこれをきゝ、うのすべての患
 八 難よりすくひいだしたまへり
 九 エホバの使者ハエホバをあらるゝ者のまはり小營をつらねて
 十 これをばく
 十一 なんぢらエホバの恩恵ふるきを嘗ひえれ、エホバによりたのむ
 十二 者のさいはひなり
 十三 エホバの聖徒よエホバをあられよエホバをあらるゝものには
 十四 乏きことなればなり
 十五 わるき獅のともしく志て饑ることあり、されどエホバをたづぬ
 十六 るものゝ嘉物あかくるふどあらじ
 十七 子よきたりて我あきけ、われエホバを畏るべきことを汝等あを

一 しへん
 二 祖祖をみんなためお生命をまたひ存へんふとこのむ者いた
 三 きや
 四 なんぢの舌をあさへて惡あつうしめず、なんぢの口唇をあさへ
 五 て虚偽をいはさらしめよ
 六 惡をはなれて善をあてなひ和睦をもどめて切あこのみどを勉
 七 めよ
 八 エホバの目いたしきものをあへりみ、うの耳いりきらの號呼
 九 あゝたふく
 十 エホバの聖顔のあくをなす者あひひてうの跡を地より斷滅
 十一 したまふ
 十二 義者さけびたればエホバ之をきゝてうのすべての患難よりた
 十三 すけいだしたまへり

一八 エホバの心のいたみのなしめる者にちりく在してたましひの
 悔^{くわい}願^{がん}れたるものをすくひたまふ

一九 たましきものの患難^{えんなん}あはれし、されどエホバのみなるの中よりた
 十 すけいだしたまふ

二〇 エホバの恵みおすべての骨をまもりたまふ、うの一つだに折る
 二一 ることなし

二二 惡いあしきものをこそろさん義人をかくむもの刑^{けい}なはるべし
 二三 エホバのうの仇^{あいつ}等のたましひを願ひたまふ、エホバに依頼^{たのま}む
 二四 のい一人だにつまなはるゝことなうらん

第三十五篇 ダビデのうた

一 エホバよねがはくハ我^{われ}あわらうふ者とあらうハ我どたまふ
 二 ものど戦^{たたか}ひたまへ

三 千^{せん}ど大盾^{おほよろこ}とをとりてわが援^{たすけ}あたちいでたまへ

四 戦^{たたか}をぬきいだしたまひて我^{われ}あはせまるものゝ途をふさぎ且^{かつ}
 五 わが靈魂^{たましい}あわれなんぞの救^{すく}なりといひたまへ

六 願^{ねが}くハわが靈魂^{たましい}をたづぬるものゝ恥^{はぢ}をえていやしめられ我^{われ}を
 七 うこなはんと謀^{はか}るものゝ退^ひけらきて愼^{おそ}てふためらんことを

八 ねがえくハわれらが風のまへなる標^{めがね}標^{めがね}のこどくなりエホバの
 九 使者^{つかい}にあひやられんことを

一〇 願^{ねが}くハわれらの途をくらくし滑^{すべ}りにしエホバの使者^{つかい}にわれ
 一一 らを避^{よこ}ゆあしめたまへんことを

一二 めきらハ故^{ゆゑ}なく我をどらへんとして網^{あみ}をわなふせ故^{ゆゑ}なくわが
 一三 靈魂^{たましい}をうこなはんとて閉^とをうがちたればなり

一四 願^{ねが}くハわれらが思^{おも}ひよらぬ間に得^えろひきたり己^{おのれ}がふせたる網^{あみ}
 一五 あどらへられ自らうの誠^{まこと}あおちいらんことを

一六 然^{しか}どきわが靈魂^{たましい}ハエホバよりてよろこびうの救^{すく}をもて樂^{よろこ}し

十 まん
 わるすべての骨のいはん、エホバよ汝のくるしむものを之にま
 さりて力めよきものより並くるしむもの賞しきものを掠めう
 をふ者よりたすけいだしたまふ、誰のなんちに比ふべき者あら
 んど
 十一 こゝろあしき證人あてりてわが知ることを詰りどふ
 十二 あれらの惡をもてわが善あむくい我がたましひを俵使なきも
 のとせり
 十三 然とわれられらが病しどきに露服を明け糧をたちてわが靈
 魂をくるしめたり、わが厭ふどころにあらへり
 十四 わがわれお作るこどわが友わが兄弟あことならず母の喪に
 ありて痛哭がごとく哀しもうなたきたり
 十五 然とわれらのわが倒れんどせしとき喜び何せひわが知さりし

十六 とき匪類あつたりきたりて我をせめ、われを裂てやめざりき
 うきらの酒宴あて騒ぎこどをのゑる嘲笑者のごとく我おひか
 ひて齒をのみならせり
 十七 まよいたづらお見るのみおして幾何時をへたまふや願くわ
 がたましひの彼等に得ろばさるゝを脱れしめ、わが生命をわろ
 き獅よりまぬられしめたまへ
 十八 われ大なる會あありておんちに感謝し、おはくの民のなかへて
 汝を得めたまへん
 十九 虚偽をもてわれお仇するものゝわが故あよろこぶことを容し
 たまふおの故あくして我をにくむ者のたがひに胸せするこ
 どなうらしめたまへ
 二十 のまらの平安をのたらず、あざむきの言をつくりまうけて國內
 おあだやあらふずまふ者をうてなせんと謀る

然のミからす我にむうひて口をわけひろげ、あゝ親よや親よや
われらの眼これをみたりといへり

エホバよ汝すでにこれを觀たまへり、ねがえくハ黙したまふか
うれ主よわきに達うりたまふなかき

わが神よわが主よ、おきたまへ醒たまへ、ねがえくハわがために
審判をせし、わが訟をさめたまへ

わが神エホバよ、なんぢの義にあたがひて我をさきたまへ、わ
が事ふよりてわれらハ歡喜をえしめたまふなかれ

のきらにうの心裡にて、あゝこゝちよきか幸よこきわが願ひ
しどころありといはしめたまふかかれ、又われちかれを吞つく

せりといはしめたまふかかれ
願くハわが害なハるゝを喜ぶもの、皆はちて惶てふためき、我ハ
むらひてはこりのふ育ふるもの、憐れむはづりしめどを衣んふ

七

わが義をよみする者をばよろこび、誤はしめ大かゝるの幸エホバ
の僕のさいはひを假びたまふ、恒ふいはしめたまへ

わが舌ハ終日、かんぢの義とかんぢの譽とをうたらん
第三十六篇 俗長にうたはしめたるエホバの

僕ダビデのうた

あしきものゝ懲ハわが心のうちあかたりて、うの目のまへハ神
をあろるゝの畏あることなしといふ

うれハあのが邪曲のあらはるゝこと、かく憎まるゝこと、あきら
んきて自うらうの目にて、認る

うの口のこと、むハ邪曲と虚偽となり、智をこむミ善をおみなふ
ことを息たり

かつろの寢床にてよこし、さかる事をはうり、よりらぬ途にたち

とまりて惡をきらはず

エホバよあんちの仁慈いつくしみの天にあり、なんちの眞實まことの雲にま

であふ

六 汝のたましきの神の山のごとく、なんちの審判さぎのあけいなる淵ふち

なり、エホバよあんちの人のごとく、なんちの守護まもりたまふ

七 神よあんちの仁慈いつくしみのたふときか、人の子いなんちの翼つばさの蔭かげに

さげせころを得

八 なんちの星のゆたかなるふよりてことごとく飽あことをえん、な

んちのちの歡樂よろこびのゐその水をゐきりに飲のみしめたまへん

九 ういいのちの泉いなんちに在り、われらいなんちの光ひかりふよりて

光をみん

十 ねがはくいなんちを知るものにたえず憐憫あはれみをほどこし心こころなほ

き者ゐたへす正義よきことを得とこしたまへ

十一 たかふるものゝ足あしわれをふみ、惡きものゝ手てわれを逐去おはなふをゆ

るし給ふなれ

十二 邪曲よこしまをゐてなふ者いふしに仆たふれたり、うれら打伏うちふられてまた

起ことゐたひさるべし

第三十七篇 ダビデのうた

一 惡をさすものゝ故ゆゑをもて心をあやめ、不義よきことをゐてあふ者あひか

ひて城むらをゐてすなりれ

二 かきらのやがて草のごとくかざどられ、青菜あきなのごとく打萎うちしるべ

ければかり

三 エホバによりたのきて善よきことをゐてなへ、ふの國くにあどまり眞實まことを

もて糧かてとせよ

四 エホバふよりて歡喜よろこびをなせ、エホバいなんちが心のねがひを汝

ゐあたへたまはん

八 なんぢの途をエホバにゆだねよ、彼よりたのまば之をなしと
 九 げ
 十 光のごとく、なんぢの義をあきらめ、おし午日のごとく、なんぢの
 十一 途をあきらめ、おししたまへん
 十二 なんぢエホバのまへに口をつぐみ、忍びてこれを俟望め、あのが
 十三 途をおゆみて、榮るものゝ故をもて、あしき謀略をどくる人のゆ
 十四 惑をもて心をなやむるあられ
 十五 怒をやめ、忿怒をすてよ、心をあやむるあられ、これ惡をあみふ
 十六 方、あうつらん
 十七 うに惡をあて、あふものゝ斷滅さき、エホバを俟望むものゝ國を
 十八 つぐべけれ、ばかり
 十九 あしきものゝ久しからずしてうせん、なんぢ細密にうの處をあ
 二十 もひみることもある、みよ、なからん

十一 さてと誣だるものゝ國をつぎ、また平安のゆたかなるを樂まん
 十二 惡きものゝ義きものにさからえんとて、謀略をめぐらし、之にむ
 十三 かひて切齒す
 十四 主にあしきものを笑ひたまへん、かきが日のきたるを見たまへ
 十五 ばなり
 十六 あしきものゝ劍をぬき、弓をはりて苦しむものゝ貧しきものと
 十七 蔑たふし、行ひな得きものを殺さんとせり
 十八 さきさきの劍のあのが胸をさじ、弓のをらるべし
 十九 義人のもてるものゝすくなき、多くの惡きものゝ豊かなるにま
 二十 されり
 二十一 ろの惡きものゝ臂ををらるれば、エホバの義きものを扶持たま
 二十二 へばなり
 二十三 エホバの完全ものゝもろくの日をえりたまふ、かゝらの嗣業

一六 にかぎりなく久しからん
 一七 かれらの禍害にあふどき愧をゑぞす饑饉の日にもわくことを
 一八 得ん
 一九 あしき者のほろびエホバのあたの牧場のさかえの枯るがごと
 二〇 くうせ煙のごとく消ゆかん
 二一 あしき者のものかりて償はず義きものの恵ありて施しあたふ
 二二 神のごとけきたまふ人の國をつぎ神れのろひたまふ人の斷滅
 二三 さるべし
 二四 人のあゆみのエホバによりて定めらるうのゆく途をエホバよ
 二五 ろてびたまへり
 二六 縦ひうの人たふるよごごありども全くうちふせらるよごごな
 二七 しエホバかれが手をたすけ支へたまへばなり
 二八 わきむかし年わかくして今あいたれき義者のすてられぬう

一六 の膏の糧をひありくを見しことなし
 一七 たましきものの終日めぐみありて貸わたふうの膏のさいとい
 一八 なり
 一九 惡をはなれて善をなせ然ばなんちの住居どこしへならん
 二〇 エホバの公平をこのみうの聖徒をすてたまえさればなりかき
 二一 らの永遠にまもりたすけらるれと惡きものゝすゑの斷滅さる
 二二 べし
 二三 たましきものの國をつぎうの中にすまひてどこしへに及まん
 二四 たましきものゝ口の智慧をかたりうの舌の公平をのふ
 二五 かれが神の法うのこゝろあありうのあゆみの一歩だにすべ
 二六 ることあらじ
 二七 あしきものの義者をひうみうかまひて之をころさんとはかる
 二八 エホバの義者をあしきものゝ手にのこしおきたまえず審判の

二四 ときに聞きこひたまふことありし

エホバを俟望さいぼうみてうの途みちをまもれ、さらば汝なんぢをあけて國くにをつが

三三 せたまへん、なんぢ惡者あしきもののたちはろばさるゝ時ときにふれをみん

我われあしきものゝ猛はげくしてとびこざるを見るに生立なまたる地にさ

三六 かえあげざる樹きのごとし

然しかれどもかれの道みちゆけり、殿やまたちまちに無ななりぬ、われ之これをた

三七 づねしかせ遇あはれしことをえざりき

三八 完人かんじんに自みづかをろゝき眞人まじんをみよ、和平わへいなる人ひとに後のちあれど

罪族つみぞくをかすものらに共にはろばされ惡わるきものゝ後のちいかならず

三九 斷ことわるべけきばなり

たましきものゝ救すくひエホバよりいづ、エホバのかれらが辛くる苦しみの

四〇 ときの保たも護ごなり

エホバのかれらを助たすけかれらを解と救きうちたまふ、エホバのかれら

を惡者あしきものよりときとなちて救すくひたまふ、かれらのエホバをうの遇あは

所ところとすればなり

第三十八篇 記念きねんのためにけくれるダビデの

一 エホバよねがくくの忿怒いんごをもて我をせめ、はげしき怒いをもて我

二 をこらしめ給ふなかれ

三 なんぢの矢やわきにあたり、なんぢの手てわがうへを壓おさへたり

四 なんぢの怒いかでかによりてわが肉にくに全ことごとくなく、わが罪つみによりて

五 わが骨ほねに健いかなるどころなし

六 わが不義ふぎの首くびをすきてたかく重荷おもなのごとく負おがたければなり

七 且またれ愚かなるによりてわが傷きずあしき臭におをはなちて腐くされたとれ

八 たり

九 わを折屈よこしましていたくあげきうきたれたり、わを終日しゅうじつかあしとあり

七 わが腰のこどくく焼るがごとく肉に全きとみろなければ
 八 我あどろへて甚くきずつけられ、わが心のやすらざるによ
 九 りて歎歎さけべり
 十 あゝ主よわがすべての願望のなんちの前にあり、わが嘆息のな
 十一 んちに隠るゝことなし
 十二 わが胸茂せりわが力あどろへ、わが眼のひうりも亦わをばな
 十三 れたり
 十四 わが友わが頼めるものわが魂をみて逃にたち、わが隣もまた
 十五 遠うりてたてり
 十六 わが生命茂たづぬるもの、路をまうけ我をうてなえんとする
 十七 もの、忍言、哀いひ、また終日たをありを謀る

一 然にかきせわれの罪者のおどくきかず、わきの口をひらかぬ、
 二 者のごとし
 三 如此わきのきかざる人のごとく口にとおげせぬ人のごとき
 四 なり
 五 エホバよ我なんちを俟望めり、主わが神よなんちかならず答へ
 六 たまふべければなり
 七 わき養にいふ、あうらくのかきらわが事によりて喜び、わが足の
 八 すべらんどき我にむかひて誇りかにたふふらんど
 九 われ休るゝむかりになりぬ、わが悲哀いたえずわが前にあり
 十 うの我みづから不義をいひあらとし、わが罪のためになしめ
 十一 ばなり
 十二 わが仇のいきとたらきてたけく、故なくして我茂うらむるもの
 十三 あ得し

二十 惡をもて善にむくゆるものいわけ善事にあたがふが故にわが
仇どなきり

二一 エホバよねがとく我炭となれたまふなかれわが神よわきに
遠かりたまふなかき

二二 主わがすくひよ遠きたりて我をたすけたまへ

第三十九篇 伶長 エドトンにうたえしめたる

ダビデのうた

一 われ義にいへりわれ石をもて罪戾をかきよらんために我すべ
ての途をつよしと 惡者のわがまへに在るあひだわが口に街

をかけんと

二 われ黙して啞となり善言すらことをにいださずわが憂なほ未

三 わが心わがうちに熱しおもひつゝくるは世に火もえぬればわ

れ舌をもていへらく

四 エホバよ願くわが終ぞわが日の數のいくとくなることを知し
めたまへわが無常をあらしめたまへ

五 觀よなんぢわがすべての日を一掌にすぎさらしめたまふわが
いのち主前あていなきおこなならず實あすべての人のみなう

六 の盛時だおもひなしあらざるいなしセラ

七 人の世にあるの影にこそならずうの思ひなやむこといひなし

八 からざるなじうの積蓄ふるものいたが手にをさるるをあらす

九 主よわれ今なにをこまたんわが望みなんぢにあり

一〇 ねがとく我をすべての愆より助けいだしたまへ愚かなるも

一一 のに誇らるゝことなからしめたまへ

一二 われの黙して口をひらかず此いなんぢの成したまふ者かれバ
なり

十 願くはなんぢの責をわれよりはちちたまへ我なんぢの手にう
 ちこらざるまふよりて亡ぶるをかりになりぬ
 十一 さんぢ罪をせめて人をこらしうの恵ひよろこふところのものを
 靈のくらふがごとく清うせしめたまふ實にもろくの人の
 十二 びなしからざるなし、ヤウ
 十三 あゝエホバよねがごとくわが祈をききわが號呼に耳をかたふ
 けたまへわが涙をみて黙したまふなかれわれなんぢに寄る
 旅客すべてわが列祖のごとく宿れるものなり
 十四 我こそを去てうせざる先になんぢ面をうむけてわれを爽快な
 らしめたまへ

第四十篇 俗長にうたえしめたるダビデの

一 我たへしのびてエホバを俟望たり、エホバ我にむらひてわが

二 號呼をききたまへり
 三 また我をはろびの朋より泥のなかよりとりいだしてわが足を
 磐のうへにおきわが歩をかたくしたまへり
 四 エホバのあたらしき歌をわが口にいられたまへり此のわきらの
 神にささぐる讚美なり、おほくの人のこきを見てたうれ、かつエ
 ホバによりたのまん
 五 エホバをあのが頼となし高るものによらず虚偽にかたふく者
 六 によりざる人のさいはひなり
 七 わが神エホバよなんぢの作たまへる奇しき迹を、われらにむか
 八 ふ念といひおほくして汝のたまへあつらぬいふことあたはず
 九 我こそをいひのべんとすれどろの數かすふることあたはず
 十 なんぢ犠牲と祭物とをよろこびたまはず汝わが耳をひらきた
 十一 まへり、なんぢ燔祭と罪祭とをもとめたまはず

七
ろのとき我いへらく、涙よわれきたらんわがことを書の卷にま
るしたり

八
わが神よわれの聖意にまたおふことを樂む、なんちの法のわが

九
心のうちにありと

われ大なる會にて義をつけしめせり、涙よわき口唇をどちす、エ

ホバよなんち之を去りたまふ

十
われなんちの義をわが心のうちにひめあらず、なんちの眞實と

なんちの拯救とをのべつたり、我なんちの仁慈となんちの

眞理とをお得いなる會にかくさまりき

十一
エホバよなんち憐憫をわれをじまたまふなれ、仁慈と眞理

とをもて恒にわれを去りたまへ

十二
うのかうへがたき禍害わきをうこそ、わが不義われに追及てあ

よぎみると能はぬまでになりぬ、うの多きとわが首の髪に

もまさり、わが心きえうするをりなればなり

十三
エホバよ願くわれをすくひたまへ、エホバよ急ぎきたりて我

をたすけたまへ

十四
願くわが靈魂をたづねはろぼさんとするもの、皆はぢあわ

てんことを、わが害とるゝをよろてふものゝみな後あまりき

て恥をおはんことを

十五
わきにむらひて、あゝ涙よや涙よやといふ者おのが恥によりて

あどろきあうれんふとを

十六
願くわなんちを尋求るものゝ皆なんちによりて樂まよろふと

んふとを、なんちの救をまたふものゝ恒にエホバの大なるな

どをなへんことを

十七
わきにくるしと且ともし、主われをねんおろに念ひたまふ、なん

ちわが助なり、われをすくひたまふ者あり、あゝわが神よねが

はくいためらひたまふながれ

第四十一篇

うたのかみに謡はしめたるダビ
デのうた

よわき人をかへりける者いはいはひなり。エホバ斯るものを禍
ひの日にたすけたまへん

エホバ之をまもり之をながらへしめたまへん。かれの地の地
ありて福祉をえん、なんぢ彼をうの仇れのすみにまかせて付し
たまふなかれ

エホバの後がわづらひの床にあるをたすけ給へん、なんぢかれ
が病るときうの衾をまきかへたまはん

我いへらく、エホバよわれを憐れわがたましひを醫したまへ、わ
れ汝にむかひて罪戾をうじたりと
わが仇れをどしどしりていへり、彼いづれのときお死いづれのと

きにうの名隠るびんと
かれ又われを見んとてきたるときに虚偽をかたり邪曲をうの

心にあつめ外にいでもこれをも逃ふ

すべてわれをにくむもの互ひあさやき我をうふなはんとて
相謀る

みつ云ふ、かれに一のわざはひつきまひたれば仆れふしてふ

たふび起ることなあらんと
わが憎しむところわが糧をくらひじどころのわが親しき友さ

へも我ふらむきてうの跡をあけたり

然のあれどエホバよ汝ねがはく我をあえれ我をたすけて

起したまへ、されば我かれちに報ることをえん

わが仇われに打勝てよろこぶこと能はざるをもて汝がわれを
愛いつくしみたまふを我まりぬ

わが事をいとし、なんぢ我をわが完全うちにてたもち我をどこ
しへ面のまへに置たまふ

イオラエルの神エホバにぞこしへより永遠まではむべき
かな、アーメン、アーメン

第四十二篇 伶長にうたひしめたるコラの子

のをしへの歌

あゝ神よ、あかの溪水をいたひ喘ぐがごとく、わが靈魂もなんぢ
をえたひあへやなり

わがたましひの渴けるごとく、お神をえたふ活神を予えたふ、何
れのときにか我ゆきて神のまへおいでん

かれらが終日われにむかひて、なんぢの神のいづくにありやど
のまじる間いたまわが涙のまゝ晝夜うたてわが糧なりき

あれむかし露となして祭日をまもる衆人どもにゆき歡喜と

讚美のこゑをあげてかれらを神の家にともなへり、今こそちの
こどを回想してわが裏よりたましひを注ぎいだすなり

あゝわが靈魂よ、なんぢ何うなたるや、なんぢわが裏にあも
ひもだるや、なんぢ神をまちのすめ、われに聖顔のたすけあり
て我なほわが神をはめたふべきをなり

わが神よ、わがたましひのわが裏にうなたる、然ばわれも

なんぢの地よりヘルモンよりヨザルの山より汝をおもひいづ
なんぢの猛浪こそしく、くわが上をこそえゆけり

然らばあれと晝のエホバの憐憫をほめてしたまふ、夜はの歌
わがまゝもにあり、此うたひわがいのちの神にささぐる祈なり
われわが難なる神にいえん、なんぢわれを忘きたまひしや、なん

ぢわれの仇のまへたげによりて悲しみありしや

わが骨もくだくるをかりあわせてきひねもす我にむかひて、
 さんちの時はいづくあありやといひのまありつゝ我をうたれ
 り

あゝわがたましひま、汝なんぞうなたるまや、何ぞわがうちに思
 ひみだるまや、なんち神をまぢのすめ、われ尙わがかはの助なる
 わが神をはめたまふべければあり

第四十三篇

神よねがえく我をさべき情まらぬ民にむかひてわが誠をあ
 げつらひ詭詐あはきよこしよある人より我をたすけいだし給
 へ

さんちのわが力の神なり、なんぞ我をすてたまひしや、何ぞわ
 しの仇の暴虐によりてかなしみありくや
 聞くはなんちの光となんちの眞理とをこなち我をみちびきて

ろの聖山とろの雄嶺とにゆかしめたまへ
 さらばわれ神の祭壇にゆき又わがよろこびよろこぶ神にゆか
 んあゝ神よわが神よわれ琴をもてなんちを讃たまへん
 あゝわが靈魂よなんちなんぞうなたるまや、なんぞわが裏にあ
 もひみだるまや、なんち神によりて憐れをいだけ、我なほわが面
 たすけあるわが神をはめたまふべければなり

第四十四篇 伶長にうたひしめたるコラの子

れをしへの歌

あゝ神よむかしわれらの列祖の日になんちがなしたまひし事
 述をわれら耳にきけり、列祖われらに語れり
 なんち手をもてまろくの國人をあひしりすけ、それらの列祖
 をうた並もろくの民をかやましてわがらの列祖をはびこ
 せたまひき

三 かきらのおのの剣によりて國をえしにあらす、おのの臂によりて勝をえしにあらす、只なんちの右の手なんちの臂、なんちの面

四 のひかりによれり、汝かれらを恵またまひたればなり
神よなんちのわが王あり、ぬきくいのヤコブのために救をはさ

五 したまへ

六 わきらの汝によりて敵をたふし、また我側にさからひて起りた

七 つものをなんちの名によりて隠匿ふべし

八 ういわれわが可によりたのます、わが劍もまた我をすくふこと

九 わたえさきばなり

十 なんちわきらを敵よりすくひ、またわきらを恐むものを辱かし

十一 めたまへり

十二 わきらのひねもす神によりてはこり、わきらの永遠になんちの

十三 名に感謝せん、と

十四 志あるに今のわれら、をすてし耻をおえせたまへり、わきらの軍人どもも出ゆきたまへす

十五 われらを敵のまへより退かしめたまへり、わきらを恐むものろ

十六 れ任意おわきらを掠めうとへり

十七 なんちわれらを食にうかへらるゝ羊のごとくにあたへ斯てわ

十八 れらをもろくの國人のかかにちらし

十九 得るところなくしてなんちの民をうづ、うの價によりてなんち

二十 の富をましたまへさき

二十一 汝われらを隣人にうしらしめ、わきらを環るものにあなせらし

二十二 め、嘲けらしめたまへり

二十三 又もろくの國のかかにわきらを映柄となし、もろくの民の

二十四 かかにわきらを頭ふらるゝ者とあしたまへり

二十五 わが凌辱ひねもす我がまへにあり、わがかはの恥わきをおはへ

一　　り
 二　　この我をろしり我をのゝしるものゝ壁により我にあだし我に
 三　　うらみを報るものゝ故によるあり
 四　　みきらのこと皆わきらに臨みきつぎせわきらかは汝をわすき
 五　　ず、みんちの契約をいつたりまもらきりき
 六　　われらの心煮りたりず、われらの步履なんちの道をえなきず
 七　　然せみんちの野犬のすみかにてわきらをきすつけ死骸をもて
 八　　われらをあはひ給へり
 九　　われらもしあひのきの神の名残わすき或はわれらの手を異神あ
 十　　のべしことあらんに
 十一　　神のみれを組したまひせきらんや、神のみろの隠れたることを
 十二　　も知たまふ
 十三　　われらの終日みんちのために死にわたされ屠られんとする羊

一　　のさどくせられたり
 二　　主よさめたまへ何かれねふりたまふや起たまへ、われらをど
 三　　こしへに聚たまふあかれ
 四　　いかなれバ聖顔をかくしてわきらがうくる苦難と虐待とをわ
 五　　すれたまふや
 六　　われらのたましひにかきみて塵にふし、われらの腹の土につき
 七　　たり
 八　　ねおこくひ起てわきらをたすけたまへ、なんちの仁慈のゆゑを
 九　　もてわれらを贖ひたまへ
 十　　第四十五篇　百合花のあはれにあてせて伶長
 十一　　にうたえしめたるコラの子のを
 十二　　しへのうた愛のうた
 十三　　わが心うるとしき事にてあふる、われハ王のために詠たるも

一のいひいでん、わする酒のすみやけく、宮宇人の筆なり
 二 なんぢの人の子輩にまきりて、美しく文雅うのくちびるにうよ
 ぐる、ふのゆゑに神のどふしへに汝をさいとひしたまへり
 三 英雄よなんぢの剣の榮の威をこしに佩べし
 四 かんぢの眞理と柔和とたきしきとのために威をたくましくし、勝
 をえて乗すよめ、なんぢの右手なんぢに畏るべきこと、汝をしへ
 五 なんぢの矢の鋭して王のあたの胸をつらぬき、もろくの民の
 六 かんぢの下にたふる
 神よかんぢの寶座のいやは、永く、かんぢの國のつかひ公平の
 七 つゝなり
 かんぢの義をいつくしみ、惡をにくむ、ふのゆゑに神なんぢの神
 のよろふびの寵をかんぢの御よりまきりて、汝にうきたまへ

八 り
 かんぢの衣のみさ、没薬、薑黄、肉桂のかをりあり、琴瑟の音きうげ
 の諸殿よりいで、汝をよろふとしめたり
 九 なんぢのたふどき婦のなかにはもろくの王のむすめあり、后
 皇のオフルの金をりきりて、なんぢの右にたつ
 十 女よきけ目をよろよげ、なんぢの耳をかたふけよ、かんぢの民どな
 十一 んぢの父の家どをわすれよ
 十二 さらば王のなんぢの美麗を、またさん、王のなんぢの主なりこそ
 十三 を伏拜め
 十四 ツロの女の贈物をもてきたり、民間のどめるものも亦なんぢの
 十五 恵をこひもどめん
 十六 王のむすめ、殿のうちにいて、いと榮えかきやき、うのころも、
 十七 金をもて織なせり

かきい 織ぬい繡もせる衣えんをきて王わうのもとにいぎなとる之にともなへ
 る處ところ女めもろのあどにゑたるひて汝きんのもとにみちひかれゆかん
 かきらひ 歡喜くわんぎと快樂たいてきをもていきかこれ期きして王わうの殿ふにいら
 ん

ななちの子こらに列祖れつそにかゝりてたち、ななちのこを全地ぜんちに君
 どなさん

我われあんちの名なをよろづ代よにあらしめん、この故ゆゑにもろゝの民
 いいやとほ永とこくかんちに感誦かんじゆすべし

第四十六篇

女音むすめおとこのあらべにゑたるひて 伶長りやうぢやう
 にうたひしめたるコツの子このう

神かみわれらの選所せんじやうまた力ちからなり、なやめるとき、の最もとちかき助すけなり
 さればたとひ地ちのいかにとより山やまのうみの中央ちゆうやうにうつるども我われ儼げんの

三 おうれと

よしうの水みづなりととるきてさわやども、うの溢あふれきたるによ
 りて山やまのゆるぐども何かあらん、セツ

河かはあり、うのさふれ、神かみのみやこをよろこをしめ至上者いふじやうしやうの
 すみたまふ聖所せいじよをよろこをしむ

神かみのなかにいませば都みやこのうさかじ、神かみの刺さつとにこきを助け
 たまこん

もろゝの民たみのさわきたち、もろゝの國くにのうさきたり、神かみの
 聲こゑをいだしたまへば地ちのやがてとけぬ

萬軍まんぐんのエホバのわれらどすもなり、ヤコブの神かみのわれらのたか
 き槽くらなり、セツ

きたりてエホバの事跡しそをみよ、エホバのあはくの懼おそるべき
 こを地にさしたまへり

エホバの地のてまでも戦闘をやめしめ弓矢をり戈をたち戦
 車^{くるま}を火^{くわ}にてやきたまふ
 汝等^{なんぢら}あづまりて我の神たるを志れ、わきのもろくの國のうち
 に崇めらるる地にあがめらるべし
 萬軍^{まんぐん}のエホバのわれらと偕^{とも}なり、ヤコブの神のわれらのたかき
 やぐらあり、セツ

第四十七篇

伶長^{じやうぢやう}にうたひしめたるコラの子

もろくのたみよ手をうち歡喜のこゑをあけ神にむかひてさ
 けべ
 いどたかきエホバのあうるべくまた地をあまねく治しめす大
 なる王にてましませばなり
 エホバのもろくの民をわれらに服せしめ、もろくの國をわれ

らの足下にまつろせたまふ

又うのいつくしみたまふヤコブの譽とする嗣業をわれらのた
 めに選びたまふ、セツ

神のよろこびさけふ聲どもにのぼり、エホバのツツバの
 聲どもにのぼりたまへり

はめうたへ神をはめうたへ、頌歌へわれらの王をはめうたへ
 かみの地にあまねく王なればなり、教訓のうたをうたひてはめ

神のもろくの國をすべをさめたまふ、神のきのきよき寶座に
 すわりたまふ

もろくのたみの諸侯のつぎひきたりてアブラハムの神の民
 となれり、地のもろくの盾の神のものなり、神のいとたふとし

第四十八篇

コラの子のうたあり讚美あり

エホバの大あり、われらの神の都のきよき山のうへにて甚く
はめたまへられたまふべし

レオンの山のきたの端にかくしてうるはしく喜悅を地にわま
ぬくあたふ、こゝの大なる王のみやこなり

ろのもろくの殿のうちに神のいのれをたかき機としてあら
せしたまへり

みよ王等のつぎひあつまりて倍にすぎゆきぬ
あれらの都をみてあやしむ且あられて忽ちれがれさきり

戦慄のあきらにけりみ、ろの苦痛の子をうまんとする婦のごと
し

なんちの東風をおこしてマルレ、の舟をやふりたまふ
義にわれらが聞しごとく今われらの萬軍のエホバの都われら
の神のみやこにて之をみることをえたり、神のいのれをどこし

へまで固くしたまへん、わつ

神よわきらのきんちの宮のうちに仁慈をおもへり

神よきんちの聖なる名れごとく地の極にまであよべり、きん
ちの右手にたゞしきにて充り

なんちのもろくの審判によりてレオンの山のよろこびユダ
の女輩のたのしみべし

レオンの周囲をありき徧くめぐりてろの機をあらへよ

ろの石垣に目を定めよ、ろのもろくの殿をみよ、なんちらみれ
を後代にありつたへんが爲あり

ろのこの神のいや敵長にわれらの神にましくてわれらを死
るまでみちびきたまへん

第四十九篇 俗長にうたはしめたるコラの子

のうた

二一 もろくの民よきけ賤きも貴きも富るも貧きもすべて地にす
 める者よ、かんぢらどもに耳をうをだてよ
 三 わが口のあしきことをあたり、わが心のきみどを思はん
 四 われ耳を喩言あふたふけ琴をあらしてわが幽玄なる誦をどき
 五 あらとさん
 六 わる難にちかまる不義のわれを打倒むわきえひの日もいかで
 七 懼るゝことあらんや
 八 あの富をたのミ財あはきを誇るもの
 九 たれ一人あのが兄弟をあがなふことあたはず之のためは賤價
 十 を神にさづけ
 十一 之をどこしへに生存へしめて朽さらまむることあたはず（靈魂
 十二 をあがみふに費いどあはくして此事をどこしへに拾置さる
 十三 を得されをなり）

十 うい智きものも死あろかもものも厭心者もひとしくはろびてう
 十一 の富を他人にのこすこと常にまるところあり
 十二 かれら窮にもあふ、わが家いどこしへに存りわがすまひの世々
 十三 にいたらんとあれらわの地にあのが名をおはせたり
 十四 されど人の夢のあかに永くどまらず亡びうする獸のことし
 十五 斯のことしの愚あるものと途あり然いあれを後人いう
 十六 の言をよしとせん、セラ
 十七 かれら羊のひれのごとくに陰府のものと定めらる、死これの
 十八 牧者どならん直きもの朝にかれら炭をさめん、うの美容ハ陰府
 十九 おはろばさきて宿るところあかるべし
 二十 されど神わきを掇たまふべけれわが靈魂をあがみひて陰府
 二十一 のちからより脱かれしめたまはん、セラ
 二十二 人のどこにてうの家のかえくはとらんどき汝あるゝなあれ

一七 あれの死るるときに 何一つたづさへゆくことあたはず、うの榮の
 一八 みれおまたおひて下ることをせさればあり
 一九 かゝる人のいきあがりよるほかに 己がたましひを祝するども、
 二〇 そづからを厚うするおゆゑに 人々なんちをはひるども
 二一 なんぢ列祖の世にゆかん、かれらにたえて光をささるべし
 二二 尊貴なかにありて 曉らざる人のほろびうする 罪のごとし

第五十篇 アサフのうた

一 ぜんのうの神エホバ 詔命して日のいづるところより日のいる
 二 ところまであでねく地をよびたさへり
 三 りみの美麗の極なるシオンより 光栄をなちたまへり
 四 われらの神のきたりて 黙したまふ火の前のものをやきつ
 五 くし 暴風うの四周にふきあれん
 六 神のうの民をさとりんとて 上ある天をよび地をよびたまへり

一 いさく祭物をもて我どけいやくをたてしわが悪徒をわがもど
 二 に集めよと
 三 もろくの天の神の義をあらはせり、神のみづから審士たれば
 四 かり、セツ
 五 わが民よきけ我ものいそん、イスラエルよきけ我さんちにむか
 六 ひて 證をなさん、われ神なんちの神あり
 七 わがさんちを責る祭物のゆゑにあらす、さんちの燔祭につね
 八 にわが前にあり
 九 我いなんちの家より 牡牛をとらず、さんちの牢より 牡山羊をと
 十 らず
 十一 林のもろくのけもの山のうへに 千々の牲畜のみまわが有か
 十二 り
 十三 われ山のすべての鳥茂る、野のたけき獸のみなわがものな

十三 世界よかいどうのなるなるふ充ちかるものどいわわる有あなればれば繼つぎひわれわれ飢うるど
 二二 もあんなに告つげし
 二二 われいかでいかに牡牛ぎうしの肉にくをくらひひ牡羊ぎやうの血ちをのまんや
 二二 感謝かんしやのうなへものを神かみにささげよなんちのちかひをを至上者じしやうしやに
 二二 けくのへ
 二二 なやみの目めあわれをよべ我われなんちなんち炭すす掬くけん面おもてしてなんち我われを
 二二 あがむべし
 二二 然しかにあど神かみあしきものに言こと給たまくなんちの教しよをにくみわ
 二二 言ことをうの彼そにすつるものなるに何なんのあはりありてわわ律りつ
 二二 法はふをのべわわけいやくを口くちにどり去さや
 二二 なんち強人かうじんをみれば之これをよしとしとし姦淫かんいんををこなふものものと伴とも出で

二二 なんちうの口くちをを隠かくにわたす、あんなちの舌したの証あかし計はかりをくみなせり
 二二 なんち坐まりて兄弟けいだいをうしよ已やむはよの子こを隠かくのよしれり
 二二 故ゆゑこれらの事ことをなしよをわれ賦ふしぬれば、あんなち我われをあのれに
 二二 恰さふたるものどおもへど、されど我われなんちを賣ばいめてうの罪つみをな
 二二 んちの目め前まへふつらぬべし
 二二 神かみ茂さかわするよものよ今いまこのふとを念おもへ、あうらくい我われなん

二二 ちをを捕とらさかんどき助たすけるものあらじ
 二二 感謝かんしやのうなへものを献けんるものい我われをあがむ、おのきの行こと爲わざをつ

二二 としむ者にいわれ神かみの衆しゆをあらはさん

第五十一篇

二二 ち預言者こひんしやナタンの来きたれるときよ

二二 みて伶長じやうぢやうにうたえしめたる歌うた

二二 あう神かみよねがどくいななんちの仁慈じんじによりて我われをあはれみ、なん

ちの憐憫のあはれによりてわがもろくの愆をけしたまへ
 わが不義をこそくくあらひさり我をわが罪よりきよめたまへ

われわれわが愆をしる、わが罪いつねにわれの前にあり
 我がなんぢあひかひて獨なんぢに罪愆をかし聖前にあしきこ

ことを行へり、されば汝ものいふとき義とせられ、なんぢ轉くとき
 汝の咎めなしとせられ給ふ

神よわれ邪曲のなかにうまれ罪にありてわが母われをこらみ
 たりき

なんぢ眞實をこころの裏にまでのすみ、わが隠きたるところに
 智慧をあらしめ給へん

なんぢヒツクをもて我をきよめたまへ、さらばわれ淨ならん、我
 とわれはたまへ、さらばわれ雪よりも白からん

なんぢ我によりてひと快樂とをきかせ、なんぢの憐れし骨をよ
 ろこせたまへ

わが心くハ聖顔をわがすべての罪よりうむけ、わがすべての不
 義をけしたまへ

わが神よわがために清心をつくり、わが裏になはき靈をあらた
 におこしたまへ

われを聖前より棄たまふなかれ、汝のきよき靈をわれより取た
 まふなかれ

なんぢの救のよろこびを我にうへむ自由の靈をあたへて我を
 たもちたまへ

さらばわれ愆をうせる者になんぢの途ををしへん罪人いな
 んぢに歸りきたるべし

神よわが救のかみよ血をなごしよ罪より我をたすけいだした

さへ、わが舌の聲たからうになんちの義をうたえん
主よわが口唇をひらきたまへ、然わが口なんちの頌美哉あら
とさん

なんちの祭物をこのみたまえず、もし然らずバ我これをさげ
ん、なんちまた燔祭をも悦びたまえず

神のもどめたまふ祭物にくだけたる銀環なり、神よなんちの碎
けたる悔しこゝろを親しめたまふまじ

ねごとくハ聖意に去たがひてシオンにさいえひし、エルサ
レムの石垣哉きづきたまへ

うの時なんち義のうなへもの燔祭と全きはんさいとを悦び
たまえん、かくて人々なんちの祭壇に牡牛哉ささぐべし

第五十二篇 エドム人ドエグサウルにきたり
てダビデハドビメラの家にきぬと告じとさ

ダビデがよみて僧長にうたえしめたる教訓の
うた

狂者よさんち何あれバあしき企圖をもて自らはこるや神のあ
はきみの恒にたえざるあり

なんちの舌のあしきことをせかり利き剣刀のごとくいつとり
哉あてなふ

なんちの善よりも惡をこのみ正義をいふよりも虚偽をいふを
このむ、とつ

たむかりの舌よなんちのすべての物をくひほろぼす言をこの
む

されを神としへまでも汝をくだき、また汝をどらへてうの幕
屋よりぬきいだし生るものと地よりなんちの根をたやしたま
えん、とつ

義者（たしなむもの）のこれを見てあうれ彼をわらひていとん
 神をおの（おの）の力（ちから）となさず、うの富（とみ）のゆたかなるをたのみ、うの惡（あく）を
 もて己（おのれ）をかたくせんとする人をみよと
 然（しか）にあれせわれの神の家（いへ）にあるあをき橄欖（やぐちん）の樹のごとし、我（われ）の
 いやどはなむに神のあそれみに依（よ）頼（たの）まん
 なんちこの事をおこなひ給ひしによりて我どこしへになんち
 に感謝（かんしゃ）し、あんちの聖徒（せいと）のまへにて聖名（せいめい）をまちのすまふ、ふの宜（よろこ）
 しきふとなればあり

第五十三篇

マハブツ（聖書の名あるひにあてせ
俗長にうたえしめたるダビデ
 の教訓のうた
 愚（おろ）かなるもの心のうちに神なしといへり、われらの腐（くさ）敗（は）たり
 られらひ憎（にく）むべき不義（ふぎ）とあこあへり世をみよ者（もの）なし

神（かみ）の天より人の子をのすみて悟（さと）るものと神をたづぬる者どあ
 りやなしやを見たまひしに
 三 みな退（ひき）ききてこどく汚（けが）れたり善（よ）をさすものなし一人だに
 四 かし
 不義（ふぎ）をおみあふもの知覺（しぎやく）なきり、かれらの物くふとどくむダ
 民をくらひ、また神をよむふとどをせざるなり
 かきらの體（たい）るべきことのなきどきに大にあられたり、神のあんな
 ちにむりひて營（えい）をつらぬるもの骨をちらしたまへばあり、神
 かれちを棄（す）たまひしによりて汝かきちを吐（は）きしめたり
 六 願（ねが）ひのレオンよりイスラエルの救（すく）いのいでんことを、神の民の
 どちらときたるを返（かへ）したまふときヤコブのよろみびイスラエルの
 樂（たの）まん

第五十四篇

ロフ人のサウルにきたりてダビ

一 神よねがえくの汝の名によりて我をすくひ、おんちの力をもて
 我をささきたまへ
 二 神よ、我が祈をきよたまへ、我が口のことばに耳をかたふけたま
 へ
 三 うい外人の口をさからひて起り、たち強暴人の口をたまたしひ
 を索むるなり、かゝる神を、おのの前におかぎりき、セツ
 四 みよ神の口をたすくるものなり、主いわむたまたしひ、我保つもの
 のどもに在せり
 五 主いわむ、仇にうのあしきことの報をなしたまへん、願くはなん
 ちの眞實によりて、彼等をはらひ置きたまへ

六 我よろこびて、祭物献さんちに献ん、エホバよ、我なんちの名にむ
 うひて感謝せん、ふの宜しきことなきはなり
 七 ういエホバのすべての患難より我をすくひたまへり、我が目の
 わる仇につきての願望をみたり

第五十五篇 ダビデうたのうみに琴にてうた

一 神よねがえくの耳を、我が病にかたふけたまへ、我が懇求をさけ
 て身をかくしたまふなり
 二 是れに惡意を定め、我にこたへたまへ、是を歎息によりてやすか
 ち悲しみうめくなり
 三 こゝ仇のみ、惡きものと、暴虐とのゆゑなり、うのかゝる不義
 を、是に負せ、いさよはりて我におひせまるなり
 四 是が心、さうちに憂へいたみ死のもろくの恐懼、さうへに

あちたり

あうれど戰慄^{せんりつ}とまき^まにのすみ甚^{いた}だしき恐懼^{おそ}まき我^{われ}はへり

され云^いねぞとくハ鶴^{つる}のごとく羽翼^{よく}のあらんことを、さらば我^{われ}と

ひさりて平安^{やす}をえん

みよ我^{われ}ぞるかにのされさりて野^のにすまんと

まき速^{すみ}かにのされて暴風^{はうふう}と狂風^{きやうふう}とをはなさん

まき都^{みやこ}のうちに強暴^{ちやうぼう}とあらうひとをみたぞ、主よねぞとくハ彼^{かれ}

等^らを辱^はろぼしたまへ、かきらの舌^{した}をまうれじめたまへ

彼^{かれ}等^らハひるもよるも石垣^{いしがき}のうへをあるきて邑^{むら}をめぐる、邑^{むら}のう

ちにハ邪曲^{よこしま}とあじき金匱^{きんくわい}とあり

また惡^{わる}きこと邑^{むら}のうちにあり、まへたげと欺詐^{きそ}とハろの街衢^{まち}を

とるまふとなし

されと誹^いれるものハ民^{たみ}たりしものにあらず、も然^{しか}としならば

尙^{なほ}まのをれしなるべし、我^{われ}にむかひて己^{おのれ}をたうくせし者^{もの}ハまれ

を恨^{にく}みたりしものにあらず若^もまかりしならば身をあくして彼^{かれ}

をさけしなるべし

されどこれ汝^{きみ}なり、されどおなじきもの、主ガ友^{とも}まれと親^あしきも

のあり

まれら互^{あひ}ひに忘^{わす}れしき語^{こと}らひをなし、また曾^{ついで}衆^{しゆ}のあかに在^あてど

もに神^{かみ}の家^{いへ}にのほりたりき

死^しハ忽然^{とつぜん}かきらにのすみ、うの生^なるまゝにて陰府^{えんぷ}にくだらんと

とぞ、うの惡事^{あくじ}うの住處^{すまひ}にありうの中^{うち}にあればあり

されど我^{われ}いたし神^{かみ}をよむん、主ハまきを救^{すく}ひたまふべし

夕^{ゆふ}にあしたに盡^はにまきなげき且^{かつ}かなしみうめかん、主ハまき

聲^{こゑ}をききたまふべし

主ハバハ我^{われ}をせむる戰闘^{せんたう}より主ガ靈魂^{たましひ}をあがなひいだして平^や

安をえしめたまへり、うのむれを攻るもの多ありければあり
 太古よりいます者なる神のむが聲をきまてかゝらに悩めたま
 ふべし、うかれらに悩めることなく神をあることなし
 かの人のあはれと睦みをとりしものに手をのべてうの契約をけ
 ざしたる
 うの口のあめらうにして乳餅のごとくなれどもうの心のた
 かひなり、うの言のあふらに賭りてやとらかなれどもぬきたる
 剣にこそならず
 なんちの荷をエホバにゆだねよ、さらば汝をさへたまへん、た
 だしき人のうごかざるよこそを常にゆるしたまふまじ
 かくて神よなんちのかれらを亡の坑におどしいきたまへん、血
 をなすものと詭計をはきものとの生てあのが日の半にもい
 たりざるべし、然のあはれをむきむき汝によりたのまん

第五十六篇

どちらへられしとき詠てどはきどろにをる者
 をたてぬ鶴のあらべにあてせて伶長にうたえ

しめたるエホバの歌

あま神よねおとく我をあえきみたまへ、人いきまきて我をの
 まんとし終日たしかひて我をまへたぐ
 わが仇ひねもす急喘てむれをのまんどす誇りたかふりて我ど
 たしかかふものあはし
 むれあるるときは汝によりたのまん
 むき神によりてうの聖言をはめまつらん、むれ神に依頼みたれ
 ばあるまことあらじ肉體むれあなをなし得んや
 かれらの終日むきことを曲るなり、うの思念いことく我
 おむきとひをなす

神にまかさん
 神のたすけを天よりあぐりて我をのまんとする者のろしるど
 きに我をすくひたまえんや、神の憐れみの眞實をあぐり
 たまえん
 主がたましひに對する憐れみのなかにあり、火のごときもゆる者
 の齒の伐のごとき矢のごときろの舌のとき劍のごとき人の子
 のなかに我ふしぬ
 神よねがえくのみづからを天よりも高くしみさかえを全地の
 うへに舉たまへ
 かれらの足をもとらへんとて綱をまうく、わが靈魂のう
 なたる、かれらの足をもとらへんをばりたり而してみづからろ
 中におちいれり、わが
 わが心さだまれり神よわがとらえられ、われ歸ひまつらん

願まつらん
 わが榮よさめよ、主よ、主よさめよ、主よ、黎明をよびたまさん
 主よわれもろくの民のなかあてなんちに感謝し、もろくの
 國のなかにて汝をほめうたえん
 ろの汝のあえれみい大にして天にまでいたり、なんぢの眞實の
 雲にまでいたる
 雲にまでいたる
 神よねがえく、わが自を天よりも高くし、光榮をあまねく地の
 うへに舉たまへ

第五十八篇

ダビデがよみて、はろばすなかれ
 といふ調にあてせて、伶長にうた

なんぢら黙しめて義をのべうる、人の子よなんぢらなはき審
 判をあてなふや

二 否^{いな}なんぢらの心^{こころ}のうちに惡事^{あくこと}をおこなひ、うの手の強暴^{あつぱい}をみの
 三 地^ちにはかまひだすなり
 四 あしきものの胎^{はら}をはなるより背^せきどはきかり生きいつるよ
 五 り迷^{まよ}ひていつとりをいふ
 六 かれらの毒^{どく}の蛇^{へび}のどくのごとし、かれらの盛衛^{せいゑい}をおこなふもの
 七 れ甚^{いた}たくみにまじなふうの聲^{こゑ}をだにきかざる耳^{みみ}ふさぐ聲^{こゑ}ひの
 八 娘^{むすめ}のごとし
 九 神^{かみ}よかれらの口^{くち}の齒^はをりたまへ、エホバよ壯獅^{さうし}の牙^{きば}をぬきく
 十 だきたまへ
 十一 願^{ねが}ふかれらを流^{なが}れ、ゆく水^{みづ}のごとくに消失^{しょうしつ}しめ、うの矢^やをはな
 十二 つどきの折^をれたるごどくなし給^{たま}へんことを
 十三 また融^とてきえぬく燐^{りん}牛^{ぎゅう}のごとく、婦^{よめ}のときならず産^うたる日^ひをみ
 十四 る要^{ひつ}めのごとくならしめ給^{たま}へ

一 なんぢらの笠^{かさ}いまだ無^な敵^{てき}の火^ひをうけざるさきに青^{あお}をも燃^もたる
 二 をもどもに狂^{くる}風^{ふう}にて吹^ふさりたまへん
 三 義^ぎ者^{もの}のかきらが驅^かかへさるゝを見てよろこび、うの足^{あし}をあしき
 四 ものゝ血^ちのなりにてあらせん
 五 かくて人のいふべし、實^{じつ}にたゞしきものに報^{はく}賞^{しょう}あり、實^{じつ}にさむき
 六 をはせこしたまふ神^{かみ}のましますなりと

第五十九篇

サウルダビデを殺さんとし人を

おくりてうの家^{いへ}をうぐいしめし時^{とき}ダビデが
 よみてはろ不^ふすなりれといふ調^{てう}にあてせて吟^{ぎん}
 長^{なが}ふうたとしめたるマタムの歌^{うた}

一 わが神^{かみ}よねがてくれ我^{われ}をわが仇^たよりたすけいだし、われを高^{たか}處^{ところ}
 二 にあきて我^{われ}おさからひ起^{おこ}立つものより脱^{だつ}かれしめたまへ
 三 邪^{よこしま}曲^{まが}をおこなふものより我^{われ}をたすけいだし、血^ちをなす人^{ひと}より

我わがをすくひたまへ

視みよかれらの潜ひそみかくれてわが靈魂たましひをうかき猛者あさましきむれつど
ひて我をせむ。ホバよ此こゝのわれに愆とがあるにあらす、われに罪つみあ
るにあらす

かれら趨きよぎまどりて過失あやまちなきお我をうてなえんとて備そなをなす、
ねるはくわ我をたすくため目めをさまして見たまへ

なんぢホバ萬軍ばんぐんの神イヌヅエルの神よ、ねがはくわ目をさま
してもろの國くににのぞきたまへ、あしき罪人つみびとにあされみを加くわ

へたまふなかれ、ホバ

かれらの夕ゆふにかへりきたり犬いぬのごとくはえて邑まちをへありく
城かきよかれらの口くちより惡わるきはく、ろのくちびるに劍つるぎあり、かれらあ
もへらく誰たれありてこの言ことをきうんやと

されどホバよ放はなりかれらをわらひ、もろの國くにをあきわら

ひたまはん

わが力ちからよ、われ汝なんぢをまちのすまん、神かみのわがたかき標しるしなり

憐憫れんみんをたまふ神のわれを遣はなへたまえん、神のわが仇あだにつきての
願望ねんぼうをわれに見みさせたまえん

願ねがひかれらを殺ころしたまふなかれ、わが民たみつひに忘れやいせん、

主しゅわれらの盾たてよ、大能ちからをもてわれらを散ちし、また卑ひしたまへ

かれらおくちびるの言ことの口のつみなり、かきらの詛うそと虚偽いつはり
をいひいづるによりてろの傲慢ごうまんのためにとらへらまじめた

まへ

急患きうわんをもてかれらをほろぼしたまへ、再びふたたびなごらふることなき

までは彼等かれらをほろぼしたまへ、ヤコブのなりに神いよして統治ちうち
めたまふことをかれらに知ししめて地の極はてにまでおよぼしたま

へ、ホバ

かれらの夕ゆふにかへりきたり犬いぬのおどくはえて邑まちをへりくべし
 かれらのゆきまして食物くわくものをあさるもし飽あことなくバ終夜よゆうとまされど我われのなんぢの才能ちからをうたひ清晨あしたにてをあげてなんぢの憐憫あはれみをうたひまづらんなんぢわが追おしりくるしみたる日にたかき楡やぶとなりわが避所かくれどころとなりたまひたればなり
 わがちからよ我われのなんぢにひかひて強敵やうてきをうたひまづらん神かみのわがたかき楡やぶわれにあてれみをたまふ神かみなればなり

第六十篇

ダビデナハファイムのアラムあよ

バツバのアラムどたきかひをりし言ことアアかへりゆき鹽谷しおんにてエラム人ひと一萬二千いちまんにせんをころしよさき敵てきとなさんどてダビデあよみて聖詞せいし

の百合花ゆかりといふ露つゆにあてせて命長いのちながにうたはしめたるエラムの歌うた

神かみよなんぢをわれらを棄すわれらをちらし給へりなんぢの憤得いどりたまへりねがはくい再びわれらを歸かへしたまへ

なんぢ國くにをよるはせてこれを襲せまたまへりねがはくいらの多く

の隙すきをわきまひたまへり國くにゆりうごくなり

かんぢの民たみにたへがたきことをあめし人をよろめかする

酒さけをわきに飲のみしめたまへ

なんぢ真理まことのために舉あげしめんとて汝きみをあるよものに一つの

旗はたをあたへたまへりセツ

ねがはくい右みぎの手てをもて救すくをはせしわきに答こたをなし

て愛あいしみたまふものに助たすけをえしめたまへ

神かみのろの聖せいをもていひたまへりわれ甚いたくよろこぶんわきレケ

七 ムをわかちスコテの谷をはからん
 キレアデのわがものマナセのわが有あり、エフサイムも亦わが
 首のさもりなり、ユダのわが杖
 八 モアブのわが足盤なり、エドムにハミの履をなげんベリレテよ
 わが故によりて聲をあげよと
 九 たれか足きを堅固なる邑にすよ、よしめんや、誰うれをみちび
 きてエドムにゆきたるか
 十 神よなんぢの軍れらを棄たまひしにあらずや、神よなんぢのわ
 れらの軍とともいにてゆきたまはず
 十一 ねがはくハ助をわれにあたへて敵にむかはしめたまへ、人のた
 ずけの空にけきばなり
 十二 わきらの神によりて勇しくはたらかん、わきらの敵をふきたま
 ふものハ神なとばなり

第六十一篇

琴にあはせて伶長にうたはしめ
 たるダビデのうた

一 あゝ神よねがはくハわが哭聲をきよたまへ、わが祈にみてよろ
 をとめたまへ

二 わが心くづかるゝとき地ののはてより汝をよめん、なんぢ我をみ
 ちびきてわが及ぶたきはせの高き磐にのぼらせたまへ

三 なんぢのわが避所われを仇よりのおれしむる堅固かる機なき
 ばなり

四 わき永遠になんぢの輓輶にすまはん我なんぢの翼の下にの
 れん、ヤッ

五 神よなんぢのわがもろくの惣救きよ名をあるよものにな
 まふ嗣業をまににあたへたまへり

六 なんぢの王の生命をのをしうの年を幾代にもいたらせたまへ

王^じいとこしへに神のままへにどまらん、ねおそくは仁慈^{いにしよ}と眞^ま
 實^{まこと}ををろなへて彼をまもりたまへ
 さちバ我^{われ}とこしへに名^なをはめうたひて日^ひとどにまゐもろく
 の誓^{ちか}をつくのひ果^はさん

第六十二篇

エドトンの體^{てい}にあたりて俗長^{じやくちやう}

わがたましひに黙^{もく}してたま神をまつ、わがすくひは神よりいづ
 るなり
 神^{かみ}とろのわが磐^{いわ}わがすくひなき、またわが高き楦^{たか}にしあきを我
 いたくは動かさじ
 なんぢらの何^{いふ}のときまで人にあしせざるや、なんぢら相共^{あひ}にか
 たふける石垣^{いしがき}のおそく揺ぎうおける崖^{がき}のおそくに人をたまさ

んどするか
 かれらの人をたまとき位^{くらゐ}よりあどさんとのみ謀^{はか}ま、いつはりを
 よろこび、またらの口^{くち}にていはひらの心^{こころ}にていのろふ、セツ
 わがたましひは黙^{もく}してたま神をまつ、わがすくひは神より
 いづ

神^{かみ}はろのわが磐^{いわ}わがすくひなき、又^{また}またわがき楦^{たか}にしあきバ我
 うごかさじ

わが救^{すく}どわが榮^{さか}どの神にあり、わがちからの誓^{ちか}わがさけとゐろ
 の神にあり

民^{たみ}よいかなる時^{とき}にも神によりたのめ、うの前^{まへ}になんぢらの心を
 ろよぎいだせ、神のまゐちの選所^{えんじよ}なり、セツ

實^{まこと}にひくき人のむなしくたかき人のいつはりなり、すべてかれ
 ちを權衡^{けんかう}にあかば上にあがりて虚^{うつろ}しきものよりも輕^{かろ}きなり

十一 暴虐をもて情とするなかれ、
 十二 ちからに神にあり神ひきたび之をのたまへり、われ二次ふれを
 十三 きけり
 十四 あま主よあこきみも亦なんぢにあり、なんぢの人あひのく
 十五 にたたりて報をさしたまへとあり

第六十三篇

ユダの野にありしときに詠るダビデのうた

一 あま神よさんぢにわが神なり、わき切になんぢをたづねもどむ
 二 水あき燥きあどろへたる地にあるごとくわが靈魂のかわきて
 三 汝をのぞき、目肉休になんぢを戀ふ
 四 我にも我かくのごとく大霧と榮光とをみんことをねがひ
 五 にありて目をさんぢより離さしめさうき

六 なんぢの仁慈のちににも願はるゆゑにわが口唇になんぢと
 七 願まつらん
 八 斯われいきて生るあひだ汝をいはひ名によりてわが手をあげ
 九 ん
 十 わき床にありて汝をおもひいで夜の更るまゝになんぢを深く
 十一 あもはん時わがたましひに願ふ脂にて饗さるゝごとく飽こ
 十二 どをえわが口のよろこびの口唇をもてなんぢを讃たふへん
 十三 ういなんぢを助となりたまひたまはば我なんぢの翼のかげに
 十四 入てよろみびたのしまん
 十五 わがたましひになんぢを慕ふ、みぎの手われを支ふるなり
 十六 然せわがたましひを滅さんとて尋ねもどむるもの、地のふか
 十七 きどころあゆき
 十八 又つるぎの刃あわたされ野犬の獲どころとなるべし

あかきとも王の神をよろめせん、神によりて誓をたつるもののみを誇ることをえん、虚偽をいふものよ、口のふさがるべけきばなり

第六十四篇

伶長にうたえしめたるダビデのうた

神よわがなげくときわが聲をききたまへ、わが生命をまもりて仇のあうきより脱うれしめたまへ

ねおはくは汝わきをうくして悪をなすものよ、陰りなる謀略よりせぬかれしめ不義をのみかふものよ、喧嘩よりせぬかきしめ給へ

かれらの剣のごときおのが舌をとき、うの弓をはり矢をつがへるごとき苦言をはかち
 惡きたるごころにて余者を射んとす、假かにふきを射てあうる

るごときなし

また彼此にあしき企圖をはげまし其にはかりてひうかに跡をまうく、斯ていふ誰かわきちを見んぞ

かれらのさまのの不義をたづねいだして云わきらの怒ろにたづね終きりぞ、おのの裏のおもひと心とをよめし

然にあれと神の矢にてかれらを射たまふべし、かれらの俄かに傷をうけん

斯てかれらの舌の身の身にさからふがゆゑに遂にかれらの蹟かん、これを見るもののみを逃さるべし

もろくの人のあうきん而して神のみわきをのべけたまへうの作たまへるふきを考ふべし

義者のエホバをよろこびて之によりたのまんすべて心のな得きものいを得てくることを得ん

第六十五篇

伶長にうたはしめたる歌ダビデの讃美あり

あゝ神よさんびいレオンにて汝をまつ、人のみまへにて御をこたさん

祈をききたまふものよ諸人こそりて汝にきたらん

不義のこそを我にかてど、かんち我愼のよろゝの愼をきよめたまはん

汝にえられ汝にちりづけらるゝて大庭にすまふ者のさいはひなり、わきらのなんちの家、なんちの宮のきよき處のめぐみおて

飽こそをえん

わきらが救のかみよ、地と海とのよろゝの極なるきはめて遠きものよ侍とするなんちの公義ふよりて畏るべきふきをもて我愼ふたへたまこん

かみの大能をおび、うの権力によりてもろゝの山をうたぐた

海のひまき狂瀾のひまき、もろゝの民のうしごまじきを鎮め

たまへり

されば極遠にすめる人々もかんちのくさゝの豫兆をきてお

うる、かんち朝夕のいづる處をよろみび誦はしめたまふ

なんち地にのすゝて涙るぎねはいに之をゆたかにしたまへり、

神のかはに水みちたり、なんち如此うなへをなして穀物をかれ

らにあたへたまへり

なんち眠をねはいにうるはし畝をたひらにし白雨にてこきを

やはらかにし、うの萌芽を祝し

また恩恵をもて年の見弁としたまへり、かんちの途には膏あだたれり

ろの思^{おも}滴^たけの牧^か場^ばをうるほし小山^{こやま}のみな歡^{よろこ}びにかこざる
牧^か場^ばのよき羊^{ひつぎ}のむれを衣^きもろくの谷^やの穀^こ物^{ぶつ}にたははれたり
かれらひ皆^{みな}よろこびてよむまた讃^ほふ

第六十六篇

俗^こ長^{ちやう}にうたはしめたる讚^{さん}美^びあり

眠^ねなり

一 全^{ぜん}地^ちよ神^{かみ}にむかひて歡^{よろこ}びよそめ

二 うの名^なの榮^{さか}光^{くわう}をうたへうの頌^{さう}美^びをさかえしめよ

三 かみに告^つぐつれ汝^{なんぢ}のもろくの功^{こう}用^{よう}いあるべきかな大^{おほ}なる

四 力^{ちから}によりてなんぢの仇^{あか}いなんぢに畏^{おそ}れたるがひ

五 全^{ぜん}地^ちいなんぢを拜^{かえ}きてうたひ名^なをほめうたはんとせ

六 來^きりて神^{かみ}のみわきをみよ、人^{ひと}の子^こ輩^{はい}にむかひて作^したまふことい

七 ありるべきかな

八 神^{かみ}いうみをかへて乾^かける地^ちとなしたまへり、ひと歩^{ひと}行^いにて

九 河^かをわたりき、うの處^{ところ}にてわれらひ神^{かみ}をよろこべり

十 神^{かみ}いうの大^{たい}能^{のう}をもてどこしへに統^す治^ちめ、うの目^めの諸^{しよ}國^{こく}をみたま

十一 ふ、うむく者^{もの}みづからを崇^{たか}むべからず、

十二 もろくの民^{たみ}よ、われらの神^{かみ}をはめまつれ、神^{かみ}をはめたふる聲^{こゑ}

をきみえしめよ

十三 神^{かみ}いわれらの靈^{たま}魂^{こん}をさおらへしめ、われらの足^{あし}のうごかさるゝ

ことをゆるしたまへ

十四 神^{かみ}よなんぢいれを試^こみて白^{しろ}銀^{ぎん}をねるおどくにわれらを鍊^{くわ}

たまひたまへ

十五 汝^{なんぢ}いれらを網^{あみ}にひきいき、是^{こゝ}の塵^{ちり}におもき荷^おを

十六 人^{ひと}々^々をわきらの首^{くび}のうへに騎^{また}てえしめたまひき、われらひ火^ひの

十七 なか水^{みづ}のおかをすぎゆけり、されど汝^{なんぢ}の中^{なか}よりわれらをひき

十八 いだし豐^{ゆたか}盛^{さか}なる處^{ところ}にいたらしめたまへり

一四三 われ燔祭をもてなんぢの家^{いへ}にゆらん、追^おりくるしむるときに
 一四四 わが口唇^{くちん}のいひいでわが口のれべし、誓^{ちか}をなんぢに償^{つぐな}せん
 一四五 わき肥^こたるものを燔祭とし、牡羊^{おつじ}を馨香^{かほ}として汝にさよげ、牡牛^{おし}
 一四六 と牡山羊^{おつじやう}とをうなへまつらん、セシ
 一四七 神をおろする人よ、みな來^{きた}りてきけ、われ神のわがたましひ
 一四八 のために作^{つく}たまへることをのべん
 一四九 わきわが口をもて神によむ、また舌をもてあむ
 一五〇 然るにわが心にふさる不義^{ふぎ}あらば、主^まのわれにきよたまふまじ
 一五一 されどまてどに神のきよたまへり、聖意^{せいぎ}をわがいのりの聲^{こゑ}にど
 一五二 めたまへり
 一五三 神のはむべきかな、わが筋^{いり}と黒^{くろ}り予けず、うの憐憫^{れんみん}をわれよりど
 一五四 りの予きたまへざりき
 第六十七篇 琴^{こと}にあとせて、酋長^{しゅうちやう}にうたごしめ

第六十七篇

琴^{こと}にあとせて、酋長^{しゅうちやう}にうたごしめ

たる歌^{うた}あり讚美^{さんび}なり

一 ねがえく、神わきらをあせれ、わきらをさきはひて、うの聖顔^{せいがん}
 二 をわれらのうへに照^てしたまへんとを、セシ
 三 此^このなんぢの途^{みち}のあまねく地にまられ、おんぢの救^{すく}のよろこ
 四 の國^{くに}のうち、に知^しきんがためあり
 五 かみよ、庶民^{しよじん}のなんぢに感謝^{かんしゃ}もろく、の民^{たみ}のみな汝^{なんぢ}を同^{どう}めた
 六 たへん
 七 もろく、の國^{くに}のたのしみ、又^{また}よろふびうたふべし、なんぢの直^{ただ}を
 八 もて、庶民^{しよじん}をさむき地のうへなる萬^{よろ}の國^{くに}、汝^{なんぢ}をさめたまふべけれ
 九 バあり、セシ
 一〇 神よ、たみらのおんぢに感謝^{かんしゃ}もろく、の民^{たみ}のみな汝^{なんぢ}をはめた
 一一 たへん
 一二 地の産物^{さんぶつ}をいだせり、神わが神^{かみ}のわきらを福^{ふく}ひたまへん

神われらをさきはひたまふべし、かくて地のもろくの極ことごとく神をおろさん

第六十八篇

俗長にうたえしめたるダビデのうたなり讃美なり

ねおはくは神おきたまへうの仇いことしくちり神をにくむものい前よりにけさらんみどを
 烟のあひやらるゝことくかれらを驅逐たまへ惡きものい火のまへに燃のどくるおどく神のたまへにてはろふべし
 されど義きものい歡喜あゝあきら神の前にてよろこびをたらん實にたのしみて喜まん
 神のみまへにうたへうの名をはめたまへよ乘て野をすぐる者のために大道をきづけ、かれの名をヤハとよぶうの前によろこびをさそ

きよき住居おまします神のみなしこの父やもめの寄士なり
 神のよるべなきものを家族の中にをらしめ國人をさきて福祖にみちびきたまふさきと悖逆者いうるはひなき地にすめり
 神よなんぢの民にさきだちいでよ野をすゝみゆきたまひ
 ろのどき地ふるひ天かこのみまへに漏る、レナイの山すら神イ
 スツエルイスラエルの神の前にふるひうこけり
 神よなんぢの嗣業の地のつかれあどろへたるどき豊かなる雨をふらせて之をかたくしたまへり
 巽になんぢの公會いうの中にどまきり、神よなんぢの恵をもて貧きものゝために預備をなしたまひき
 主みこと心を賜ふうの住者をけふる婦女いあはくして群をなせり

十二 もろくの軍旅の王たちにはげさる、逃去りたれを家なる婦女
 十三 うちの掠物をわかつ

二二 なんぢら羊の牢のうちにふすとき、鶴のつたさの白銀におほ
 二一 それらの毛の黄金におほはるゝおととし
 二〇 全能者かしてにて列王をちらし給へるとき、サルモン山に
 一九 雪ふりたるがごとくなりき

一八 パレヤンのやまの神の山なり、パレヤンのやまの崖かさなれる山な
 一七 り
 一六 崖かさなるもろくの山よ、なんぢら何なれば神の住所にえ
 一五 らびたせへる山をねたみ見るや、然ればエホバの永遠にこの山に
 一四 すまたせえん
 一三 神の戦車のよろづに萬をかさね、千にちきをくそふ、主の手に
 一二 いませり、聖所にいますがごとく、シナイの山にいますごと

一八 し
 一七 なんぢ高處にのぼり、窮者をとりこにして、ひきおこす、物を人のな
 一六 かよりも叛逆者のなかよりも受たせへり、ヤハの神こゝに住た
 一五 まはんが爲なり
 一四 日々にわれらの荷をおひたせ、主われらのすくひの神の

一三 はむべきかな、セラ
 一二 神の志をくわれらを助けたまへる神なり、死よりけられうる
 一一 の主エホバに由る

一〇 神の仇のかうべを撃やぶりたまへん、愆のなりにどま
 九 ものゝ髪おはき、顛頂をうちやぶりたまへん
 八 主いへらく我、パレヤンよりうきらを携へり、海のふかき所よ
 七 りたづさへ歸らん

六 斯てあんぢの足をうのわたの血にひたし、之をあんぢの犬の舌

にためしめん

神よすべての人の

王の聖所にすま

みゆきたまふを見たり

後についで

うつ童女の赤かにありて

驅ふもの

の前にゆき

琴ひくもの

の

後

にまたさへり

かんぢらすべての

會にて神を得めよ

イスラエルのみなもど

り出る

なんぢらよ主を得めまつ

彼處に

かれらを統るとし

わかしわ

かき

ベンヤミンあり

ユダの諸侯と

の諸衆とあり

またセブルンの

きまたち

ナフタリの諸侯あり

なんぢの神

なんぢの力

をたてたまへり

神よ

かんぢらすべての

會にて神を得めよ

イスラエルのみなもど

り出る

なんぢらよ主を得めまつ

彼處に

かれらを統るとし

わかしわ

かき

ベンヤミンあり

ユダの諸侯と

の諸衆とあり

またセブルンの

きまたち

ナフタリの諸侯あり

なんぢの神

なんぢの力

をたてたまへり

神よ

かんぢらすべての

會にて神を得めよ

イスラエルのみなもど

り出る

なんぢらよ主を得めまつ

彼處に

かれらを統るとし

わかしわ

かき

ベンヤミンあり

ユダの諸侯と

の諸衆とあり

またセブルンの

きまたち

ナフタリの諸侯あり

なんぢの神

なんぢの力

をたてたまへり

神よ

かんぢらすべての

會にて神を得めよ

イスラエルのみなもど

り出る

なんぢらよ主を得めまつ

彼處に

かれらを統るとし

わかしわ

かき

ベンヤミンあり

ユダの諸侯と

の諸衆とあり

またセブルンの

きまたち

ナフタリの諸侯あり

なんぢの神

なんぢの力

をたてたまへり

神よ

かんぢらすべての

會にて神を得めよ

イスラエルのみなもど

り出る

なんぢらよ主を得めまつ

彼處に

かれらを統るとし

わかしわ

かき

ベンヤミンあり

ユダの諸侯と

の諸衆とあり

またセブルンの

きまたち

ナフタリの諸侯あり

なんぢの神

なんぢの力

をたてたまへり

神よ

かんぢらすべての

會にて神を得めよ

イスラエルのみなもど

り出る

なんぢらよ主を得めまつ

彼處に

かれらを統るとし

わかしわ

かき

ベンヤミンあり

ユダの諸侯と

の諸衆とあり

またセブルンの

きまたち

ナフタリの諸侯あり

なんぢの神

なんぢの力

をたて

たまへり

神よ

かんぢらすべての

會にて神を得めよ

イスラエルのみなもど

り出る

なんぢらよ主を得めまつ

彼處に

かれらを統るとし

わかしわ

かき

ベンヤミンあり

ユダの諸侯と

の諸衆とあり

またセブルンの

きまたち

ナフタリの諸侯あり

なんぢの神

なんぢの力

をたて

たまへり

神よ

かんぢらすべての

會にて神を得めよ

イスラエルのみなもど

り出る

なんぢらよ主を得めまつ

彼處に

かれらを統るとし

わかしわ

かき

ベンヤミンあり

ユダの諸侯と

の諸衆とあり

またセブルンの

きまたち

ナフタリの諸侯あり

なんぢの神

なんぢの力

をたて

たまへり

神よ

かんぢらすべての

會にて神を得めよ

イスラエルのみなもど

り出る

なんぢらよ主を得めまつ

彼處に

かれらを統るとし

わかしわ

かき

ベンヤミンあり

ユダの諸侯と

の諸衆とあり

またセブルンの

きまたち

ナフタリの諸侯あり

なんぢの神

なんぢの力

をたて

たまへり

第六十九篇

百合花にあはせて、ゆかりはな 節長にうたはしめ
たるダビデのうた

一 神よねがはく我をすくひたまへ大水なごきたりて我がた
まじひにまであよべり
二 われ立止なきふかき泥の中にまづめり、たふ 且れ深水にあちいる、ふかき あ
はまつわが上をあふれす
三 且れ歎息によりてつかきたり、なげき 且れ喉のかききわが目わが神
をまぢりひてねどろへぬ
四 故なくして且れをにくむ者、あま 且れおかしらの髪よりもおほく調な
くしてわが仇となり我をはろばさんとするもの、いさかい 勢力つよし、
われ掠めぎりしものをも償はせらる
五 神よなんぢのわが思あるを去りたまふ、わがもろくの罪はな
んぢにかくとさるなり

六 萬軍のエホバ主よ、よは ねがはく我をすくひ汝をまじのすむ者をわが故ふよ
りて居かしめらるることなからしめたまへ、よ イスラエルの神よ
七 ねがはく我なんぢを求むる者をわが故ふよりて耻をねはしめ
らるるふきなからしめたまへ
八 我のなんぢのために請をわが耻の面をわが得ひたればなり
九 わがわが兄弟にわが旅人のごとく、わが母の子にわが外人のごとく
なれり
十 ろいなんぢの家をわがもふ熱心、あつしん 且れをくらひ汝をろしるもの、
十一 請をわがよべし
十二 且れ涙をながして食をたち、わが靈魂をなげかすを反てこれ
によりて請をうく
十三 われ露布をころもとなし、あつしん にかきわが言語となりぬ
十四 門にすむる者のいひ、あつしん 且れをかたる、あつしん 且れわが醉狂たるものに、あつしん 罪ひ

はやされたり

然しかにあれどエホバよ、見れみの恵めぐみのときに汝きみにいのる、ねがはくは神かみよなんぢの憐憫あはれみのおぼきによりて汝きみのすくひの眞實まことをもて我われにこたへたまへ

ねがはくは泥どろのなかより我われをたすけいだして沈おろまざらしめたまへ、我われをにくむものより深水ふかみづよりたすけいだしたまへ

大水おほいみづをきを淹ひたふことなく淵ふちをきをのむことなく坑あなの口くちをわがうへに閉しめることなからしめたまへ

エホバよねがはくは我われにこたへたまへ、なんぢの仁慈いつしやううるはしけれとなり、なんぢの憐憫あはれみのおはし、われに歸かへりきたりたまへ面おもてをなんぢの僕こいつにかくしたまふなかれ、われ追おそりくるしめり、ねがはくは速すみかに我われにふたへたまへ

わがたまひに近ちかくよりて之これをあがなひわが仇かたのゆゑに我われを

すくひたまへ汝きみのわがうくる詩うたとはちと侮辱おとしことをゑりたまへり、わが敵かたのみ

な汝きみのたまへにあり

眼めをわが心をくだきぬれば我われいたくわづらへり、わが憐憫あはれみをあ

たふる者をまちたきと一人だになく思おもむるものを俟まちたれと一

人ひとをもとまざりき

かきらの苦草くくさをわがくひものにあたへ、わが渴かわけるときに闇やみを

のませたり

ねがふべくは彼等かれらのまへなる筈はずの網あみとなり、うれたのむ安穩やすみのつ

ひに歸かへりなれ

うの目をくらくして見みしめず、うの腰こしをつねにふるとしめたまへ

願ねがひなんぢの慈悲あはれみをかれらのうへにろよき汝きみのいかりの猛はげ

烈あつをかきらに追おひ及しませたまへ

かきらの屋いをむなしくせよ、うの幕屋まくやに人をすまはするなかれ

あれらのなんぢが撃うたまひたる者をせめ、なんぢが傷きずけたまひ

たるものゝ痛いた疾やあたりふるればなり

ねおさくわれらの不義よみに不義よみをくさへてなんぢの義ぎにあづ

からせ給ふなかれ

かれらを生命いのちの冊ふよりけして殺ころきものどもに配まさるゝこと

あからしめたまへ

斯ごとて是れいくるしみ且かつうそひあり、神かみよねおはくひなんぢの救すく

われを高處たかところにあかんとを

わき歌うたをもて神かみの名なをはめたまへ感謝かんしゃをもて神かみをあがめまつ

らん

此これをうしまたれ角つうと路みちとある力ちからつよき牡牛おしにまさりてエホ

バよろふびたまはん

眞まこと通とお者もののこれを見てよろこべり、神かみをまたふ者ものよ、なんぢらの心こころ

のいくべし

エホバの乏ひしきものゝ聲こゑをきよ、うの俘囚とりこをろしめたまはさ

ればなり

天地あめつちのエホバをはめ蒼海そうかいどろの中なかあうごくあらゆるものとの

エホバを讃ほめまつるべし

神かみのシオンをすくひエダのもろゝの邑むらを建たたまふべけれを

なり、かれらの其處そこにすみ且かつこれをあのが有あとせん

うの僕こいつのすゑも亦またこれを翻ひろの名なをいつくしむ者ものろの中なかにす

まん

第七十篇

俗長じやくちやうにうたはしめたるダビデの
記念きねんのうた

神よねがはくは我をすくひたまへ、エホバよ速きたりて我をたすけたまへ

わが靈魂をたづぬるものよ恥あはてんことを、わが害はるるを

よろめふものよ後にまゐりきて恥をわはんふとを

あゝ視よや視よやといふものよわが恥によりて後にまゐり

かんことを

すべて汝をたづねもどむる者のなんちによりて樂みよろこ

んことを、かんの救をたまふものよつねに神の大なるかき

せかへんことを

思ひ苦しむ且どもし神というきて、我にきたりたまへ、汝の

助けわれを救ふものなり、エホバよねがはくはわが

第七十一篇

エホバよ我なんちを依頼む、わがこころの何の日までも恥うくる

ことなからしめ給へ

なんちの義をもて我をたすけ我をまぬかれしめたまへ、かんの

の耳をわれに傾けて我をすくひたまへ

わがこころの汝をすまひの誓どかりたまへ、われ恒にうのど

ろに往くことを得ん、なんち我をすくはんとて勅命をいだしたま

へ、うの汝のわが誓わが城なり

わが神よあしきものよ手より、不義、残忍ある人のてより我をま

ぬかきしめたまへ

主エホバよ、かんのわが望かり、わが幼少よりの恃あり

われ胎をはさるより汝にまもらる母の腹にありしときより

汝にめづられたり、我つねに汝を得めたまへん

我あ得くの人にあやしむるよおどき者とかれり、然ぞなんちの

わが堅固けんこある處所ところなり

八 なんぢの頌辭ゆゑとなんぢの頌美ほめの終日ひらけわが口にみちん

九 わが年老としおいぬるとき我をすてたまふなかき、わが力ちからあどろふるとき

十 我をはなれたまふなり

わが仇あいつわがことを論あいつらひ、わが靈魂たましいをうかゝふ者のたゞひに

十一 謀はかていふ

十二

神かれを離はなれたり敵あいつをたすくる者なし、かれを追おてどらへよと

神よわきに遠とほきかりたまふなかれ、わが神よどく來きりて我をた

十三

わがたましひの敵あいつはち且かつあどろへ我をうこなはんとするもの

十四

の謗しほと辱はじにお得えはれよ

されど我いたえ歩あるをいだきていやます／＼汝を得えめたよへ

一五

わが口くちひはなもす汝の義よきとなんぢの報はぐをきたらん、われうの

一六

數かずをきりきればなり

一七

われの主きホバの大能ちからの事跡わざをたづさへゆらん、わきの只ただかん

一八

ちの義よきのみをかたらん

一九

神よなんぢわきを幼少こせうより教しへたまへ、わき今いまふいたるまで

二〇

汝のくすしき事跡わざをのべつたへたり

二一

神よねがとくわれ老おいて頭髮かみまろくなるども我わがなんぢの力ちから

二二

を次代つぎにのべつたへ、なんぢの大能ちからを世よにうまれいつる凡みなのもの

二三

の宣傳のべつたふるまで我をはなき給たまふなれ

二四

神よなんぢの義よきもまた甚こたかし、なんぢの大能ちからなることをなした

二五

まへ、神よたれか汝にひどじき者ものあらんや

二六

汝われらを多おほいおもひ苦難くるがたにあはせたまへり、なんぢ再びわれ

二七

らを活いし、われらを地の深所ふもとよりあげたまはん

二八

詩篇 第七十一篇 自十五至廿節 百七十三

二 ねがはく我をいよく大あらしめ歸さきたりて我をささ
め給へ

二二 わが神よさらば聖哉もて汝をはめなんちの眞實哉はめた
たへん、イスラエルの聖者よわが琴をもてなんち哉讃うたさん
二二 聖前にうどふときき口唇よろこびなんちの贖ひたまへ
る聖靈あはれに喜ん
二四 わが舌もまた終日なんちの義をかたらん、それを害えんとする
もの愧惶つきばなり

第七十二篇

ソロモンのうた

一 神よねがく汝のもろくの審判を王にあたへなんちの義
を王の子にあたへたまへ

二 かき我をなすもてなんちの民をささき公平をもて苦しむものを
救はん

三 義によりて山と岡とに民に平和をあたふべし

四 かき我のくるしむ者のために審判をなし苦しむものの子業
をすくひ處るものを壊きたまさん

五 かれら日と月とのあらんかぎり世々おしなべて汝をささる
べし

六 かれり蒔ける牧にふる雨のおどく地をうる得す白雨のごと
くの予さん

七 かきの世にたしき者いさかえ平和の月とするまで豊かな
らん

八 またろの政治の海より海にいたり河より地のほてにおよぶべ
し

九 野にをる者のまへに屈み、の仇の塵をなめん

十 マルシ、あよび鳥々の王たちい眞實をさめ、シバとセバの王た

十一 ちは禮物いづしをさしげん
 十二 もろくの王きはうのまへに俯伏うつふくし、もろくの國くにのかきにつか
 十三 へん
 十四 かれの乏なしき者をうの叫こゑふどきにすくひ助けなき苦しむ者を
 十五 たすけ
 十六 弱よわきものと乏なしき者とをあそびみ乏なしきものと靈魂たましひをすくひ
 十七 かきらのたましひを暴虐たうたつと強暴きやうぼうとよりあがなひたまふうの血
 十八 のみまへに貴たかかるべし
 十九 かきらに存たもふべし、人のレバの黄金くわんごをさしげてかきのために恆とこ
 二十 にいのと終日しゅうじつかきをいはさん
 二十一 國くにのうち五穀ごこくゆたかにしてうの實みのレバノンのおどく山のい
 二十二 たまきにうよぎ邑むらの人々ひとの地の草くさのごとく榮さかゆべし
 二十三 かきの名なのつねにたえず、かきの名なの日の久ひさしきごとくに絶たる

二十四 こゑなし、人のかきによりて福ふくをえん、もろくの國くにのかきを
 二十五 さいとひなる者ものとまへん
 二十六 たまイスラエルの神かみのみ奇あましき事跡ことせきをなしたまへど、神かみ
 二十七 ホバのはむべきかな
 二十八 うの榮光えいこうの名なのよまにはむべきかな全地ぜんちのうの榮光えいこうにて満みちべ
 二十九 し、アトメン、アトメン
 三十 エッサイの子こダビデの斷ことをえりぬ

第七十三篇 アサフのうた

一 神かみのイスラエルにむかひ心のきよきものに對むかひひてまことに惡わる
 二 あり
 三 然しかにあれどわれのわが足あしつまづくをかり、わが歩あるすべるをかり
 四 にてありき
 五 このわれ惡わるきものと榮さかゆるを見てうの誇こゝろきる者をねたみしに

十 九 八 七 六 五 四 三 二 一
 よる
 あきらみ死るに苦しみあく、ろのちあらひ反てかたし
 あきらみ人のごとく憂にをらず人のごとく患難にあふことあ
 り
 このゆゑに傲慢の狀師のさどくろの頭をめぐり強暴のころも
 のさどく彼等をお回へり
 りれら肥ふよりてろの目どびいで心の欲ひにまさりて物をう
 るなり
 また嘲笑をあし惡をもて暴虐のみどをいだし高よりてもの
 いふ
 うの口、天にあき、ろの舌を地にあまねく往しむ
 このゆゑにろの民のこゝにかへり水のみちたる杯をまぼり
 いだして

十二 十一 十 九 八 七 六 五 四 三 二 一
 いへらく、神いかで知たまふんや、至上者に知識あらんやと
 恥よりきらの惡きものなるに常にやすらかにしてろの富よし
 くさされり
 誠に足さぬいたづらに心をきよめ罪戾をかさずして手をあら
 ひたり
 うの足れ終日あやみにあひ朝ごとに實をうけしあり
 足れもし斯ることを通んといひしあらば我なんぢが子輩の代
 をあやまらせしならん
 足れこれらの道理をあらんとして思ひめぐらしにわが眼い
 たく痛たり
 われ神の聖所にゆきて、これらの結局をふかく思へるまで、然
 ぞき
 誠にさんぢいかにを清りなるところにあき、かきらを滅亡に

一 哀れしいれたまふ
 二 ありきの瞬間にやふきたるかあ、おれらの恐怖をもてこどく
 三 減ひたり
 四 主よなんぢ目をさましてありきの像をうろしめたまへんとき
 五 の夢みし人の目さめたるおどとし
 六 わが心けうきへ、わが腎いさされたり
 七 われあろかにして知覺なき聖前にありて黙にひどしかりき
 八 されど我つねになんぢごともにより、汝わが右手をたもちたま
 九 へり
 一〇 あんぢうの訓諭をもて我をみちびき後またわれをうけて榮光
 一一 のうちに入たまはん
 一二 汝のほかに我たきをか天にもたんだ地に、なんぢの他にわが
 一三 よものなし

一四 わが身どわが心どいあどろふされど神のわがこころの誓わが
 一五 どこしへの職業なり
 一六 祇よなんぢに遠きものの減ひん、汝をはなれて森涯をあこなふ
 一七 者のみなあんぢ之を得るほしたまひたり
 一八 神にちかづき奉るの我によきことなり、われの主エホバを居所
 一九 としてうのもろくの事跡をのべつたへん
 二〇 第七十四篇 アキフの教訓のうちた

二一 神よいかなきバ汝われらをかぎりなく棄たまひしや、奈何バナ
 二二 んぢの草薺の芽にみいかりの煙あさるや
 二三 ねおはくは往昔なんぢが買求めたまへる公會ゆづりの支派と
 二四 なさんどて贖ひたまへるものを思ひいでたまへ、又あんぢが住
 二五 たまふレオンレオンの山をおもひいで給へ
 二六 どこしへの滅亡は跡にみあしを向たまへ仇の聖所にてもろも

ろの惡きわざをあこなへり
 なんぢの敵いなんぢの集れなかに吼たけびあのお族をたてよ
 誌とせり
 かれらに林のまげみにて斧をあぐる人の狀にみゆ
 いま鐵と鎧をもて聖所のなかなる彫刻めるものをことし
 く鬚ちおとせり
 かれらになんぢの聖所に火炎かけ名の居所をけりて地にた
 どしたり
 かれら心のうちにいふわれらことく之をこぼちあらさん
 どかくて國內ある神のもろくの會堂をやきつくせり
 わさらの誌しをえず預言者も今になし斯ていくろの時をうふ
 べきわれらのうちに知るものなし
 神よ敵いいくろの時をよるまでうしるや仇いなんぢの名をど

こしへに得すならんか
 いかかれを汝の手とぎの手をひきたまふやねむくハ手を
 ふところよりいだじてかきらを滅したまへ
 神いにしへよりわが王ありすくひを世の中にあこなひ
 たまへり
 なんぢの力をもて海をわかし水のなかある龍の首をくだき
 龍のかうべをうちくだき野にすめる民にあたへて食となした
 まへり
 なんぢの泉と水澁とをひらき又もろくの大河をからしたま
 へり
 雲いなんぢのもの夜もまた汝のものなりかんなちの光と日と茂
 りなへ
 わまねく地のもろくの界をたて夏と冬とを回くりたまへり

二八 エホバよ仇いなんちをうしり愚かなる民いなんちの名をけり
 せりこの事をおもひいでたまへ

二九 願くいなんちの鶴のたまむひを野のあらしにわたしたまふ
 三〇 つかれ苦しむものよ命をどこしへに忘れたまふなかれ
 三十一 契約をかへりまたまへ地のくらきところの強暴の宅にて充た
 きむなり

三二 ねむとくい唐げらるゝもれを悔退あしめ給ふなかき憐るもの
 三三 ど苦しむものに聖名を叫めたゝへしめたまへ

三四 神よあきてなんちの訟をあげつらひ愚かなるものゝ終日なん
 三五 ちを誇るをみこゝろに記たまへ

三六 なんちの敵の聲をわすれたまふなかれ汝にさからひて起りた
 三七 つ者のかしらましき聲いたえずあがき
 三十八 第七十五篇 滅すなかきといふ期にあてせて

伶長にうたえしめたる歌なり調
 美なり

一 神よわれら汝にかんしやすわきち感誦す、なんちの名いちかく
 二 坐せばなりもろゝの人いなんちの奇しき事跡をかたりあへ
 三 定りたる期いたらば我なほき審判をなさん

四 地をすべての之にすむものと消去しとき我うのもろゝの柱
 五 をたてたり、セツ

六 わき誦さるもれを誇りかにれてあふあかきといひ惡きものに
 七 角をあぐるなあきといへり

八 なんちらの角をたかく擧るなかき頸をかたくして高りいふな
 九 かき
 十 擧るここの東よりあらず西よりあらず、また南よりあらず、また北よりあらず

七 ちぎるあり
八 たを神のミ密士にましませよ此をさげ彼をあげたまふ
九 エホバの手あさかつきありて清あわだてり、うれ中おもものまじ
十 りてまつ、神これをもまぎいだせり誠じろの洋の地のすべての
十一 あしき者まばりて飲むべし
十二 されど我のヤコブの神をのべ叫たへん、どこしへに讃うたえん
十三 われ惡きものますべての角をきりはなだん義きものま角のあ
十四 げらるべし

第七十六篇

琴にあえて伶長にうたえしめ
たるアサフの歌あり讚美なり

一 神のユダにえられたまへり、ろの名のイエスエルに大なま
二 またサレムの中にろの幕屋あり、ろの居所のレオンあり
三 新にてるれろの矢矢をり盾と劍と戰陣と及やふりたまひ

さ、セリ

四 なんち榮光あり掠めろをふ山よりもたふとし

五 心のつよきものハ掠めらる、かれらの睡にえづみ勇ましきもけ
六 ハ皆ろの手を見うしなへり

七 ヤコブの神は、なんちの叱咤によりて戰車と馬とも深睡お
八 つけり

九 神よなんちを懼るべきものなれ、一たび怒りたまふときハ誰
十 らみまへに立えんや

十一 なんち天より宣告をのりたまへり、地のへりくだる者をみなす
十二 くさんどて神のささお立たまへるとき地のわろきて黙した
十三 り、セリ

十四 實に人のいりろの汝を得むべし、怒のあまりハ汝おのれの帯ど
十五 したまへん

十一 なんぢの神 エホバ あちかひをたてゝ償へ、うのまはりなるすべ
 ての者のあうるべき エホバに禮物をささぐべし
 十二 エホバのもろくの諸侯のたましひを絶たまえん、エホバの地
 の王たちれあうるべき者なり

第七十七篇

エドトシの體あしたむひて伶長

一 我わがこゑをあげて神によむまん、われ聲を神ああげなばうの
 耳をわれふかたふけたまへん
 二 わがなやみは日あわき主をたづねつれり、夜わが手をのべて
 仰るむることなかりき、わがたましひに慰めらるゝをいなみた
 り
 三 わき神をあもひいでゝ打なやむ、われ思ひなげきてわが靈魂あ
 どりへり

四 なんぢのわが眼をさへて開がしめたまへず、我れものいふこ
 と能はぬはせお惱みたり

五 わきむらしの目にしへの年をあもへり

六 われ夜わが歌をたもひいづ、われわが心にてふらくあもひわが

七 靈魂のねもころに尋ねもどむ

八 主のとしへに樂たまふや再びめをみを垂たまえざるや

九 ろの憐憫のこりなく永遠にさり、ろのちあひの世をあおく廣

きたるや

十 神と思をはせこすことを忘きたまふや、怒をもてろのあこれみ

十一 を結たまふや、セラ

十二 斯るときあ我いへらく此いたまわが弱きおゆゑのみ、いで至上

者のみぎは手のもろくの年をあもひいでん

わきヤハは作爲をのべどなへん、わき往古よりありし汝おくす

しきみわさを思ひいださん

また我なんちのすべての作爲をねもひいで汝のなしたまへる
ことを深くおもこん

神よあんちの途いいときよし神のごとく大なる神いたれや
なんちの奇きみわさをなしたまへる神ありもろくの民のあ

ひだにろの大能を止めし

ろの臂をもてヤコブヨセフの子選なんちの民をあなひたま
へん、セラ

あみよ大水あんちを見たり、あひみづ汝をみてをのよき淵もま
たふるへり

雲ひみづをろよぎいだし空ひひよきをいだし、なんちの矢いえ
しりいでたり

なんちの雷鳴のこゑは嵐風のうちにありき、電光の世をてらし

地ひふるひうさけり
なんちの大進の海のなかにあり、なんちの徑いね得みづの中に

あり、あんちの蹤跡いたづねおたかりき
なんちろの民をモーセとアロンどの手によりて羊の群のごと

くみちびきたまへり

第七十八篇 アサフの歌訓のうた

わが民よわが歌訓をきき、わが口のことばにあんちらの耳をか

たふけよ

われ口をひらきて譬喩をまうけいにしへの玄幽なる語をかた
ういでん

是われらが義にきよしとこ知しとこ又われらが列祖のか
たうつたへし所あり

われら之をうの子孫にかくさずエホバのもろくの頌美と能

力^{ちから}どうのなしたまへる奇^きしき事^{こと}跡^{あと}とをきたらんとする世^よにっ
げん

うの^{エホバ}詔^{あかし}詞^{ことば}をヤコブのうちにたて律^{りつ}法^{ぽう}をイエスエルのう
ちに定^{さだ}めてうの子孫^{こく}あたらすべきみとをわさらの列祖^{れきそ}におは

せたまひたまひたり代^よのちに生^{なま}るゝ子孫^{こく}おこを^を知^しみづから起^た

りてうのまた子孫^{こく}につたへ

かきらをして神^{かみ}によりたのミ神^{かみ}のミわきを^を忘^{わす}れずの誠命^{せいめい}を

まもらしめん爲^{ため}なり

またろの列祖^{れきそ}のごとく頑固^{がんこ}にしてろむくものゝ類^{るい}となり、うの

みより修^{しゆ}まらずのたまひ神^{かみ}に忠^{ちゆう}ならざる類^{るい}となり、さらん

爲^{ため}なり

エフサイのころに武具^{ぶぐ}とよのへ弓^{きう}とたづさへしに戦^{いくさ}ひの日^ひ

にうしろをろむけたり

かれら神^{かみ}のちかみをまもらず、うのおきてを^を隠^{かく}こをいのみ

神^{かみ}のなしたまへることよりさらに罪^{つみ}したまへる奇^きしき事^{こと}

跡^{あと}とをわすれたり

神^{かみ}のエルサレムの國^{くに}にてツァンの野^のにて妙^{たみ}なる事^{こと}をうれらの列祖^{れきそ}

のまへになしたまへり

すあはち海^{うみ}をさきてあれらを過ぎしめ水^{みづ}をつみて堆^{たい}りくした

まへり

ひるの雲^{くも}をもてあれらをみちびき夜^よのよもずおら火^ひの光^{ひかり}をも

てこを導^{みち}きたまへり

神^{かみ}のあれのおて磐^{いわ}をさき大^{おほ}なる淵^{ふち}より汲^{くみ}おこごくにかけらに

飲^のしめ

また磐^{いわ}より流^{なが}をひきて河^かのごとくに水^{みづ}をなごせしめたまへり



然るにかれら侮たえまなく罪戾をかして神にさあらひ荒野に
て至上者にうむき

またおのの懲のために食をもどめてろの心のうちに神をこゝ
ろきたり

然のみならずかれらの神にさうらひていへり神の荒野にて鐘
をまうけたまふを得んや

みよ神いはを撃たまへを水得せをしりいで流あふきたり糧を
もあたへたまふを得んや神の民のために肉をうなへたま
はんやと

この故にエホバこそを聞いていきよほりたまひき火のヤコブに
ひらひてもえあがり怒のイサラエルにむらひて立踰れり

こわられし神を信ぜずろの故にたのまきりし故なり
さきとなは神のうへなる雲ふ命じて天に戸をひらき

彼等のうへにマナをふらせて食はしめ天の靈物をあたへたま
へり

人みな勇士の糧をくらへり神のわれらお食物をあくりて飽足
しめたまふ

神の天に東風をふらせ大能もて南の風をまちびきたまへり
神のかきられうへに塵のごとく肉をふらせ海の沙のごとく翼

ある鳥をふらせて
ろの饗のなるろの住所のまゝに落しふまへり

斯てゐるらひ食ひて飽たりぬ神のこきにろの欲きしものを與
へたまへり

ゐるらひ未だろの懲とはなれず食物のあは口のうちにあるは
とに

神のいかり既られらに對ひてたちのぼり彼等のうちにて最も

みえたる者をころしイサツエルのわめき男をうちたふしたまへり

これらの事ありしかど彼等ひなは罪戾をかしてうの奇しきみわきを信ぜざりしうバ

神ひあさらの日を空しくすゞさせうの年をあらきつゝ過させたまへり

神かれらを殺したまへる時かきら神をたづね歸りきたりて懇ろに神をもとめたり

かくて神ひれのれの磐いどたつき神ひあのだの贖主なることをおもひいでたり

然ひあきと彼等ひたさうの口をもて神にへつらひうの舌をもて神あいつはうをいひたゞしのみ

うのうれらのこよろひ神にむりひて堅らさうの契約をさもるに忠信ならざりき

されと神ひあはれきに充たまへをうれらの不義をゆるして亡ぼしたまはす屢そろのみにありを轉してことくひ忿患を

ふりあこし給えざりき又あれたる肉にして過去バふたゞび歸りこぬ風なるをおもひいで給へり

あさらの野にて神にうむき荒野にて神をうれへしめしこと幾次や

あれたるへすゝ神をこゝろみイサツエルの聖者をはづあしめたり

かれらの神の手をも敵より贖ひたまひし日をもねもひいでざりき

神のうのもろくの豫兆をエロフトにあらはしうの奇しき事

四四 神をツアンの野にあらせし
 四三 あれらの河を血にあらせてうの流を飲あたはさらしめ
 四二 また蛇の群をおくりてあれらをくとしめ蛇をおくりてうれ
 四一 を亡ぼさせたまへり
 四〇 神はあれらの田産を盗賊にわたし、あれらの働勞を蝗にあたへ
 三七 たまへり
 三六 神は雷をもてあれられ葡萄の樹をあらし霜をもてあきら桑
 三四 の樹をあらし
 三三 うの家畜をへうにわたし、うの群をもゆる閃電にわたし
 三二 かれらの上にえげしき怒どいきせ降りど怨恨どかやみど禍害
 三一 のつらひは群をなげいだしたまへり
 三〇 神はうの怒をもらす道をまうけ、あれらのたましひを死よりま
 二九 ぬかしめす、うのいのちを復しにわたし

二八 エロブトにてすべての初子をうちハメの幕屋にてかれらの力
 二七 の始をうちたまへり
 二六 さておのれの民を羊のごとくお引いだし、かれらを曠野にて
 二五 けだもの主群のごとくにみちびき
 二四 あきらをもなひておうれなく安けからしめ給へり、されど海
 二三 へうれられ仇をお憎へり
 二二 神はうの聖所のさかひ、うの右の手おて購たまへるみの山にお
 二一 れらを携へたまへり
 二〇 又うきらの前にてもろくの國人をおもひいだし準繩をもち
 一九 あうの地をわうちて嗣業となしイスラエルの族をうきらの幕
 一八 屋にすまえたたまへり
 一七 然らわきと彼等はいとたあき神をこそろみ之にらむきてうの
 一六 もろくの語詞をさもらす

振きしり予きてろの列祖のごとく眞實をうしなひくるへる可
 のごときくひるがへりて逸ゆけり

高處をまうけて神のいきざほりをひき刻める像にて神の嫉妬
 をおこしたり

神きまたまひて甚だしくいかり大ホイスラエルを憎みたまひ
 しりば

人々の間にあきたまひし幕屋なるシロのあげをりを樂さる

ろの力をとりことならしめろの榮光を敵の手おわたし

ろの民を劍にあたへろの嗣業にむかひて甚だしく怒りたまへ

火いれらのわあき男をやさつくしおれらの處女ろの婚姻

の歌によりて怒らるゝことなく
 るとろの怒りつるきあてわれらの罪のなげきだ

あせきりき

抱るときお主いねふりし者のさめしごとく勇士の酒によりて

さけぶるごとく目さめたまひて

ろの敵をうちしり予けどこしへの辱をかれらに負せたまへり

またヨセフの幕屋をいなみエフライムの族をえらむ

ユダの族ろのいつくしみたまふシオンをえらびたまへり

ろの聖所を山のごとく永遠おさだめたまへる地のごとくお立

たまへり

またろの僕ダビデをえらびて羊の牢のなかよりとり

乳をあたふる牝羊にしたがひゆく勤のうちより携へきたりて

ろの民ヤコブろの嗣業イスラエルを救せせたまへり

斯てダビデろのこゝろの完全おまたがひてかれらを救ひろ

の手のたくをもて之をみちびけり

第七十九篇

アヤフのうた

一 あゝ神よもろゝの異邦人いなんちの嗣業の地我をかしなん
 二 ちの聖宮をけがしエルサレムをこぼちて礫堆どなし
 三 なんちの僕のかかをねをうらの鳥あたへて餌どなし、なんち
 四 の聖徒の肉を地のけものあたへ
 五 うの血をエルサレムのめぐりあ水のさどく流したり、されせ之
 六 をさうむる人なし
 七 足れらの隣人あろしられ四周のひとゝあ侮られ嘲けらるゝ
 八 者どなきり
 九 エホバよかくて幾何時をへたまふや、汝どこしへあ怒たまふや、
 一〇 なんちのねたまの火のさどく燃るか
 一一 願くいなんちを誦さることくあひと聖名をよばざるもろゝ
 一二 の國のうへあ聖怒をうゝぎたまへ

七 かさらのヤコブを呑うの住處をわらしたまふなり

八 わくらあひかひて先祖のよみしなるわきを記念たまふあ
 九 かれ願くいなんちの憐憫をもて速にわれらを迎へたまへ、わ
 一〇 れらの貶されて甚だしく卑くなりたまふなり
 一一 われらのすくひの神よ名のえいくわうのためあ我憐をたすけ
 一二 名のためあわくらを救ひ、われらの罪をのぞきたまへ

十 いるなれば異邦人いふ、かれらの神といづくあありやと、願く
 十一 となんちの僕等がながされし血の報をわれらの目前にあして
 十二 異邦人にあらしめたまへ

十三 ねがとくの汝のみまへあどらときびとの嘆息のどまかんこと
 十四 を、なんちの大なる能力により死あさだめられし者をよもりて
 十五 存へしめたまへ

十六 主よわれらの隣人のなんちをうたひたる誇を七倍ましてろの

一 懷^{みこころ}あむくいかへしたまへ

二 然^{さう}ばわれらなんぢの民^{たみ}あんなぢの草^{くさ}苑^{えん}のひつじの永遠^{えいぞう}あんなぢあ感謝^{かんしゃ}しらの頌^{ほめ}辭^{ことば}を世^よ々^々あらとさん

第八十篇 證^{あかし}詞^{ことば}の百合^{ゆり}花^{はな}といへる調^{しらべ}あはせ

て伶^{うたかた}長^{なが}ふうたとしめたるアサフの歌^{うた}

一 イスラエルの牧^{かひ}者^{しや}よひつじの群^{ぐん}のこどくヨセフを導^{みち}きたまふものよ、耳^{みみ}をうたふけたまへ、ケルビムのうへに坐^{すわ}したまふものよ、光^{ひかり}をはなちたまへ

二 エフサイムベニヤミンマナセの前^{まへ}あんなぢの力^{ちから}をよどあみし來^きりてわれらを救^{すく}ひたまへ
三 神^{かみ}よふたしびわさちを復^{かへ}し、なんぢの聖^{ひがは}顔^{がん}のひかりをてちしたまへ、然^{さう}ばわれら救^{すく}はれん

四 ときまで怒^{いかで}りたまふや
五 汝^{なんぢ}かきらあなまたの糧^けをくらはせ涙^{なみだ}を量^{はか}器^があまみつるはど

六 あたへて飲^{のみ}じめたまへり
七 汝^{なんぢ}われらを隣^{となり}人のあひあらうふ種^{こゝろ}料^{りょう}どあしたたまふ、わさちの仇^{あだ}

八 いたむひにあきわらへり
九 萬^{ばん}軍^{ぐん}の神^{かみ}よふたしびわれらを復^{かへ}したまへ、汝^{なんぢ}のみあはの光^{ひかり}をて

十 らしたまへ、さらむわれら救^{すく}はれん
十一 かんち葡萄^{ぶどう}の樹^きをエジプトより携^もへいだしもろくの國^{くに}

十二 人^{ひと}をおひまりきて之^{これ}をうゑたまへど
十三 汝^{なんぢ}のまへに地^ちをまうけたまひしかを深^{ふか}く根^ねして國^{くに}あはびこ

十四 れり
十五 うの影^{かげ}いもろくの山^{やま}をあはひうのえだの神^{かみ}の香^{かう}柏^{はく}のこどく

一 あてありき
 二 うの樹のえだを海までのべうの若枝を河までのべたり
 三 汝いかなれをその垣をくづして路ゆくすべての人に摘取せた
 四 まふや
 五 はやしの猪のふきをあらし野のあらき獸これにくらふ
 六 あゝ萬軍の神よねがはくは歸りたまへ、天より俯視てこの葡萄
 七 の樹をかへどみ
 八 なんちが右の手にてうゑたまへるもの自己のため強くなし
 九 たまへる枝をまもどたまへ
 十 うの樹の火にて焼れたまた斫たふさる、かれらに聖顔のいかりあ
 十一 て亡ふ
 十二 ねがはくはかんちの手をその右の手の人のうへにおおき自己の
 十三 ためにおよくなしたまへる人の子のうへにおおきたまへ

一 さらむわきら汝をえりぞき、
 二 を活したまへ、われら名をよそん
 三 あゝ萬軍の神よ、
 四 聖顔のひかきを照したまへ、然そわれら救をえん
 五 第八十一篇
 六 ギタトの琴をあえて伶長おう
 七 たとしめたるアサフのうた

一 わきらの力なる神おむりひて高らかおうたひヤコブの神おむ
 二 かひてよろこびの聲をあげよ
 三 歌をうたひ鼓とよき音のふと、
 四 新月と満月とわれらの節會の日と、
 五 これイストラエルの律法ヤコブのかみの格あま
 六 神さき小エロブトを攻たまひしとき、
 七 て證となしたまへど、
 八 我かしこめて未だあらざりし方言をきけ

り
 九 されかれの肩より重荷をのぞき、かきの手を簾よりまぬかれし
 八 めたり

七 汝なやめるとき呼しかば我ふんちをすくへり、われ雷鳴のかく
 六 れたるどころにて汝にこたへメリバの水のはどりにて汝をこ
 五 ころみたり、セツ

四 八 我が民よきけ我なんちを證せん、イストラエルよ汝がされぬ
 三 從えんことをもどむ

二 九 汝のうちを他神あるべからず、なんち他神汝をさむべからず

十 十 されぬエロプトの國よりあんちを携へいでたる汝の神エホバ
 十一 なり、あんちの口をひらくわけよ、され物をみたしめん
 十二 されど我の民の我を證したるが、イストラエルの我をこのま
 十三 す

十三 このゆゑに我かきちが心のかたくなあるによりせ彼等さうの
 十二 任意にゆくにまかせたり

十一 十一 わきぬが民の我を從ひイストラエルの我が道にあゆまんこ
 十 道を求む

九 九 さらば我すまやにあられたる仇を悉たがへ、我が手をあられたる
 八 敵あむけん

七 七 斯てエホバをにくみし者もあられたるに從ひ、さきの時のどこし
 六 へあつたりん

五 五 神のむぎの最盛をもてあられたるをやしなひ禁よりいでたる靈を
 四 もて汝をあかしむべし

第八十二篇

アサフのうた

三 三 かみの神のつぎひの中あたちたまふ神のろくの神のさか
 二 審判をなしたまふ

二 かんぢらひ正^{ただし}あらざる審判^{さはん}をなしあしきものゝ身^みをかたより
 みて幾^{いく}何時^{いつ}をへんとするや、セラ
 三 よはきものと孤子^{ひとりご}のためになき苦しむものと乏^乏しきもの
 四 のためふ公平^{こうへい}をはとこせ
 弱^{よわ}きものと貧^{ひん}しきものをすくひ彼等^{かれら}をあしきものゝ手^てより
 五 たすけいだせ
 六 かきらひ知^しることなく悟^{さと}ることなくして暗中^{くらやみ}をゆきめぐりぬ、
 七 地^ちのもろゝの基^{もと}のうききたり
 八 我^{われ}いへらく、なんぢらひ神なり、なんぢらひみな至上者^{いとうしやもの}の子^こあり
 九 然^{しか}ぞなんぢらひ人のごとくに死^しもろゝの侯^{はう}のあかの一人^{ひとり}の
 十 ごとく仆^ふれん
 十一 神^{かみ}よあきて全^{けん}地^ちをさときたまへ、汝^{なんぢ}もろゝの國^{くに}を嗣^{つぎ}たたまふべ

けれバあり

第八十三篇

アサフの歌^{うた}なミ讚美^{さんび}なり

一 神^{かみ}よもだしたまふなかれ、神^{かみ}よものいで寂靜^{さくじやう}たまふなかれ
 二 祇^{ただ}よなんぢの仇^{あだ}いかしがましき聲^{こゑ}をあげ汝^{なんぢ}をにくむものゝ首^{くび}
 三 をあげたり

四 かれらひたくみなる謀略^{まろく}をもてなんぢの民^{たみ}にむかひ相共^{あひさむ}には
 五 ありて汝^{なんぢ}のかくれたる者^{もの}あむあふ

六 かれらひひたりき來^{きた}かれらを斷滅^{たんとく}してふたゝび國^{くに}をたつるこ
 七 とを得^えざらしめイスラエルの名^なをふたゝび人^{ひと}あはらきざらし

八 めんぞ
 九 かれらひ心^{こゝろ}を一つあしてどもあはかり互^{あひ}にちかひをあしてな

十 んぢに通^{とほ}ふ
 十一 このエリヤの幕屋^{まくや}にすめる人^{ひと}イレマエル、人^{ひと}モアブ、ハガル、人^{ひと}

七 ゲハル、アムモン、アマレク、ペリセテ、およびツロの民、亦せなり
八 アスリヤも亦、われらにくみせり、斯てロトの子、蠶のたすけを
なせり、セラ

九 さんち、衆、エジプトになしたまへる、如く、キレシンの河にて、レセ
ラ、エジプトにて、作したまへる、ごとく、彼等、おも、おしたまへ

十 かれらの、エンドルにて、得ろ、び地のため、に肥料、となれり

十一 かれらの、貴人、を、ラレブ、セエブの、ごとく、うの、もろゝの、候、を、セ

十二 バサル、ムシナの、ごとく、なしたまへ

十三 かれらの、いへり、われら、神の、草薙、を、えて、見、有、と、すべし、と

十四 見、神、よ、あきら、を、まき、あけらるゝ、塵の、ごとく、風の、まへの、葉の、

十五 ごとく、なら、しめたまへ

十六 林を、やく、火の、ごとく、山を、も、やす、煩の、ごとく
十七 なんぢの、思、風を、もて、われら、を、追、なんぢの、怒、風を、もて、かれら、を、

十八 悔、れ、し、めたまへ

十九 かれらの、面、を、恥、を、ま、た、し、めたまへ、エホバ、よ、然、を、かれら、なんぢ
二十 の、名、を、も、と、めん

二十一 われら、を、ど、こ、しへ、に、恥、あ、る、れ、し、め、惶、て、ま、せ、ひ、て、亡、び、う、せ、し、め
二十二 た、ま、へ

二十三 然、を、かれら、の、エホバ、て、ふ、名、を、も、ち、た、ま、ふ、汝、の、み、全、地、を、ま、ろ、し
二十四 め、す、至、上、者、あ、る、こ、と、を、知、る、べ、し

第八十四篇

ギタトの、琴、にあ、え、せて、伶、長、に、う
た、い、し、め、た、る、コラ、の、子、の、う、た

一 萬、軍、の、エホバ、よ、なん、ぢの、帷、帳、い、い、か、に、愛、す、べ、き、か、な

二 見、が、顯、現、い、た、え、い、る、を、か、り、に、エホバ、の、大、庭、を、し、た、ひ、見、の、心、見
三 が、身、い、い、ける、神、お、ひ、か、ひ、て、呼、ぶ

四 涙、や、す、ま、め、い、露、を、え、燕、子、い、ろ、の、雛、を、い、るゝ、巢、を、え、たり、萬、軍、の

エホバわが王の神よ、これなんちの祭壇あり
 さんちの家に住むものい福ひあり、かゝる人はつねに汝をたふ
 へまつらん、セラ

ろの力なんちにあり、ろの心シオンの大路にある者のさいはひ
 あり

うれらゝ涙の谷をすぐれども其處をお得くの泉あるどころど
 なに、また前の雨のろくの恵をもて之をお得へり
 かれらゝ力より力にすゝみ遂におのくシオンにいたりて神
 にまみゆ

さんぐんの神エホバよわが祈をききたまへ、ヤコブの神よ耳を
 きたふけたまへ、セラ

われらの盾ある神よ、こそあはしてさんちの受着者の顔をおへ
 りみたまへ

なんちの大旗にすゑふ一日の千日おもたされり、われら惡の幕
 屋にをらんよりい寧ろわが神はいへの門守とあらんことを欲
 ふなり

その神エホバの日なり盾なり、エホバの思ひえいくわうを
 たへ直くあゆむものお善物をこゝみたまふことなし

萬軍のエホバよなんちに依頼むものいさいえひなり
 第八十五篇 伶長にうたひしめたるコラレ子

のうた

エホバよさんちの御國にめぐみをそゝぎたまへり、なんちヤコ
 ブの俘囚をかへしたまひき

さんちふの良民の不義をゆるし、そのもろくの罪をお得ひた
 まひき、セラ

汝すべての怒をすてその烈しきいきどはりを遠けたまへり

わきらのすくひは神よかへりきたり我情にむかひて忿怒をや
めたまへ

なんち永遠にまをいかり萬世ふみいかりをひきのべたま
ふや

汝よりてさんちの民の喜悅をえんため我情を活したま
えざるか

エホバよなんちの憐憫をまにえめし汝のすくひを我情に
あたへたまへ

聖徒に平和をかたりたまふ事をきかん、エホバの民その
にふたゝび歸るなけれ
實にそのすくひの神をあるる者にちかしくかくて榮光のま
ちの國にとまらん

あはれみど眞實とせよあひ義と平和とたのみに接吻せり
まことの地よりはえ義の天よりみかろせり

エホバ善物をあたへたまへをまにの國の物産をいださん
義のまにゆきエホバのあゆみたまふ跡をまにに
しめん

第八十六篇 ダビデの祈禱

エホバよなんち耳をかたふけて我にこたへたまへ、我のくるし
みかつ乏しけれバあり

ねがはくは、わが靈魂をまもりたまへ、われ神をうやまふ者かれ
をなり、わが神よなんちに依頼める汝のまもべを救ひたまへ

主よわれを憐みたまへ、われ終日なんちによむ

なんちの僕のたまひしを恨ばせたまへ、主よまに靈魂のなんち
を仰ぎのすむ

主よなんぢの恵をふかくまた赦をこのみたまふ、汝によむ凡てのものを豊かにあこれみたまふ
 エホバよどおいのりに耳をかたふけ、お恵求のこゑをきよたまへ

七
 主よなんぢの恵をふかくまた赦をこのみたまふ、汝によむ凡てのものを豊かにあこれみたまふ
 エホバよどおいのりに耳をかたふけ、お恵求のこゑをきよたまへ

八
 主よなんぢの恵をふかくまた赦をこのみたまふ、汝によむ凡てのものを豊かにあこれみたまふ
 エホバよどおいのりに耳をかたふけ、お恵求のこゑをきよたまへ

九
 主よなんぢの恵をふかくまた赦をこのみたまふ、汝によむ凡てのものを豊かにあこれみたまふ
 エホバよどおいのりに耳をかたふけ、お恵求のこゑをきよたまへ

十
 主よなんぢの恵をふかくまた赦をこのみたまふ、汝によむ凡てのものを豊かにあこれみたまふ
 エホバよどおいのりに耳をかたふけ、お恵求のこゑをきよたまへ

十一
 主よなんぢの恵をふかくまた赦をこのみたまふ、汝によむ凡てのものを豊かにあこれみたまふ
 エホバよどおいのりに耳をかたふけ、お恵求のこゑをきよたまへ

十二
 主よなんぢの恵をふかくまた赦をこのみたまふ、汝によむ凡てのものを豊かにあこれみたまふ
 エホバよどおいのりに耳をかたふけ、お恵求のこゑをきよたまへ

十三
 主よなんぢの恵をふかくまた赦をこのみたまふ、汝によむ凡てのものを豊かにあこれみたまふ
 エホバよどおいのりに耳をかたふけ、お恵求のこゑをきよたまへ

十四
 主よなんぢの恵をふかくまた赦をこのみたまふ、汝によむ凡てのものを豊かにあこれみたまふ
 エホバよどおいのりに耳をかたふけ、お恵求のこゑをきよたまへ

十五
 主よなんぢの恵をふかくまた赦をこのみたまふ、汝によむ凡てのものを豊かにあこれみたまふ
 エホバよどおいのりに耳をかたふけ、お恵求のこゑをきよたまへ

十六
 主よなんぢの恵をふかくまた赦をこのみたまふ、汝によむ凡てのものを豊かにあこれみたまふ
 エホバよどおいのりに耳をかたふけ、お恵求のこゑをきよたまへ

十七
 主よなんぢの恵をふかくまた赦をこのみたまふ、汝によむ凡てのものを豊かにあこれみたまふ
 エホバよどおいのりに耳をかたふけ、お恵求のこゑをきよたまへ

をみて恥をいだかん、そのエホバよ、かんなち我をたすけ我をあや
さめたまへばなり

第八十七篇

コラの子のうたなり 讚美あり

エホバの基いきよき山にあり

エホバのヤコブのすべての住居にまさりてシオンのもろゝ
の門を愛したまふ

神の都よ、なんぢにつきておほくの榮光のこゝを語りはやせり、
セラ

それのラハブバビロンをも我をあるものの中にあげん、ペリシ

アツロエテラビヤを、廣よこの人いゝしみに生れたりといへん、

シオンにつきては如此いせん、此もの彼ものろの中にうまれた

り至上者みづからシオンを立たせんとす、
エホバもろゝの民をあるしたまふ時、このものの彼處にうま

れたりと、樂へあげたまへん、
うたふもの踊るもの、皆いせん、
にありと

の泉のなんぢの中

第八十八篇

マハラテ、レアノテの調にあはせ

て伶長にうたはせられたるコラの子のうたなり

讚美なり、エズラ人へマンのをしへの歌なり

我がすくひの神エホバよ、
闇くのわが所をみまへ、
に

にかたふけたまへ

わがたましひの患難にてみち我のいのちの陰府にちかづけり

それの穴にいるものとすもにかうへられ、
かれど

それ墓のうちなる殺さしものよ、
死者のうちにすてら

る汝うきらを再びこゝろに記たまはず、かれらの御手よと斷滅

されしものなり

なんぢ我をいどふかき穴くらき處ふかき淵にねきたまひき

かんの怒りいたくわれおせまきり、なんぢろのもろくの涙

をもて我をくるしめ給へり、セツ

我が相識ものを我よりどはぎけ我をかれらに憎ませたまへり、

且れに御閉さきていづることあたはず

且の眼のなやみの故をもてねどろへぬ、われ目ごとに汝をよべ

り、エホバよかんに向ひてわが兩手をのべたり

かんな死者にくすしき事跡をあらとしたまへんや、亡にしも

立てなんぢを讃たへんや、セツ

汝のいつくしみ、墓のうちに汝のまこと、滅亡のみに

宜うたへらとんや

汝のくすしきみわきり、暗になんぢの義、忘失のくに、知る

ることあらんや

さきせエホバよ我なんぢに向ひてさけべり、わがいのりの朝に

みまへに達らん

エホバよなんぢ何おきて且の鑑をすてたまふや、何なれと

れに面をかくしたまふや

且き幼稚よりなやみて死るをかりあり、我なんぢの恐嚇にあひ

てくるしきませへり

汝のはげしき怒わがうへをす、汝のねびやかし我をはろばせ

り

これらの事ひねもす大水のごとく我をめぐり、ことごとく來り

て我をかこみふさげり

なんぢ我をいつくしむ者とわが友とをどはぎけ、わが相識るも

のを幽暗くろきにいたたまへり

第八十九篇 エズラ人エタンのをしへの歌うた

われエホバの憐憫あはれみをどみしへにうたえん、われ口くちもてエホバの眞實まことをよろづ代につげあらせん

わきいふ、あそれみみ永遠とこしへにたてらる汝なんぢの眞實まことをかたく天てんにさだめたまへんと

われわが撰えらびたるものと契約けいやくをむすび、僕わがダビデにちかひたり

われなんぢの裔すえをどこしへに固かたうし、なんぢの座位くわいをたて、代々よふふよをしめん、セツ

エホバよよろ／＼の天てんのなんぢの奇あましき事跡わざをはめん、なんぢの眞實まこともまた誇ほこりものゝ會かいにてはめらるべし

天てんにてたまたまエホバに謝あやまふものあらんや、神かみの子このなかに誰たれ

かエホバのとき者ものあらんや、神かみのきよきものゝ公會こうかいのなかにて畏おそむべきものあり、うの四周しゅうしゅう

にあるすべての者にまさりて懼おそるべきものなり、萬軍ばんぐんの神かみエホバよ、ヤハ、汝なんぢのごとく大能たいのちからあるものゝ誰たれや、な

んぢの眞實まことのなんぢをめぐりたり、なんぢの海うみのあると波なみをさめ、その浪なみのたちあがらんとさ、い之これを

あづめたまふなり、なんぢのテハを殺ころされしものとごどく撃碎うごくたさかのれの仇あだども

を力ちからある腕うでをもて打散うちちしたまへり、よろ／＼の天てんのなんぢのもの地ちもまた汝なんぢのものなり、世界よかいどう

の中にこつるもの、どのなんぢの基もとしたまへるなり、北きたと南みなみのなんぢを誇ほこりたまへり、バボルヘルモン、なんぢの名なに

なんぢの大能のみうでをもちたまふ、なんぢのていつよく汝の
 みきのていたかし

みきの手^たいたかし

義と公平のなんぢの實座のまへにあらえれゆく顔のまへにあらえれゆく

顔のまへにわらえれゆく

よろこびの音をしる民のさいえひなり、エホバよあれらにみくはの光のなかをわゆめり

いふのうたをよめ
みせぬかきす

うきらの名によりて終日このまじよろみびなんちの義によりて高たかくわ
げられたり

げ
ら
れ
た
り

かきらの力の榮光いなんぢなり、かんの恵によりてわきらの
角いたかくわげらきん

角ツノいたかくわけらきん

うわさの盾の埃に属われらの王のイセラエルの聖者につけり

につけり

うのどき 眞像まがうしをもてなんぢの聖徒せいとにつげたまふく、われわれ体てい

財をちからあるものに委ねたり。わが民のなかより一人をえら
びて高くあげたり。

びて高くあげたり

見れど（見）の僕（僕）ダビデ（ダビデ）をえて之（之）にわの聖膏（聖膏）をろゞげり

里れ豆

わが手のかきどきにも堅くわが臂のかれを強くせん
仇かきを忘へたることなし惡の子かきを苦しむることか

仇九仇
力
邑
主

6
h

それを撃つ前にうのもろくの敵をたふし彼をにくめるもの

を
舉^あ
る

されざる眞實^{マコト}と其の憤懣^{アハレ}とのダヒデとよみに居る其の名に
よみてその角^{ツノ}いたかくわけられん

よりて之

われ亦くさの手を海のうちへにおき、そのみきの手を河のうちへに

あ
と

ダビデ我われふむあひて汝の父ちちを神かみをすくひの岩いわなりと

二七 よもん
 二八 されまた彼をむす初子とあし地の王たちのうち最もたかき者
 二九 とあさん
 三〇 されどこしへに憐憫をかれおためにたもち之とたてし契約の
 三一 かゑることもああるべし
 三二 されまたその裔をどこしへに存へうのくらめを天の日數のこ
 三三 どくなあらへしめん
 三四 もしうの子わが法をはなれわが審判にまたおひて歩ます
 三五 重き律法をやふりわが壽命をまもらすべ
 三六 われ杖をもてかれらの怨をたゞし鞭をもてうの邪曲をたゞす
 三七 べし
 三八 されお彼よりわが憐憫をどこくくとりさらすわが眞實を
 三九 かどろへしむることもなからん

四〇 わきあのれの契約をやふらず己のくちびるより出しことをか
 四一 へし
 四二 わき最もわが聖をさして誓へりわきダビデに虚偽をいはじ
 四三 ろの裔のどこしへにつまきその虚偽の目のまどく恒にわが前
 四四 にあらん
 四五 また月のまどく永遠にたてらまん空にある諸人のまことなり
 四六 セラ
 四七 されどうの受膏者をどはさけて棄たまへりなんち之をい
 四八 死せ得りたまへり
 四九 なんち己がまもべの契約をいみ其かんむりをけがして地にま
 五〇 でおとし給へり
 五一 またろの垣をどこくく削しうの保障をあれすたれしめたま
 五二 へり

二一 その道をすぐるすべての者にかすめられ憐れ人ふのよしらる
 二二 なんぢかき敵のみぎの手をたかく擧そのもろくの仇をよ
 二三 ろこそしめたまへど
 二四 なんぢかれの剣の刃をよりかへして戦闘にたつに退きらしめ
 二五 たまひき
 二六 またろの光輝をけしろの座位を地にあげあせし
 二七 その年若き日をちきめ恥をろのうへに覆たまへり、セテ
 二八 エホバよりくて幾何暗をへたまふや自己をどこしへに隠れた
 二九 まふや怒り火のもゆるさどくなるべきか
 三〇 ねおはくいのわが時のいりに短る死かを思ひたまへ汝いたづら
 三一 にすべての人の子をつくりたまへんや
 三二 誰かいきて死をみず又あのおたましひを陰間より救ひうるも
 三三 のあらんや、セテ

四九 主よなんぢが眞實をもてダビデに誓ひたまへる昔日のあ
 五〇 ときみひいづこにありや
 五一 主よねがさくいななんぢの僕のうくる誇をみふよろにぞめたま
 五二 へ、エホバよ汝のもろくの仇のわきをろしりなんぢの受膏者
 五三 のあじあどをろしれり我もろくの民のろしりをわが懷中に
 五四 いだく

第九十篇 神の人モーセの祈禱

一 主よなんぢの往昔より世々わがらの居所にてまじませり
 二 由いまだ生いでず汝いまだ地と世界とをつくりたまえざりし
 三 とき永遠よりどこもへまであなちの神なり
 四 あんち人を塵にかへらしめて實はく人の子よなんぢら歸さど
 五 なんぢの目前にの千年もすでにすぐる昨日のごとくまた夜間

五 のいどよきにあなし
 六 なんぢこれらを大水のごとく流去らしめたまふ。かきらの一夜
 七 朝にはえいでよきか。夕にのかられて枯るなり。
 八 わきらのなんぢの怒ふよりて消うせ。汝のいきどほりによりて
 九 怖まどふ。
 十 汝われらの不義をみまへに置われらの隠れたるつみを聖顔の
 十一 ひかりのなうにあきたまへり。
 十二 われらのもろくの日のかんの怒によりて過去り。わきらが
 十三 すべての年のつくるの一日の息のおとし
 十四 われらが年をふる日の七十歳にすぎず。あるいは壯やかにして
 十五 八十歳にいたらん。さきぞその誇るどころいたし。勤勞どかかし
 十六 みどろの、その去ゆくこと速かにして。わきらうまた衆去れり。

一 誰うなんぢの怒のちからを知んや。たれう汝をなぐる。長にた
 二 くらべて汝のいきどほりを煮らんや。
 三 願くわわれらにれの日をか予ふること。汝をしへて智慧のみ
 四 ころを得しめたまへ。
 五 エホバよ。歸りたまへ。斯ていくそのときを。歴たまふや。ねむるく
 六 の汝のまもべらに。倦れるみこころを。覺たまへ。
 七 ねがはくは朝にわれらを汝のわはれとにてあきたらしめ。世を
 八 はるまで喜ばたのじませたまへ。
 九 汝がわれらを苦しめたまへるもろくの。日ぞわれらが禍害に
 十 かゝれるもろくの。年ぞわたくらべて。我情をたのじませたまへ。
 十一 なんぢの作爲を。をなんぢの僕等に。なんぢの榮光を。うの子等に。あ
 十二 らはしたまへ。
 十三 敬てわれらの神エホバの佳美を。わきらのうへにのすましめ。わ

れらの手のわきをわきらのうへに確からしめたまへ、かくら確くわ
れらの手のわきを確からしめたまへ

第九十一篇

至上者いとほのもとなる隠きたるところにすまふうの人の全能者ぜんのうの

際はしにやせらん

われ二エホバのこゝを宣てエホバのわが遺所ざいところわが城しろわがよりた

のむ神なりといはん

ろの神なんちを獵人かりとのわなど毒をさぐす疫癘えきれよりたすけいだ

またまふべければかり

かれろの禍わざはひをもてなんちを庇かばひたまはん、なんちろの翼つばさの下に

ろくれん、ろの眞實まことの盾たてなり干かかり

夜のあせろくべきことあり晝ひるいとびきたる矢やあり

幽暗くわんにのあゆむ疫癘えきれあり日午ひるごにのろこなふおしきほあり、され

てなんち畏るおそるよしとあらじ

千人せんじんのなんちの左にたふれ萬人まんじんのなんちの右にたふる、さきで

ろの災害わざはひのなんちに近くことなからん

なんちの眠ねいたしこの事をみるのみ、なんち恐者おそもののむくいを見

ん

なんち義よきにいへりエホバのわが遺所ざいところなりと、なんち至上者いとほ者をろ

の住居すまひとなしたれば

災害わざはひなんちにいたらず苦難くるがみなんちの幕屋まくやにちうづかし

ろの至上者いとほなんちのためにろの役者つれのわたり輩たいにあはせて汝みづかをあゆむ

もろの道のになんちを守らせたまへばなり

あきら手にてなんちの足の石にふれざらんために汝をささへん

なんちの獅子ししと蛇へびとをふみ壯獅さうしと蛇へびとを足の下にふみにしらん

かれろの愛をわれにうさげるがゆゑに我こそを助けん、か

れり^二名を^一しるがゆゑ^三我^{わが}これを^四高處^{たかところ}にあかん
あれ我^{われ}をよば^二我^{わが}こたへん我^{われ}の苦難^{くるがみ}のとき^三お借^{かか}にをりて之^{これ}
をたすけ^二之^{これ}をあがめん
われ長壽^{ちやうじゆう}をもてかき^二足^{たぎ}はしめ且^{かつ}わが救^{すけい}をまめさん

第九十二篇

安息日^{あんそくじつ}にもちめる歌^{うた}なり讚美^{さんび}なり

いとたかき者^{もの}よエホバ^二にかんじやし聖名^{せいめい}をはめたふるの善^{よき}
かな

わしたに汝^{なんぢ}のいつくしみをあらとし夜々^{よよ}なんぢの眞實^{まこと}をあら
えずに

十絃^{じゆせん}のなりものと琴^{きん}とをもちる琴^{きん}の妙^{たぎ}なる音^{おと}をもちめるい
と善^{よき}かな

うのエホバ^二よなんぢの作^{つく}をもて我^{われ}をたのしませたまへり

我^{われ}なんぢの手^てのわざをよろこびはこらん

エホバ^二よ汝^{なんぢ}のみわざは^三大なるかな汝^{なんぢ}のもろゝの思念^{しをん}はいど

よかし

無知^{むち}者^{もの}のしるこゑなく愚^{おろ}なるものい之^{これ}をさぞらず

恐^{おそ}きものい草^{くさ}のこゑくもえいで不義^{ふぎ}をあこなふ衆庶^{しゆじゆ}いさかゆ
るども還^{かへ}にいどこしへにはろびん

されせエホバ^二よ汝^{なんぢ}のこゑへは^三高處^{たかところ}にまじませり

エホバ^二よ呼^よなんぢの仇^{あひ}あゝなんぢの仇^{あひ}いはろびん不義^{ふぎ}をあこ

あふ者^{もの}のこゑく散^ちされん

されせ汝^{なんぢ}が角^{つう}をたかくあげて野^のの牛^{うし}のつものまどくあらし

めたまへり我^{われ}のあたらしき膏^{あぶら}をろゝられたり

又^{また}わが目^めのわが仇^{あひ}につきて願^{ねが}へることを見^みわが耳^{みみ}のわれにさ
からひておこりたつ怨^{うら}をなすものにつきて願^{ねが}へることをきよ

たり

義しきものの櫻樹の樹のごとく榮えレバノンの香柏のごとく
ろだつべし

エホバの宮にうゑられしもののわれらの神の大庭にさかえん
かれらの年老てなは果をむすび豊かにうるほひ緑の色みちを
ちて

エホバの直きものなることを示すべし、エホバのわが殿なりエ
ホバにハ不義なし

第九十三篇

エホバの統御たゞふ、エホバの權威をきたまへど、エホバの能力
をこゝろもとなし帯となしたまへり、さればまた世界もかたくな
ちて動かさるゝことなし
なんぢの實恵のいにしへより堅くたちぬ、汝れこそしへより在

せり

大水のこゑをあげたり、エホバよを偲みづの聲をあげたり、おほ
みづの浪をあぐ

エホバの高處にいましてゐるの威力のおほくの水のこゑ海のさ
かまくにまさりて盛んなり

なんぢの詠詞のいとかたし、エホバよ聖潔のなんぢの家おどこ
しへまでも適應あり

第九十四篇

エホバよ仇をうへすの汝にあり神よわたを報すのなんぢにあ
り、おほくくの光をはなちたまへ

罪をさきたまふものよ願くの起てたかふる者にうのうくべ
き報をなしたまへ

エホバよ惡きもの幾何のときを經んとするや、わしきもの勝詩

四 りていくろのとしを經るや
 五 ろきらいみだりに言をいだして誇りものいふすべて不義をお
 六 こなふ者のみづから高ふれり
 七 エホバよ彼等のいかんちの民をうちくだき、なんちの業をうこな
 八 くれらの楚婦と旅人との生命をうしなひ孤子をころす
 九 のきらいいふ、ヤハの見声ヤコブの神いさどらざるべしと
 十 民のなかなる無知よ、かんならさされ愚かな者よいづきのど
 十一 きにり習うらん
 十二 みまを植るものきくことをせきらんや目をつくさるもの見る
 十三 あどをせきらんや
 十四 もろくの國をいふる者たまたすことを爲きらんや、人に知識
 十五 をあたふる者あることなかりんや

十六 エホバの人の思念のむなしきを知りたまふ
 十七 ヤハまなんちの傲しめたまふ人なんちの法則をしへらるゝ人
 十八 のさいはひなるるか
 十九 かゝる人をわざとひの日よりのがれしめ惡きものゝために抗
 二十 のはらるゝまでこきに平安をあたへたまへん
 二十一 うのエホバの民をすてたまはず、うの嗣業をはかれたまはさ
 二十二 るなり
 二十三 審判のたゞしきにあらへり心のなほき者のみなるの後にしたる
 二十四 せん
 二十五 誰かわがために起りたちて惡きものを賣んや、たれか我がため
 二十六 に立て不義をおこなふ者をせめんや
 二十七 もしエホバ我をたすけたまはさざりせばわが靈魂のどくに幽寂
 二十八 どころに住ひしならん

一八 ささむわが足すべりぬといひしときエホバよなんぢの憐憫わ
 一七 れをささへたまへり
 一六 わがうちに強慮のみつる將なんぢの安慰わがたましひを喜ば
 一五 せたまふ
 一四 律法をもて害ふことをとかる惡の位なんぢに執むことを得
 一三 んや
 一二 彼等のあひあたらひて義人のたましひをせめ罪なき血をつみ
 一一 に定む
 一〇 然らばとエホバのわがたかき報わが神のわが遺所の榮なり
 九 き
 八 神のうきらの邪曲をの身におはしめかれらをの惡き事の
 七 赤かに滅したまへんわれらの神エホバの力を滅したまへん
 第六十五篇

一 率われちエホバのむかひてうたひ、すくひの樂にむかひてよろ
 二 こをしき聲をあげん
 三 わきら感涙をもてるの前にゆきエホバにむかひて歌をもて歡を
 四 じきこゑをあげん
 五 ろのエホバの大なる神なり、もろくの神にさされる大なる王
 六 なり
 七 地のふかき處みなうの手にあり山のいたゞきもまた神のもの
 八 なり
 九 うみの神のものうの造りたまふところ早ける地もまたうの手
 一〇 にて造りたまへり
 一一 いざわれち拜みひきよし我儕をつくさる主エホバのみさへに
 一二 曲跪くべし
 一三 彼われらの神なり、われららの草薺の民うの手のひつしな

十
 り、今日なんぢらおのの聲をきかんことをのぞむ
 八
 かんぢらメリバに在しときのごとく野ふるマサにありし日の
 九
 如くらの心をかたく赤にするなかれ
 十
 うの時かんぢらの列祖わをふゝろみ我をためし又わがわざを
 十一
 みたぞ
 十二
 われらの代のためにうきへて四十年を歴われいへり、うれし
 十三
 心あやまれる民わが道を知さるきと
 十四
 みのゆゑに我いきてはりて彼等われを安息にいらるべからずと
 十五
 悔ひたり

第九十六篇

一
 あたらしき歌をエホバにむかひてうたへ、全地よエホバにむか
 二
 ひて讃ふべし
 三
 エホバに向ひてうたはるの名を認めよ、日ごとにうの救とのべ

つたへよ

四
 もろくの國のなかあるの無光とあらとし、もろくの民のあ
 五
 りにうの奇しきみわざを讃ふべし
 六
 うのエホバはおほいなり大にはめたよふべきものあり、もろも
 七
 ろの神にまさりて畏るべきものなり
 八
 もろくの民のすべての神いごとく虚し、ささとエホバの
 九
 もろくの天をつくりたまへり
 十
 尊貴と後威といろの前にあり能く善美といろの聖所にあり
 十一
 もろくの民のやからよ榮光とちからとをエホバにあたへよ

エホバにあたへよ

十二
 うの聖名にかなふ榮光をもてエホバにあたへ献物をたづさへ
 十三
 てうの大庭にきたれ
 十四
 きよき美しきものをもてエホバを喜び全地ようの前にをの

のけ

十 もろくの國のなりにいへ、エホバの統御たまふ世界もかたく
たちて動かさるゝことなし、エホバの正直をもてすべての民を
ささきたまへんと

十一 天のよろこひ地のいたのしみ海さうのなかに登るものといなり

十二 せよみ

田畑さうの中のすべての物といよろこぶべし、かくて林のもろ
もろの樹もまたエホバの前によろこみひうたえん

十三 エホバ來りたまふ地をささかんきて來りたまふ義をもて世界
をささきうの眞實をもてもろくの民をささきたまはん

第九十七篇

十四 エホバの統御たまふ全地いたのしみ多くの島をいよろこぶべ
し

十五 雲さくらきさうの閑寂にあり、義と公平さうの實出のもと
あり

十六 火ありうのみまへにすゑ、さうの四周の敵をやきつくす

十七 エホバのいなびかりは世界をてらす、地これを見てふるべり

十八 もろくの山はエホバのみまへ全地の主のみまへにて燃ゆこ

十九 どくどけぬ

二十 もろくの天はうの義をあらえし、よろづの民はその榮光をみ

二十一 たり

二十二 すべてきさめる像につかへ、虚しさものによりてみづから誇る

二十三 ものの恥辱をうくべし、もろくの神よみなエホバ、茂ふしをガ

二十四 め

二十五 エホバよなんちの審判のゆゑにより、レオンはきよてよろこび

二十六 エダの女輩のみを樂しめり

九 エホバよあんなに全地のうへにまじくて至高くなんぢもろもろの神のうへにまじくて至貴とし

十 エホバを愛しむものよ恐をにくめ、エホバのうの聖徒のたましひをさもり之をあじきものゝ手より助けいだしたまふ

十一 先にたゞしき人のためにまかき欣喜のこゝろ直きものゝためにに播れたり

十二 義人よエホバによりて喜べ、うのきよ死名に感謝せよ

第九十八篇

一 あたらしき歌をエホバおひかひてうたへ、その妙なる事をあみかひうの右の手うのきよ死名をもて己のために救をなし畢たまへり

二 エホバのうのすくひを知しめ、うの義をもろくの國人の目のまへにあはし給へり

三 又うの義と具實とをイエシュエルの家にひかひて記念したまふ、地の極もことくくわが神のすくひを見たり

四 全地よエホバにむかひて歡をさしき聲をあげよ聲をさちてよろこびうたへ讃うたへ

五 琴をもてエホバを同めうたへ琴の音と歌のこゑをもてせよツバと角笛をよきならし王エホバのみまへによろこをさしき聲をあげよ

六 海とろの赤かに盈るもの世界とせかいにすむものと鳴響むべし

七 大水のうの手をうち、もろくの山いあひどもにエホバの前に

八 よろみ、びうたふべし

九 エホバ地をさかんだために來りたまへばなり、エホバ義をもて

十 世界をささき公平をもてまろくの民をささきたまはん

第九十九篇

エホバは統御たまふもろくの民のをのまぐべし、エホバの
 キビシの間にいます地ふるえん
 エホバのシオンにまじくて大なりもろくの民にすゑきて
 たふとし
 かきらの汝のおほいなる畏るべき名を得めたまふべし、エホバ
 の聖なるうな
 王のちからの審判をこのみたまふ汝のかく公平をたて
 ヤコブのさかたに審判と公義と茂ちこなひたまふ
 われらの神エホバをあがめ、うの承足のもとにて拜みまつゝ、エ
 ホバの聖あるうな
 うの祭司のなほにモーセとアロンとあり、うの名をよぶ者
 のなかにエホバあり、かきらエホバをよびしに應へたまへり

第九十九篇

エホバの統御のうちにまじくてわれらに語りたまへり、かれ
 らのの詔詞どうの賜りたる律法を守りたりき
 わきらの神エホバよなんぢ彼等ふこたへたまへり、われらのあ
 し事にくくいたまひたれとまた赦免をあたへたまへる神に
 てましませり
 われらの神エホバを崇めろのきよき山にてをのみまつれ、うの
 われらの神エホバの聖なるなま
 第百篇 感謝のうた
 全地よエホバにむかひて敬むしき聲をあげよ
 欣喜をいだきてエホバに事へうたひつゝうの前にきたれ
 知れエホバこそ神にますなれ、われらを造りたまへるものハエ
 ホバにまかせを我情のうの属なり、わきらうの民の草薺の
 ひつじかり

感謝しつゝよろの門にいり、はめたゝへつゝよろの大庭にいれ、感謝
してゐるの名をはめたゝへよ
エホバのめぐみふくろの憐憫かぎりなく、その眞實よろづ世
にれよふべければなり

第一百一篇 ダビデのうた

われ憐憫と審判とをうたえん、エホバよ我なんぢを讃うたえん
われ心をさどくして全き道をよもらん、かんぢいづれの暗わを
にきたりたせふや、我なほき心をもてわが家のうちをあどかん
わきまを眼前にいやしき事をあかす、され振くものゝ業をにく
む、うのわきの我につかじ
解めるころの我よりとなきん、恐きものを知ることこのま
す
誰かにその友をさしるもの、我これを得る者さん、あふる眼ま

た驚き、心のもの、我これをまのをじ
わが眼の國のうちの患なる者をみて之をわれとまゝに住とせ
ん、全き道をあゆむ人のわれに事へん
歎くことをなす者、わが家のうちに住むひとをえず虚偽をい
ふもの、わが目前にたつことを得じ
われ朝な／＼この國のあしき者をみど／＼く滅しエホバの邑
より不義をあこなふ者をこと／＼く絶除かん

第一百二篇 なやみたる者おもひくづはれて

その歎息をエホバの前にうとぎ
いさせるときの祈禱
エホバよわが祈をききたまへ、願くわが號呼のこゑの御前に
いたらんことを
わが窮苦の日みかはを蔽ひたまふなかれ、なんぢの耳をわきあ

三 かつたふけ我^わがよふ日にすみやあらに我^{われ}にこたへたまへ
 二 わがもろくの日の煙のごとくきえ、わが骨^{ほね}いたきまのごとく
 焚^やるゝなり
 一 わがこころの草のおどく撃^うきてまはれたり、われ糧^かをくらふを
 忘^{わす}れしによる
 七 わが歎^{かな}息^{いき}のふたによりてわが骨^{ほね}わが肉^{にく}につく
 六 わが野^のの鶴^{つる}のこどく荒^あたる跡^{あと}のふくろふのおどくになり
 五 われ、醒^さめてねふらず、たゞ友^{とも}なくして屋^や蓋^がにをる雀^{すずめ}のごとくなれ
 四 り
 三 わが仇^{かた}のひねもす我^{われ}をろしる、猖^{やう}狂^{きやう}ひて我^{われ}をせむるもの我^{われ}をさ
 二 して相^あふ
 一 わが根^ねをくらふごどくに根^ねをくらひ、わが飲^のもののに涙^{なみだ}をま

十 もへたり
 九 ふの哲^{てつ}なんちの怒^{いかでか}と悲^{かなしみ}とによりてなり、なんち我^{われ}をもたげて
 八 かけすて給^{たま}へり
 七 わが齡^{とし}のかたふける日影^{ひかげ}のごとし、またわれの草^{くさ}のごとく萎^なま
 六 たり
 五 されどエホバよなんちの永遠^{えいぞう}にながらへ、うの名^なのよろづ
 四 世^よにながらへん
 三 なんち起^{おこ}てシオンをあえきみたまへん、そのシオンに思^{おも}惑^{わく}をは
 二 せよしたまふごきなり、うのさだまれる期^きすでに來^きたり
 一 かんちの僕^{しもべ}のシオンの石^{いし}をもよろこびその塵^{ちり}をさへ愛^{あい}しむ
 六 もろくの國^{くに}のエホバの名^なをおそれ地^ちのもろくの王^{わう}のろ
 五 の榮^{えい}光^{こう}をあられん
 四 エホバのシオンをきづき榮^{えい}光^{こう}をもてあらえられたまへり

エホバの乏しきものと祈をかへりみ彼等のいのりを救しめた
まときりき

来らんとするのちれ世のためおこの事を煮るさん、鎮しくつく
らきたる民のヤハをはめたふべし

エホバその聖所のたのき所よりみおろし天より地をみたまへ
り

この俘囚のあげきをきゝ死にさだまざる者をときはなち
人々のレオンにてエホバの名をあらえしエホバレにてろの

頌美をあらえさん為なり
ある時にもろくの民もろくの國つとひあつまりてエホ

バに事へまつらん
エホバのわがちからを造あてあどろへしめ、わが命をみじ

かよりしめ給へり

我いへりねおとくわが神よわがすべての日のなかをにて我
をとりさうたまふおかれ、汝のまどひの世をかぎりなし

汝いにしへ地の基をすゑたまへり天もまたなんぢの手の工か
り

これらの亡びんさきと汝いつねに存らへたまえんこれらのみ
赤衣のごとくふるびん汝これらを袍のごとく更たまえんされ

を彼等のかさらん
然れども汝いつてることなしなんぢの命をはらざるなり

汝のまもべの子輩いながらへんその畜のかたぐ前にたてらる
べし

第百三篇 ダセテのうた
わが鏡よエホバをはめまつれわが裏なるすべてのもよそ

のきよき名をはめまつれ

わがたましひよエホバを讃まつきうのすべての思恵をわする
るなかれ

エホバはなんぢがすべての不義をゆるし汝のすべての疾をい
やし

なんぢの生命を得ろびより贖ひいだし仁慈と憐憫とを汝にか
うぶらせ

あんぢの口を嘉物にてあかしめたまふ期てなんぢの壯きて驚
のごとく新にかるあり

エホバはすべて虐げらるる者のために公義と審判とをあてな
ひたまふ

あのれの途をモーセにあらしめあのその作爲をイスラエルの
子輩にあらしめたまへり

エホバはかれと恩恵にみちて怒たまふことあるく仁慈ゆ

たかにましませり
恒にせむることをせず永遠にいかりを懷きたまへざるなり

エホバはわがらの罪の量おしたるひて我情をあしらひたまへ
すわがらの不義のかさにあたらずひて報いたまへざるなり

エホバをおるるものにエホバの賜ふのあはきみひ大いに
て天の地よりも高きことし

あのわれらより恩とど得きたまふことい東の西より遠き
ことし

エホバの己をおるる者をあはれみたまふことい父がうの子
をあてきむる如し

エホバは我情のつくらし狀をありわれらの塵なることを念
ひたまへばなり

人のよとひの草のごとくうの榮いのう花れことし

風すくきバ失てあどなくうの生いでし處にぞへせ御まらざる
なり

然いあきとエホバの情憫いどみしへより永遠までエホバをお
うるよものおいたり、うの公義い子孫のまた子孫にいたらん
うの契約をまもりうの調諭を心にぞめて行ふものぞその人な
る

エホバのうの寶座をしろくの天にかたく置たまへり、うの政
權いよろづのものうへにあり

エホバにつかふる使者よ、エホバの聖言のてをき、うの聖言
をあふなふ勇士よ、エホバをはめまつき

うの萬軍よ、うの聖言をあてなふ僕輩よ、エホバをはめまつれ
うの造りたまへる萬物よ、エホバの政權の下なるすべての處に
てエホバをはめよ、わがたましひよ、エホバを讃めまつ

第百四篇

わが靈魂よ、エホバをほめまつれ、わが神エホバよ、きんちい至大
にして尊貴と秘威とを衣たまへ

あんち光をころものごとくにまどひ天を幕のごとくにさ

水のかかにおのれの黒の練梁をあき雲をあのれの車となし風
の翼あがりあるき

かぜを使者とかし煙のいづる火を僕とあしたまふ

エホバの地を基のうへにあきて永遠にうごくことおかしめ
たまふ

衣にてあはふごどく大水にて地をあはひたまへり、水たさへ
て山のうへをこゆ

なんち叱咤すきと水走り予き汝いかづちの聲をえなてバ水た
ちまち去ぬ

八 あるひは山にのぼり或は谷にくだりて汝のさだめたまへる
 所にゆけり
 九 かんち界をたてよ之をこえしめずふたよび地をおほふと
 十 かんちむ
 十一 エホバのいづみを谷にわきいだしたまふうの流の山のあひだ
 にせしむ
 十二 かくて野のもろくの歌にのましむ野の驢馬もろの渴をやむ
 十三 空の鳥もろの将どりにすき樹梢の間よりさえづりうたふ
 十四 エホバのうの殿よりもろくの山に灌漑たまふ地いなんちの
 十五 みぎの實よりて飽足ぬ
 十六 エホバの草をえしめて家畜にあたへ田産をはえしめて人の
 使用をあそかへたまふかく地より食物をいだしたまふ
 十七 人のふよろを飲としむる道背通はどの節をつやよりならしむ

一 あるより人のこころを強かりしむる聖どもあり
 二 エホバの樹どうの植たまへるレバノンの香柏どの飽足ぬべし
 三 鳥のそのなかの巣をつくり溝の松をろの棲どせり
 四 たうき山の山羊のすまひ磐石の山鼠のかくると所あり
 五 エホバの月をつくりて時をつかさどらせたまへり日のその西
 六 におることをしる
 七 かんち黒暗をつくりたまへ夜ありそのとき林はけものけ
 八 本のびくお出きたる
 九 わかき獅はえて餌をもどめ神にくひものをもどひ
 十 日いづれば退きてその穴あふす
 十一 人はいでよ主をさるうの勤勞のゆふべにまでいたる
 十二 エホバよなんちの事跡のいかに多なるこれらけあんなちの智
 十三 慧おてつくりたまへり汝のもろくの富の増あみつ

二五 あじふふ大あるひろき海あり、うのかうに散るれぬ御ふもの
小ある大ある生るものあり

二六 舟そのうへをとしど汝のつくりたまへる船そのうちにあそび
たてぶる

二七 かゑら皆なんちを俟望む、なんち宜時にくひものを之ああたへ
たまふ

二八 彼等のかんちの子へたまふ物をひろふ、かんち手をひらきたま
へばかれら衆物にあきたりぬ

二九 かんち面をおはひたまへば彼等のあきてふためく汝のれらの
氣息をとりたまへばあれらの死て塵あうへる

三〇 かんち塵をいだしたまへば百物をあ造らる、かんち地のおもて
を新にしたまふ

三一 爾くのエホバの榮光とこしへにあらんことを、エホバそのみと

三二 きを喜びたまこんとを
エホバ地をみたまへば地ふるひ、山ふれたまへば山の煙をい

三三 だす
生るかざりのエホバお向ひてうたひ我ががらふるはといわが

三四 神をはめうたえん
エホバをあもふむお思念いたのしみ深あらん、されエホバによ

三五 りて喜ぶべし
罪人の地より絶滅され、あしきものの復あらざるべし、わが靈魂

三六 よエホバをはめまつれ、コホバを讃稱へよ
第百五篇

三七 エホバお感誼しその名をよび、そのあしたまへる事をもの
の民衆のかかにあらしめよ

三八 エホバにむひてうたへエホバを讃うたへうのものろくの妙
詩篇 第百四篇 自廿五至百五篇二節 二百六十五

三 ある事跡わざをかたれ

そのきよき名なをはこれ、エホバをたづねもどむるものゝ心こころのよ

ろふふべし

四 エホバとその能力からとをたづねもどめよ、つねにその聖顔かほをたづ

ねよ

五 うの僕しもべアブラハムの裔うよ、ヤコブの子こ輩わいよ、うのえらびたまひし

所のものよ、そのおしたまへる妙たあるみまきと奇あましき事跡わざとそ

の口かみのささきとを心こころにとむれ

七 彼のどれらの神かみエホバあり、そのみささきの全地ぜんちふあり

八 エホバのたえすうの契約けいやくをみてよろお陀だたまへ、此このよろづ

代かひ小命こいのちしたまひし聖言せいごんあり

九 アブラハムとむすびたまひし契約けいやくイサカに與あきへたまひし誓ちかみ

十 之これをりたくしヤコブのため小法せうぽう律りつとなしイスラエルのために

とこしへの契約けいやくとなして

十一 言ことたまひけるに我われなんちにカナンの地ちをたまひてなんぢらの

嗣業きぎょうの分ぶんとおさん

十二 この時ときかれらの数かずはからず減ひすくなくしてゐしこにて旅人たびびと

となど

十三 この國くによりあの國くにふゆき、この國くによりはらの民たみふゆけり

人のりれらを虐あへぐるをゆるしたまへす、うれらの故ゆゑふよりて王わう

たちを懲おこしめて

十四 宣のたま給たまくわが受膏うきつ者しやたちふふるゝかりれ、わが預言よげん者しやたちをそこ

かふかふれ

十五 エホバの饑饉ききんを地ちふまねき人の杖つゑとする糧けをこどもく碎くだき

たまへり

又これらの民もひとり道を迷したまへり。ヨセフのうられて僕ど
 かりぬ
 されら足統をもてヨセフの足とをみかひくろねの鍵をもて
 その鎖を脱ぎつあげり
 斯てうのふとをの鎖をうるまで不^及ふエホバのみこととを敬と
 ことろみたまへり
 王の人をつらとしてこれを解もろくの民の民これにゆる
 し
 之とその家司とをその財寶をことごとく司とらせ
 その心のまよわりの風のきみたちを縛しめ長老たちも智慧以
 をしへしむ
 イスラエルも亦エジプトのゆきヤコブのハム^の地をやどれり
 エホバの民を大にましくくへ之とをその敵よりも強くした

まへり
 また敵のころをふへておのれの民をふくましめおのれの僕
 輩をあさむき待さしめたまへり
 又その友もベネセとその選びたまへるアロンとを遣したま
 へり
 これらのエホバの預兆をハムの地におておひまたその國もく
 すしき事をおておへり
 エホバの間をつうとして暗くしたまへり。おのれらの聖言もそ
 むくことをせざりき
 彼等のすべての水を血ふらへてその魚をころしたまへり
 これらの國の蛙むれいで王の殿れうちおまでみちよさがり
 ぬ
 エホバいひたまへば蟻むらがり蚤そのすべての境にいりきた

三
 りぬ
 二
 また雨^{アメ}ふりへて雲^{クモ}をわれら小^こ興^こへもゆる火^ひをわれらの國^{くに}ふ
 一
 らし
 三
 りわれらの葡萄^{ぶどう}の樹^きどいちじくの樹^きどをうちその境^{さかい}のもろく
 二
 の樹^き炭^{すす}をりくだきたまへり
 三
 エホバはいひたまへバ算^{はかり}たられぬ蟪蛄^{かいこ}と盜賊^{たうさく}きたり
 二
 あれらの國^{くに}のすべての田^{でし}産^うをこみつくりの地^ちのすべての質^か
 一
 を食^くつくせり
 二
 エホバはわれらの國^{くに}のすべての首^う出^い者をうちかれらのすべて
 一
 は力^{ちから}の蛇^{へび}をうちたまへり
 三
 志^{こころ}ろりね黄金^{こがね}をたづさへて彼等^{かれら}をいでゆらしめたまへトその
 二
 家族^{けぞく}のうちに一人^{ひとり}のよき者^{もの}もなかりき
 一
 エホバはかれらの出る^{でる}をよろこべりかれらをおとるゝの念^{おもひ}

二
 そのうちにあこりたればなぞ
 一
 エホバの雲^{くも}をしきて蓋^{おほ}となし夜^よの火^ひをもて照^てしたまへり
 三
 又如^{また}きらの求^{もと}ふよりて轡^{しん}をきたらしめ天^{てん}の餅^{もち}おてかきらを飽^あ
 二
 しめたまへり
 一
 磐^{いわ}をひらきたまへバ水^{みづ}はどむしで潤^{うる}ひなきところ小^こ川^{がは}を
 三
 なして流^{なが}きいでたり
 二
 エホバそのきよに聖^{かど}言^{ことば}とその僕^{しもべ}アブラハムをおもひいでた
 一
 まひたればなぞ
 三
 その民^{たみ}をみちびきて歡^{よろこ}びついでしめそのえらべる民^{たみ}をみち
 二
 びきて誨^しひついでしめたまへり
 一
 もろくの國^{くに}人の地^ちをかれら小^こ興^こへたまひしりバ彼等^{かれら}もろも
 三
 ろのたみは勤^{ごん}勞^{らう}をおのが有^あとせり
 二
 この彼等^{かれら}がその律^{りてい}ふしたるひその法^ひをまもらんが爲^{ため}なりエホ

バをはめたりへよ

第百六篇

一 エホバをはめたりへエホバに感謝せよそのめりみゆみかくそ
 の憐憫にかぎりなし
 二 たれかエホバの力ある事跡をかわりその讃べきことを悉く
 いひあらはし得んや
 三 審判をまもる人々つねに正義をとおす者いさいといひあり
 エホバよなんぢの民にたまふ恵をもて我をおぼえなんぢの救
 をもて我に臨みたまへ
 四 さらば我なんぢの振びたまへる者のさいといひを見なんぢの國
 の歡喜をよろこばなんぢの嗣業どもに誇ることをせん
 五 されち列祖どもに罪戾をかせり我愼よこしををなし恐
 どおこなへり

六 されち列祖いなんぢがエロブトにてなしたまへる奇しき事
 跡をさとりす故のあそれみの豊かなるを心に定めす海のはど
 り即ち紅海のはどりにて逆きたり
 七 さればエホバいその名のゆゑをもて彼等をすくひたまへりこ
 の大なる能力をあらわめんとてなり
 八 また紅海を叱咤したまひたれを乾きたりかくて民をみちびき
 て野をゆくがごとくに淵をすぎしめ
 九 畏むるものと手よりかれらをすくひ仇の手よりかれらを脱ひ
 たまへり
 十 水その敵をおほひたきむその一人だにけみどし者なかりき
 十一 みのとき彼等そのみこと心を信じその頌美をうたへり
 十二 彼等あをしがはどにその事跡をますれその訓誨をまたす
 十三 野にていたくむさばり荒野にて神をこゝろみたりき

エホバのかれらの願^{ねがひ}をかなへたまひしかせその靈魂^{たましい}をやせ
 しめたまへり
 たみハ營^{いり}のうちにてモーセを慕^ほみエホバの聖者^{せいじ}アロンをねた
 みしかば
 地^ちひらけてダタンを呑^のみアピラムの黨^{どう}類^{るい}をおほひ
 火^ひのこのどもおらの中^{なか}おもえおこり煩^{わづ}わあしき者を^{もの}やきつく
 せり
 ゐさらのホレブの山^{やま}にて積^こをつくり耕^いたる像^{さう}辰^{しん}をがみたり
 かくの如^{ごと}くあ^ののダ榮^{えい}光^{くわう}をうへて草^{くさ}をくらふ牛^{うし}のかたち^{かたち}に似^にす
 救主^{きうしゅ}なる神^{かみ}とエロアトにて大^{だい}なるまきをなれ
 ハの地^ちにて奇^きしき事^{こと}跡^{あと}をなし紅^{こう}海^{かい}のはどりにて置^おるべきこ
 とをなしたまへりかれの堀^{ほり}る神^{かみ}をますきたり
 この故^{ゆゑ}にエホバうれりを召^よさんと宣^{のたま}ふべしと神^{かみ}のえらみ

たまへる者^{もの}モーセやふれの間^{かん}隙^{きやく}にありてその前^{まへ}ふたちとの烈^{れつ}
 怒^{いかでか}をひきあへして滅^{めつ}亡^{わう}をまぬくまめたり
 ゐれら美^{うつく}しき地^ちを荒^あれしそのみこと^{みこと}を信^{まを}ぜず
 刺^ささへその幕^{まく}屋^やにてつふやきエホバの誓^{ちか}をもきりき
 この故^{ゆゑ}に手^てをあげて彼^{かれ}等^らにむかひたまへりふき野^のにてゐれら
 を殺^{ころ}れしめんとし
 又^{また}もろくの國^{くに}のうちにてその畜^{ちく}をたふれしめ、もろくの地^ち
 にかれらを散^ちさんとしたまへるなり
 かれらのバアルベオルにつきて死^しるものと祭^{まつり}物^{もの}をくらひたり
 期^きのさどくその行^い爲^ゐをもてエホバの烈^{れつ}怒^{いかでか}をひきいだしければ
 文^{ふみ}やみ侵^{おそ}しめりたど
 そのときビチハスたちて裁^さ判^{はん}をあせりかくて疫^{えき}癘^{れん}はやみぬ
 ビチハスの萬^{まん}代^{だい}までどこしへにこのことを義^ぎとせられたり

民^{三三}メリバの水^{三三}のはどりにてエホバの烈怒^{三三}をひきあこしきかバ
 かきらの故^{三三}によりてモーセも被害^{三三}にあへり
 かきら神の靈^{三三}にそむきしかバモーセその口唇^{三三}にて妄^{三三}にものい
 ひたきばなり
 かきらハエホバの命^{三三}じたまへる事にまたおそすしてもろ
 の民^{三三}をはるばるさす

反てもろの國人^{三三}とまじざをりてその行爲^{三三}にならひ
 おのの跡^{三三}をさざしその偶像^{三三}につかへたり

かれらのその子女^{三三}を鬼^{三三}にささぐ
 罪^{三三}なき血^{三三}すなだちガナン^{三三}の偶像^{三三}にささげたる己^{三三}おむすこむす
 めの血^{三三}をなごしぬ斯^{三三}てくに血^{三三}にてけりさきたり

またそのまきハ自己^{三三}をけりしそのあこなよどころハ森^{三三}淫^{三三}なり
 この神^{三三}はエホバの怒^{三三}その民^{三三}にむかひて起^{三三}りその罰^{三三}をにく

みて
 かきらをもろの國^{三三}の手^{三三}にわたしたまへり彼等^{三三}ハあのをを

恨^{三三}むるものに制^{三三}へられ

あの色^{三三}は仇^{三三}にまへたげらきその手^{三三}の下^{三三}にうちふせられたり

エホバハあを助^{三三}けたまひしかきらハ謀略^{三三}をまうけて

逆^{三三}きそのよあしきに舉^{三三}くせられたり
 されどエホバハかきらの哭聲^{三三}をききたまひしときその患難^{三三}を

かへりみ

その契約^{三三}をかれらの爲^{三三}におもひいだしその憐憫^{三三}のゆたかなる

により聖意^{三三}をかへさせ給^{三三}ひて
 かれらを己^{三三}おどりこにせられたる者^{三三}どもに憐^{三三}めるまことを得^{三三}
 しめたまへり

且^{三三}色^{三三}らの神^{三三}エホバよ、それらをすくひて列邦^{三三}のなかより取^{三三}

集めたまへ、重きらの聖名に謝し、なんぢのはむべき事をはこら
ん

イサラエルの神エホバのどこしへより永遠まではむべきかな、
すべての民のアーメンとよなふべし、エホバを讃稱へよ

第百七篇

エホバに感謝せよ、エホバの恵ふかくましくてその憐憫かき
りなむ

エホバの熱眼をかうふる者のみな然いふべきなり

エホバの敵の手よりかきらを贖ひもろゝの地より東西南
よりどりあつめたまへり

かきら野にてあきさてたる路にさまよひその住ふべき邑
にあさきり
かれら震また聞きそのうちは驚きあそろへたり

謝てその困苦のうちにてエホバをよそよそたればエホバあき
を患ふよりたすけいだし

七 住ふべき邑にゆかゝめんぞて面き路にみちびきたまへり

八 願くはすべての人のエホバの恵により人の子になしたまへる

九 哀しき事跡によりてエホバを讃稱んことを

エホバの満ちあたる露をたらせ世間たるたましひを嘉物に
てあかじめたまへむなり

十 くらきと死の蔭どに居るもの患難とくろがねどに満ちめ
らるゝもの

十一 神の言にそむき至高者はをしへ哀哀しめければ

十二 勸勞をもてその心をひくうしたまへり、かれち作れたれを助く
るものもなかざき

十三 斯てその困苦のうちにてエホバをよそよそたればエホバこき

を患難よりすくひ
くらに死のかげより彼等をみちびき出してその械をみづち
たまへり

願くはすべての人の恵により人の子になしたまへる
奇しき事跡によりてエホバを讃稱へんことを

そのあまねの門をみづちくろむねの脚木をたちきりたまへ
り

愚かなる者の心のが愆の道により己がよこしまによりて
個めり

かれらの靈魂はすべての食物をきらひて死の門にちあづく
かくてその困苦のうちにてエホバをよそふエホバこそを患難

よりすくひたまふ
その聖言をつかとして之をいやし之をその誠よりたすけい

だしたまふ
願くはすべての人エホバのめぐみにより人の子にあらたまへ

奇しき事跡によりてエホバをはめたまへんことを
かれらの誠意のそなへものをさづけ喜ばうたひてその事跡を

いひあらたまふ
角にて海にうかび大洋にて事をいとなむ者の

エホバのみまきを見また淵にてその奇しき事跡をみる
エホバ命じたまへばあらき風おこりてその浪をあや

かれら天にのぼりまた淵にくだり患難によりてその靈魂だけ
さり

左に右たふかたふき酔たる者のごとく踉蹌てなす所をあらす
かくてその困苦のうちにてエホバをよそふエホバこそを患難

よりたづさへいで

狂風をしづめて浪をおだやかになし給へり
 がさらのちの静かなるをよろこぶ賜てエホバのうれしさをそ
 の望むところの満ちみちびきたまふ
 願くはすべての人エホバの恵により人の子になしたまへる奇
 しき事跡によりてエホバをはめたまへんことを
 かれら民の會にてこれをあがめ長老の座にてこれを讃稱ふべ
 し
 エホバの河を野にかえらせ泉をかきける地に優らせ
 また豊かなる地にすめる民の恵によりてそこを幽の地にあら
 せたまふ
 野を池あふせらせ乾ける地をいづみにかえらせ
 あふに飲たるものを住せたまふさればかれらの己がすまひ
 の邑をたて

配ふたをまき薊園をまうけてそのむすべる實をえたり
 エホバの牧草の豊くふえひろまれるまでには恵をわたへその
 牲畜のべることをも許したまへす
 されどまた虐待くるじと悲哀によりて滅ゆき且うなだきたり
 エホバもろくの君に侮辱をそそぎ道なき荒地にさまよせ
 たまふ
 然のあれを貧しきものを患難のうちより擧てその家族をひつ
 しの群のささくならしめたまふ
 直きものの之をみて喜びもろくの正義のその口をふさぎん
 すべて慧者のこれらのことに心をよせエホバの憐愍をささる
 べし

第百八篇 ダビデの歌なり讚美あり

神よわが心のさだまれりわれ隠ひなつらん稱えつらんわが榮

二 をもてたゞへまづらん
 三 箏よ琴よさむべし、され黎明をよびまさん
 四 エホバよ我もろくの民のあかにてなんちに感謝し、もろくの國のなかにてあんちをはめうたはん
 五 その泣のあそれと大にきて天のうへにあがり、あんなの眞實の雲にまであふふ
 六 神よねおはくのみづからを天よりもたうくし、榮光を全地のうへに舉たまへ
 七 ねがえく、右の手をもて救をほどこし、われらに答をなして愛しまたまふものに、助をえしめたまへ
 八 神のうの聖をもていひたまへん、わき甚くよろこまん我シケムをわうちスコラの谷をはからん
 九 エレアドのわさるもの、ヤナトリのわさる布なり、エフライムも起りて

十 神のまもりなり、ユダのわが杖
 十一 モアブのわが足盤なり、エリムにわが腰をなげん、ベリシラよわが故によりて、聲をあげよと
 十二 誰かわれを堅固なる邑にすまじめんや、誰かわきをみちびきて、イシムにゆきしや
 十三 神よあんなちのわれらを棄たまひしにあらずや、神よあんなちのわれらの軍どもに出ゆきたまはず
 十四 ねがえく、助をせれにあたへて、敵にむかえしめたまへ、人のたすけの空しければなり
 十五 われらの神によりて勇しくきたらかん、とどきの敵をふまたまふもの、神なまなり
 第十六 第百九篇 命長にうたえしめたるダビデのうた

わが誤^{あや}たまふる神^{かみ}よもだしたまふなりき
 二 かれらの惡^{あく}の口^{くち}どあきむきの口^{くち}どをあけて我^{われ}にむひ、いつと
 三 りの舌^{した}をもて我^{われ}にかたり
 四 うらみの言^{ことば}をもて我^{われ}をかこみ、ゆゑなく我^{われ}をせめて闘^{たたか}ふもあ
 五 ればなり
 六 われ愛^{あい}するにかれら反^{かへ}りてわが敵^{てき}となる、われたと闘^{たたか}るなり
 七 かきらの惡^{あく}をもてわが善^{よき}にむくい恨^{にくしみ}をもてわが愛^{あい}にむくいた
 八 り
 九 ねおはくは彼のうへに惡^{あく}人をたてその右^{みぎ}方に敵^{てき}をたしめたまへ
 十 かれが鞆^{たもと}かるよどきわの罪^{つみ}をあらとにせられ又^{また}そのいのり
 十一 の罪^{つみ}となり
 十二 まうの日^ひのすくなく、その數^{かず}り月^{つき}かの人^{ひと}にえられ

十三 その子^こ輩^{わらわ}のみなしことあり、その妻^{つま}いやもめとなり
 十四 その子^こ輩^{わらわ}のさすらひて乞^こひそのあきたる處^{ところ}よりいできたりて
 十五 食^たをもとむべし
 十六 彼^{かれ}のもてるすべてのものハ債^{せいの}主にうをえられ、かれの勤^{きん}勞^{らう}ハ外^{あしな}人^{ひと}
 十七 にかすめらるべし
 十八 かれに惡^{あく}をあたふる人^{ひと}ひとりだになく、かきの孤^か子^こをあこれむ
 十九 者^{もの}もなく
 二十 その畜^ういたえその名^なハつぎの世^よあきえうすべし
 二十一 その父^{ちち}等のよこしまハエホバのみみよろに記^{しる}さき、その母^{はは}のつ
 二十二 みハきえざるべし
 二十三 かきらの恒^{とこ}にエホバの前^{まへ}におかれ、その名^なハ地^ちより斷^たるべし
 二十四 かきる人^{ひと}ハあこれミを施^ほすみとをおもとす、反^{かへ}りて貧^ひしきもの
 二十五 乏^ひしきもの心^{こころ}のいためる者^{もの}をこそさんとして攻^せたりき

一七 うる人の詛ふことをこのむふの故にのろひ己にいたる悲む
 一八 みどをたのしまずこの故にめぐみ己にぞ得きかれり
 一九 かざる人のころものごとくに詛をきるふの故にのろひ水のご
 二〇 どくにちのきの裏にいたり油のごとくにちのきの骨にいさり
 二一 ねおはく詛をたのきのきたる衣のおどく帯のごとくなし
 二二 領にきづから懸はんみどを
 二三 こきらの事のわが敵とわが靈魂にさからひて惡言をいふ者と
 二四 にエホバのあたへたまふ報なり
 二五 ききと主エホバよあんちの名のゆゑをもて我をかへりみたま
 二六 へなれちの憐憫のいとふあしねおとく我をたすけたまへ
 二七 世れの貧しくして乏しわが心うちにて傷をうく
 二八 わがゆく悲のゆふ日の影のごとくまた娘のごとく咲さるるよ
 二九 なる

一七 わが敵の詛ふによりてよろめきわが肉のやせれどろふ
 一八 われの後等にくしらるる者となれりかきら我をさるときに首
 一九 をふる
 二〇 わが神エホバよねおはく我をたすけろの憐憫にしたがひて
 二一 我をすくひたまへ
 二二 エホバよこきらの哲なんちの手よりいで汝のなしたまへるこ
 二三 となるを彼等ふあらしめたまへ
 二四 うきらの詛へせも汝のめぐみたまふかれらの立とき恥あし
 二五 めらるれどもあんちの僕よりこそん
 二六 わがもろくの敵にあおせりを衣の恥を外箱のごとくに
 二七 まどふべし
 二八 われのわが口をもて大にエホバに語しおはくの人の中かにて
 二九 讀まつらむ

エホバのまづしきものゝ右にたちてうの靈魂を罪せんとする者より之をすくひたまへり

第一百十篇 ダビデのうた

エホバわが主のたまふ、我なんぢの仇をなんぢの承足とするまでわれを右にきすべし

エホバのなんぢのちのちの杖をシオンよりつきいださしめたまへん、汝のろくの仇のなかに王となるべし

かんぢのいき得ひの目にかんぢの民の聖なるうるとしき衣をつけ心よりよろみびて己をさげん、なんぢの朝の胎よりいづる壯きものゝ露をもてり

エホバ我をたてて聖意をかへさせたまふことなし、汝のメルキセデクの狀にひとしくどこしへお祭司たり

主のかんぢの右ふわりてうのいかりの日に王等とうちたまへ

主のろくの國のなかにて審判を起さなひたまはん、此處おも彼處にも屍をみたしめ寛濶なる地をすふる首領をうちたまへり

かき道の得どりの川より流てのみ斯てらうべを舉ん

第一百十一篇

エホバを讃たまへよ、我のか得きものゝ會あるひに公會にて心をつくしてエホバに感謝せん

エホバのみわざの大かり、すべてうの事跡をしたふもの、之をかんがへ究む

うの行ひたまふどころの榮光ありまた秘感あり、うの公義のことしへお失することなし

エホバのうの奇しきみわざを人のこゝろお記しめたまへり、エ

五 ホバのめぐもど情憫にて充たまふ
 エホバの己をあらうよものに糧をあたへまへりまたその契約

六

エホバのろくの國の所領をおのれの民にあたへてその作
 爲のちからを之にあらはしたまへり

七

その手のみわざの眞實なり公義なりうのもろくの訓諭の
 たし

八

こゑらの世々をぎりなく堅くたち眞實と正直にてなれり
 エホバのうのたみに救贖を得とこしその契約をとこしに立

九

たまへりエホバの名の聖にしてあがむべきなり
 エホバをあらうよの智慧のはじめなりこれらを行ふものハ皆

十

あきらかなる賜ある人なりエホバの顕美のとこしへに失るふ
 となし

第百一十二篇

一 エホバを讃まつきエホバを畏れてうのもろくの誠命をいた
 く喜ぶものハさいとひなり

二

かゝる人のすゑの地にてつよく直きものハ類のさいはひを得
 ん

三

富と財というの家にありうの公義のとこしへにうすることな
 し

四

直きものよためお暗なにも光あらざるかれの愚ゆたかに憐
 憫にみつる義しきものなり

五

恵をはせとこし貸みとをなす者のさいはひなりかゝる人の審判
 をうくるるときあのか訴をさへうべし

六

又とこしへまで動かさるゝことなあらん義者のなぐく忘れら
 るゝことおかるべし

七 彼のあしき言信によりて畏れず、うの心エホバに依頼みてさだ
 八 まれり
 九 うの心かたくたちて懼るゝこそ、かく敵につきての願望をつひ
 一〇 に見ん
 一一 彼のちりして貧者にあたふ、うの正義どこしへにうすること
 一二 なし、うの角のあかめをうけて、撃られん
 一三 惡者のこれを見て、うれへもだえ切齒しつゝ消さらん、また惡き
 一四 ものゝ願望のはるふべし

第百十三篇

一 エホバをはめまつれ汝等、エホバの僕よ、はめまつれ、エホバの名
 二 をはめまつれ
 三 今より永遠、おいたるまで、エホバの名はむべきりな
 四 日のいづる處より、日のいる處まで、エホバの名はめらるべし

五 エホバはもろゝの國の上、おありて、たかく、うの榮光、天より
 六 もたかし
 七 われらの神、エホバ、おたぐふべき者、たれや、寶座をその高處
 八 へ、己をひくゝして、天と地とを、あへりみたまふ
 九 まづ、じきものを塵よりあげ、乏しきものを、貴土よりあげて
 一〇 もろゝの諸侯、ともおす、しらせ、その民のきみたちと共、おす
 一一 せられたまへん
 一二 又、はらみなき、婦人家を、まもらせ、おほくの子女のよろこむしき
 一三 母たち、しめたまふ、エホバを讃まつれ

第百十四篇

一 イスラエルの民、エサウトをいで、ヤコブのいへ、異言の民を、こみ
 二 れじとせ
 三 エサウ、エホバの聖所となり、イスラエルのエホバの所領とされ

三 海のこれを見てにげヨルダンの後ホエリぞき
 四 山の牡羊のごとくをせり小山のこひつとのごとく躍れり
 五 海よかんち何ぞてにぐるやヨルダンよかんち何ぞて後ホエリ
 六 ぞくや
 七 山よかにどて牡羊のごとくをせるや小山よかにどて小羊のご
 八 地よ主のみまへヤコブの神の前ホをのまけ
 九 主のいとを池ホかこらせ石をいづみホ變らせたまへど
 一 第百十五篇
 二 ホバよ榮光を置れちホ歸するホかき置れちホ歸するホかれ
 三 かんちのあれみど汝のまこととの故ホよりてたと名ホのみ
 四 歸したまへ

二 もろくの國人のいかかれはいふ今ききらの神のいづくホあ
 三 りやど
 四 然と置きらの神の天ホいます神のみてゝろのまゝホすべての
 五 事をおこさひ給へり
 六 かれらの偶像のあろかねど金ホして人の手の置きあり
 七 その偶像の口あれといえず目あきせみす
 八 耳あきせきかず鼻あきせかみす
 九 手あれせどらず脚あきどあゆまず腹より聲をいだすことなし
 一〇 此をつくる者どこに依頼むものぞに皆これホひとしからん
 一一 イスラエルよかんちエホバホ依頼めエホバのかれらの助かれ
 一二 らの盾あり
 一三 アロンの家よかんちエホバホよりたためエホバのかけらの
 一四 助かれらの盾あり

十一 エホバを畏るゝものよ、エホバに依頼め、エホバにかれらの助け
 れらの盾あり
 十二 エホバの我情をみこゝろに記たまへり、われらを恵みイストラエ
 ルの家をめぐみ、アロンの子をめぐみ
 十三 また小なるも大なるも、エホバを畏るゝ者をめぐみたまへん
 願くは、エホバにちちを増加へ、ちちとちちの子孫と
 一五 をまじくして、絶えんことを
 一六 ちちちちの天地をつくごたまへる、エホバに恵まらるゝ者あり
 一七 天の、エホバの天あり、されど地の人の子、あまたたたまへり
 一八 死人も幽寂どころ、お下さるものも、ヤハを讃稱ふることなし
 然るに、われらに今より永遠にいたるまで、エホバを讃まつらむ汝
 等、エホバを求めたまへよ

第百十六篇

一 エホバを愛む、その言が聲ぞわが願望とをききたまへん
 二 あり
 三 エホバに、我にかたよけたまひしを、故に、われ世にあらんか
 ぎり、エホバを呼まつらむ
 四 死の縄、われをまき、陰府のくるもみ、我のぞめり、われに患難
 どうとへとおあへり
 五 その時、われエホバの名をよべり、エホバよ、願くは、わが靈魂をす
 くひたまへん
 六 エホバの恩恵、ゆたかにして、公義、ましませり、われらの神に、あこ
 れみ深し
 七 エホバの恩、あかるものを、讃えたまふ、われ卑くせられしが、エホ
 バ、我をすくひたまへり
 八 我が靈魂、よちちの平安、あへれ、エホバの豊かに、ちちを待

ひたまへばかり

汝のミゲたまを死によみ、ミゲ目をみだより、ミゲ足を顛たふ倒す

よりたすけいだしたまひき

これの活るものと國おてエホバの前ふあゆまを

これ大に赤やめりといひつゝもなほ信じたぞ

是き惶てしどきに云らくすべての人いづよりなりと

我があはしてその賜へるものゝ恩恵をエホバあむくい

三
世
き
救すくひ
の
さ
か
づ
き
を
ど
り
て
エ
ホ
バ
の
名な
を
よ
び
ま
つ
ら
む

我^{われ}すべ^べての民^{たみ}の望^{のぞ}へおてエホバ^{エホバ}おわ^おけ^け誓^{ちか}をつくのえん

エホバの聖徒の死にそのみまへおて貰は

エホバは國を足れいあんちの僕有り、われいあんちの婢女の子
ゐして、汝の忠もべなき、あんちとて、汝を忠とせしむるは、

それ感謝をそかへものとして汝をさきげんわれエホバの名を
よむん

我すべての民のまへにてエホバのいへの大庭サレムのなかにて此

をつくのふべし、エホバを讀まつて

第一百十七篇

もろくの國こくによなんぢらニホバを讀よみまつれ、もろくの民よ

二
その目きらお賜ふその情憫のお得いなホバの眞實のど

第一百十八篇

五ホバ 不感謝せよ 五ホバ の 恩恵^{めぐみ}よくその 憐愍^{あはれみ}どこもへお綴^{つづ}

二 イエラエルの率いふべし、その憐憫のどこしへにたゆることな
 し。 三
 アロンの家のいき言ふべし、そのあをきみの永遠にたゆること
 なし。 四
 エホバを畏るゝもの、率いふべし、その憐憫のどこしへにたゆ
 ることなし。 五
 われ患難のなかよりエホバをよべバエホバこたへて我をひろ
 き處にあきたまへり。 六
 エホバわが方にいませバ我にあうれかし入われに何をあしえ
 んや。 七
 エホバわれを助くるものどもに我をかたに坐す、この故に
 わきを惜むものにつきての願望をわき見ること文ん。 八
 エホバに依頼む人、たよるよりも歸りてよし。

九 エホバによりたのむいもろゝの候にたよるよりも、歸りてよ
 し。 十
 もろゝの國のわれを圍めり、われエホバの名によりて彼等を
 ほろぼさん。 十一
 かきらの我をかこめり我をかこめりエホバの名によりて彼等
 をほろぼさん。 十二
 あきらみ蜂のごとく我をかこめり、かれらに刑の火のごとく消
 たり、わきみエホバの名によりてかれらを滅さん。 十三
 汝わきを倒さんとしていたく刺つれどエホバわれを助けたま
 へり。 十四
 エホバわれが力わが歌にしてわが救ひありたまへり。 十五
 歡喜とすくひとの聲のたしきものゝ幕屋あり、エホバのみ
 ぎの手いさましき動作をなしたまふ。

一六 エホバのみぎの手いたかくあがりエホバの右の手いさまし
一七 き動作をなしたまふ
一八 われに死るることならん存へてヤハの事跡をいひあらとさん
一九 ヤハのいたく我をこらしたまひしかと死おの付したまえざり
二〇 わがためお義の門をひらけ我らのうちにいりてヤハお感謝せ
二一 ん
二二 このエホバの門あり、たゞしきもののいのちの内にいるべし
二三 われおんちを感謝せん、なんぢ我をあててわが救とありたま
二四 へばなり
二五 王師のすてたる石のすみの首石となれり
二六 これエホバの成たまへる事おしてわきらの目にあやしとする
二七 所なり

二八 これエホバの設けたまへる日なり、わきらひこの日およろこび
二九 たのしまえ
三〇 エホバよねがごとくわれらを今すくひたまへ、エホバよねがご
三一 くに我憐をいま榮えしめたまへ
三二 エホバの名およりて来るものの福ひなり、わきらエホバの家よ
三三 りなんぢを祝せり
三四 エホバの神なり、わきらに光をあたへたまへ望もて祭壇の角
三五 おいけおへをのなげ
三六 おんちのわが神なり我なんぢを感謝せん、おんちのわが神なり
三七 我なんぢを崇めまつらん
三八 エホバにかんじやせよエホバの恩恵ふあくるの憐憫ととしへ
三九 に絶ることなし

一の 道の道をあはくしてエホバの律法をあゆむ者のさいといひ
 二 エホバのもろゝの證詞をまもり心をつくしてエホバを尋求
 三 むるものい福ひあり
 四 ゐる人の不義をあえかえずしてエホバの道をあゆむあり
 五 エホバよあんち訓諭をむれらふ命じてねんころあ守らせたま
 六 あんちわが道をあたくたてゝその律法をまもらせたまえんこ
 七 どを
 八 むれ汝のもろゝの誡命ふころをどむるときに取ることあ
 九 らじ
 十 むき汝のたゞしき審判をまなむゝ直き心をもてあんに感謝
 十一 せん

八 むれの律法をまもらんむれを樂てたまふなりれ
 九 ○ベタ
 十 わるき人のなふよりてあうの道をきよめん聖言あまたらひ
 十一 て憚むのはあふなき
 十二 むれ心をつくして汝をたづねもどめたり願くいかんちの誡命
 十三 より迷ひいださしめ給ふなかき
 十四 むれ汝あむかひて罪戾をかすまじき爲あなんちの言をわが心
 十五 のうちあ識へたり
 十六 讃べきかなエホバよねがくいの律法をむれあ敢へたまへ
 十七 わき足が口唇をもてなんちの口よりいでしもろゝの審判を
 十八 のべつたへたり
 十九 我もろゝの賄貨をよろこぶごとくあ汝のあかしの道をよろ
 二十 こべり

一五 我なんぢの訓諭を愛もひ汝のみちを心をとめん
 一六 是れの律法をよろこび聖言を重するることなからん

一七 ○サテル

一八 ねがふくは汝の志もべを豊ふあらしひて存へしめたまへ、さち
 一九 ばはれ聖言をまもらん

二〇 なんぢは眼をひらきなんぢの法のうちなる奇しきことを我
 二一 みせたまへ

二二 是れの世にある旅客なり我おなんぢの誠命をかくしたまふな
 二三 かれ

二四 斷るときになんぢの審判をあたふが故あわれ靈魂にくだく
 二五 るなり

二六 汝いたかふる者をせめたまへりなんぢの誠命よりまよひいづ
 二七 る者のろはる

二八 我なんぢの訓諭をまもどたり我より誇とあなせりとを取去た
 二九 まへ

三〇 又もろくの侯に坐して相誦せわれをうたえんとせり然の
 三一 あれど汝の志もべの律法をふかく思へど

三二 汝のもろくの訓詞にわれをよろこませわれをささず者なり
 三三 ○ダレテ

三四 是が靈魂の塵あつきのぬかんぢの言ふあたをひて我をいかした
 三五 まへ

三六 我をふめる道をあらとしまかば汝こたへを我になしたまへ
 三七 りなんぢの律法を是れに教へたまへ

三八 なんぢの訓諭のみちを我にわきまへしめたまへ、われ汝のくす
 三九 しき事跡をふかく思はん

四〇 是がたまはしむ痛めるによりてとけゆく、ねがふくは聖言にあた
 四一 る

三十一 願くは我あちからを予へたまへ
 三十二 願くはいつそりの道を正より遠きけ、あんちの法をもて我を
 三十三 めぐみたまへ
 三十四 正の眞實のみちをえらび恒ふなんちのもろくの審判をわ
 三十五 が前におけり
 三十六 我なんちの詭詞を忘たひて離さずエホバよねがとく我をさ
 三十七 づるにめ給ふなかれ
 三十八 正の汝のいましめの道をとしらん、うの時なんち正の心をひろ
 三十九 く爲たまふべし
 四十 ○へ
 四十一 エホバよ願くはなんちの律法のみちを我をさへたまへ、正
 四十二 終にいたるまで之をまもらん
 四十三 正の智慧をあたへたまへ、さらば我なんちの法をまもり心を

四十四 つくして之おしたるさん
 四十五 われに汝のいましめの道をよましめたまへ、正の道をたの
 四十六 しめばなま
 四十七 正の心をなんちの詭詞おたふかしめて貪利ふかたふかしめ
 四十八 給ふあかき
 四十九 正の眼をはかおむけて虚じきことを見きらしめ我をなんちの
 五十 途おて活したまへ
 五十一 ひたすらに汝をあそるゝ汝の志もへお聖言をかたくしたまへ
 五十二 正のおそるゝ詩をのぞきたまへ、そのなんちの審判のきこめて
 五十三 善し
 五十四 我なんちの訓諭をしたへり願くはなんちの義をもて我をいか
 五十五 したまへ
 五十六 ○ワウ

四一 エホバよ聖言をおまたすひてあんなの憐憫なんの拯救を我の
 四二 のぞませたまへ
 四三 さらば我を我を誇るものに答ふことをえん、我れ聖言によりた
 四四 のめをなり
 四五 又、口より真理のこゑをこゝろく除きたまふなかれ、
 四六 れなんの審判をのぞみたればなり
 四七 我たえずいや永久あんなの法をまもらん
 四八 是をなんの訓諭をもとめたるより、障なくしてわやまん
 四九 我れまた王だちの前あんなの詔詞をかたりて聴ふことあら
 五〇 じ
 五一 是を愛するなんの誠命をもて己をたのしまふめん
 五二 是れ手を我があひする汝のいましめ、聖言なんの律法をふか
 五三 く思ふん

四九 ○ザイン
 五〇 汝をむく、汝のあもべお宣ひたる聖言をかもひいだしたまへ、
 五一 汝れおをのぞましめ給へり
 五二 あんなの聖言の是を活しよ、ゆゑに今もなほ是を難難のど
 五三 きの安んじなり
 五四 高ぶる者おほい、我をわきまらへり、されど我あんなの法をこ
 五五 ねれり
 五六 エホバよ、我れ汝をふるき往昔よりの審判をかもひいだして自
 五七 ちから慰めたり
 五八 なんの法をすつる悪者のゆゑより、我はげしき怒をえこ
 五九 したり
 六〇 なんの律法、わが家のあてわが歌となれり
 六一 エホバよ、是を夜間あんなの名をかもひいだしてなんの法

をまもるなり
 七六 主は汝のさとしを守りしおよりてこの事を文たるなり

七六 ○ヘテ
 七六 主はわがうくべき有なり、われ汝のもろくの言をまもら

七六 んといへり
 七六 主は心をつくして汝のめぐみを請求めたり、ねおとくの聖言お

七六 主は心をつくして汝のめぐみを請求めたり、ねおとくの聖言お
 七六 主は心をつくして汝のめぐみを請求めたり、ねおとくの聖言お

七六 主は心をつくして汝のめぐみを請求めたり、ねおとくの聖言お
 七六 主は心をつくして汝のめぐみを請求めたり、ねおとくの聖言お

七六 主は心をつくして汝のめぐみを請求めたり、ねおとくの聖言お
 七六 主は心をつくして汝のめぐみを請求めたり、ねおとくの聖言お

七六 主は心をつくして汝のめぐみを請求めたり、ねおとくの聖言お
 七六 主は心をつくして汝のめぐみを請求めたり、ねおとくの聖言お

七六 主は心をつくして汝のめぐみを請求めたり、ねおとくの聖言お
 七六 主は心をつくして汝のめぐみを請求めたり、ねおとくの聖言お

七六 主は心をつくして汝のめぐみを請求めたり、ねおとくの聖言お
 七六 主は心をつくして汝のめぐみを請求めたり、ねおとくの聖言お

七六 主は心をつくして汝のめぐみを請求めたり、ねおとくの聖言お
 七六 主は心をつくして汝のめぐみを請求めたり、ねおとくの聖言お

七六 主は心をつくして汝のめぐみを請求めたり、ねおとくの聖言お
 七六 主は心をつくして汝のめぐみを請求めたり、ねおとくの聖言お

七六 主は心をつくして汝のめぐみを請求めたり、ねおとくの聖言お
 七六 主は心をつくして汝のめぐみを請求めたり、ねおとくの聖言お

七六 主は心をつくして汝のめぐみを請求めたり、ねおとくの聖言お
 七六 主は心をつくして汝のめぐみを請求めたり、ねおとくの聖言お

七六 主は心をつくして汝のめぐみを請求めたり、ねおとくの聖言お
 七六 主は心をつくして汝のめぐみを請求めたり、ねおとくの聖言お

七六 主は心をつくして汝のめぐみを請求めたり、ねおとくの聖言お
 七六 主は心をつくして汝のめぐみを請求めたり、ねおとくの聖言お

七六 主は心をつくして汝のめぐみを請求めたり、ねおとくの聖言お
 七六 主は心をつくして汝のめぐみを請求めたり、ねおとくの聖言お

七六 主は心をつくして汝のめぐみを請求めたり、ねおとくの聖言お
 七六 主は心をつくして汝のめぐみを請求めたり、ねおとくの聖言お

を我にをしへたまへ
 高ぶるもの虚偽をくさだてゝ我にさからへり、こころ心をつくし
 てなんぢの訓諭をまもらん
 かれらの心のえふとりて脂のごとし、さきぞ我いなんぢの法
 をたのしむ
 困苦にあひたりし我によりきことなり此によりて我なんぢの
 律法をまなびえたり
 なんぢの口の法のまじりためにより千々のみね白銀にもまされ
 り
 ○ヨシダ
 なんぢの手いわけを造りわれを形づくきり、ねおこくの智慧を
 あたへて我になんぢの誠命をまなせしめたまへ
 なんぢを畏るゝもの我をみて喜をん、わと聖言およりて望を

いだきたればあり
 エホバよ我いなんぢの審判のたましく又あんぢの眞實をもて
 我をくるしめたまひしを知る
 ねおこくの汝の志もべに宣ひたる聖言にまたおひてあんぢの
 仁慈をわが安慰となしたまへ
 なんぢの憐憫をわきに離せたまへ、さらばわき生ん、なんぢの法
 いわが樂めるべしあり
 高ぶるものに恥をかうふらせたまへ、かきらの虚偽をもて我を
 くつおへしたれをなりされど我あんぢの訓諭をふかくおもは
 ん
 汝をあるる者ぞなんぢの諸詞を悉るものを我にかへらじ
 めたまへ
 わがこゝろを全くして汝のたきてを守らしめたまへ、さらばわ

き恥はづかしをかうふらじ

○カフ

わが靈魂たましいのなんぢの救すくをしたひてたえいるをかりなり然しかどわ
ききは聖言せいごんによりて望のぞをいだく

なんぢ何いかのとき我われをなをさむるやといひつゝ我われみことを

ふによりて眼めあどろふ

われ煙けむりのあかの草くさはふとくありぬれども尙なほなんぢ律法りふぽう

をわすれず

汝きみはまもべの日ひに幾いく何なんありや、汝きみいづれのとき我われをせむるもの

に審判しんぱんをあこなひたまふや

たかふる者ものと我われを害をさはんどて罪つみを得えれり、かきらのなんぢの法のり

をあたふす

なんぢの誦命じうめいのみを眞實まことなり、かれらの虚偽いつはりをもて我われをせむ、ぬ

おはくの我われをたすけたまへ

かれらの地ちあて得えとんせ我われを隠かくろばせり、されせ我われのなんぢの

訓諭くんゆをすてきりき

願いのちくのなんぢの仁慈じんじにまたがひて我われをいかしたまへ然さうばわき

御口みくちよりいづる誼詞ぎしをまもらん

○ラメテ

エホバよみことその天てんにてとましへに定さだまり

なんぢの眞實まことのよろづ世よにかよふ、なんぢ地ちをかたく立たまへ

を地ちのつねにあり

こどられものなんぢの命令めいれいにまたがひ恒とこふありて今日けふあい

たる、萬よろのもれい皆みななんぢの僕しもべなをさむるや

なんぢの法のりわがたのしみとなりざりしならそ我われいつひに患難わづらひ

のうちあ滅めつびたるならん

されば、我れおなんちの訓諭を覚え、汝これをもて我をいかしたまへばあり

我れなんちの有なりね、おはく我をすくひたまへ、とて汝のさとしを求めたり

恐きもの、我をはろばさんとして、窺ひぬ、我れ唯なんちのもろくの證詞をおもはん

我れもろくの純全に限あるをみたり、されど汝のいましめぬいと廣し

○メム

われなんちの法をゆつくしむこといかぞかりや、われ終日こきを深くたもふ

なんちの誦命いつねに我どもにありて我をむ、お仇にまさりて、誤からしむ

我れなんちの證詞をふかくおもふが故、おわがすべての師にまさりて智慧おはし

我れなんちの訓諭をまもるがゆゑに、老たる者にまさりて事をむきまふるあり

われ聖言をまもらんため、おわが足をどきめてもろくのあしき途おゆかしめず

なんち我親をしへたまひしによりて、我おんちの審判をはなれざりき

みこととせ、滋味わが唇にあまきこといかぞかりや、蜜のわが口に甘きおまされり

我なんちの訓諭によりて、智慧をえたり、このゆゑに虚偽のすべての途をにくむ

○メン

百六 かんちの聖言みことばのわがわしの體てい火ひのひありなり

百七 わきなんちのたゞしき審判さはんをまもらんことをちかひ且かつかたくなり

百八 われ甚いいたく苦しめりエホバよねがはくハ聖言みことばにまたがひて我をいりしたまへ

百九 エホバよねがはくハ誠意まことよりするわが口の獻物けんぶつをうけてかんちの審判さはんをしへたまへ

百十 わが靈たましひのつねに危險あやふをかずされせ我かんちの法はふをわすれず

百十一 あしき者ものがために蹄わだをまうけたりされせわれ汝のさとしより迷まよひいでざりき

百十二 われ汝のよろゝの證詞あかしをどこしへにわが嗣業ついでとせりこれら證詞あかしのわが心をよろこをしむ

百十三 われ汝のあきてを終はつまでどこしへに守らんぞて之にこゝろを傾かたけたり

○サメタ

百十四 わき二心ふたこころのものをにくみ汝のあきてを愛いとしむ

百十五 かんちのわが匿かくるべき所ところの盾たてなりわれ聖言みことばによりて望のぞみいだく

百十六 惡わるきをなすものよ我をはなきされわれわが神かみのいましめを守らん

百十七 聖言みことばにまたがひ我をさへて生存せいぞんしめたまへわが望のぞみあつきて恥はづれをらしめたまへ

百十八 われを支さへたまへさらむき安やすけかるべしわれ恒とこになんちの律法りつぽうにこゝろをそゝがん

百十九 すべて律法りつぽうよりまよひいづるものを汝みづかかりしめたまへりかれ

ちの欺詐^{あやまち}のむなしけれをなり

かんちの地のすべての惡きものを法^{はふ}洋^{やう}のこどく除^{はら}きさりたまふ

よこの故^{ゆゑ}にわれ汝^{なんぢ}のあかしを愛^{あい}す

わが肉體^{にくたい}かんちを懼^{おそ}るゝによりてふるふ、我^{われ}のなんちの審判^{さいはん}を

あそる

○アイシ

是^{こゝ}の審判^{さいはん}と公議^{こうぎ}とをあてなふ、我^{われ}をすてゝ虐^{あだ}ぐるものに委^{あづか}ね

たまふなりと

汝^{なんぢ}のまもべの中保^{なかほり}とありて、祖^{いひ}祖^{いひ}をえしめたまへ高^{たか}ぶるものゝ

我^{われ}をまへたぐるを容^{ゆる}したまふならむ

わが眼^めのなんちの救^{すく}とかんちのたゞしき聖言^{せいごん}とをまたまふに

りてれどろふ

ねがとく^{ねがとく}のなんちの憐憫^{れんみん}おまたがひてなんちの僕^{しもべ}をあしらひ

我^{われ}にかんちの律法^{りつぽう}教^{おし}をしへたまへ

我^{われ}のなんちの僕^{しもべ}なり、われに智慧^{ちゐ}をあたへてなんちの禱詞^{たうし}をま

らしめたまへ

彼等^{かれら}のなんちの法^{はふ}をすてたり、今^{いま}のエホバはのたらきたまふべ

き時^{とき}なり

みの故^{ゆゑ}にわき金^{かね}よりもまじりなき金^{かね}よりもまさりて汝^{なんぢ}のいよ

しめを愛^{あい}す

この故^{ゆゑ}にもろくのみに係^かるかんちの一切^{いっけつ}のさとしを正^{ただし}と

おもふ、我^{われ}すべてのいつはりの途^{みち}をあくむ

○ペ

汝^{なんぢ}のあかし妙^{たみ}なり、くよるが故^{ゆゑ}に見^みる靈^{たま}魂^{たま}これをおもる

聖言^{せいごん}うちひらくきと光^{ひかり}をはなちて愚^{おろ}かなるものをさどらし

む

我なんぢの誠命まことのみことをしたふが故に、まご口をひろくわけて、囁ささやきも
ぞめたり

ねがふべく、聖名せいめいを愛するものに恒つねになしたまふおどく身みをか
へして我を、あはさみたまへ

聖言せいごんをもて、まご歩履ふろをどよのへもろくの邪曲よこしまをわれに主た
らしめたまふおかし

わきそ人のまへたげより贈たまひたまへ、さらそまじき訓諭くんごんをまもら
ん

ねがはく、聖顔せいがんをなんぢの僕おこのうへにてらし、汝みづかのおきてを我
おをしへたまへ

人なんぢの法はふをまもらざるによりて、わが眼めのなみだ河かのごど
くに流ながる

○ ウェデ 1

エホバよなんぢの義よこしまくなんぢの審判しんぱんのなはし

汝みづかたをしきと此上このみなき眞實まことをもてその證詞あかしを命めいじたまへり

わが敵かたきなんぢの聖言せいごんをわすれたるをもてわが熱心ねっしんわれをほろ
ぼせり

なんぢの聖言せいごんのいとよむ此故このゆゑにあんぢの僕おこのみを愛あいす

われわれの御みなるものにて人おあなどらるきとも汝みづかのさとしを忘わすれず

あんぢの義よこしまいとふしへの義よこしまなり汝みづかれのりの眞理まことなり

され悲難かなしみと憂うれどおかしれども汝みづかのいましめわれが喜樂よろこびなり

あんぢの證詞あかしのいとこしへに義よこしまし、ねがふべくわれに智慧ちゐをたま
へ我われなぐらふることを得えん

○ コフ

わき心をつくしてよそまじき聖せいエホバよ我にこたへたまへ我な

百四十六
んちの律法をまもらん
われ汝をよそしれり、ねがてくわれを救ひたまへ我かんの

百四十七
詠詞をまもらん

百四十八
わき歸朝あきいでし呼れり、且き聖言あよりて望をいだけり
夜の更のきたらぬお先だち且が眠りさめて汝のみことばを深

くおもふ

百四十九
ねがてくなんちの仁慈おまたがひて且お聲をききたまへ、エ
ホバよかんの審判おしたるひて我をいかしたまへ

百五十
惡をおひもどむるものい我あらかづけり、彼等のなんちの法お
どほくとなる

百五十一
エホバよ汝の且れに近くましませり、なんちのすべての誠命の
まことなり

百五十二
且れ早くよりなんちの詠詞によりて汝がこきを永遠にたてた

まへることを知れり

○レレ

百五十三
ねがてく且お患難をみて我をすくひたまへ、我なんちの法を
且すれさればなり

百五十四
ねがてく且お訟をあげつらひて我を、おなひ聖言にまたお

ひて我をいかしたまへ

百五十五
すくひい惡きものより遠くとなる、かきらのなんちの律法をも

どめさればなり

百五十六
エホバよかんの憐愍おはいなり願くなんちの審判にま
たがひて我をいかしたまへ

百五十七
我をせむる者且お敵する者おはし我かんの詠詞をよめる

ることをなぞき

百五十八
虚偽をおこかふもの汝のみことばを守らざるにより我われら

百六十一
を見てうきへたり

百六十二
ねがふとくはむが汝のさとしを愛すること幾何なるをかへり

百六十三
たまへエホバよなんぢの仁慈にまたおひて我をいかしたまへ

百六十四
なんぢのみこととの總計はまふとなり汝のたゞしき審判はど

こしへにいたるまで皆たゆることなし

○レシ

百六十五
もろくの侯のゆゑなくして我をせむ然るにむ心いたゞ汝の

百六十六
みこととを畏る

百六十七
され人のふはいなる持物をえたるごとくお汝のみこととをよ

ろこふ

百六十八
され虚偽をにくみ之をいみきらへとも汝のりを愛す

百六十九
され汝のたゞしき審判のゆゑをもて一日に七次なんぢを讃稱

よ

百七十
なんぢの法をあいするものお大なる平安ありかれらおん

百七十一
礎をわたふる者なし

百七十二
エホバよ我なんぢの救をのぞみ汝のいさしめをかてなへり

百七十三
せお靈魂いなんぢの證詞をまもれり我いたく之をあいす

百七十四
されかえんぢの訓諭となんぢの證詞とをまもりぬむがすべての

道のみまへあられなり

○サウ

百七十五
エホバよ願くはむがよふ聲をみまへおちかづけ聖言おまたの

百七十六
ひて我あちをあたへたまへ

百七十七
むが願をみまへおいたらせ聖言おまたおひて我をたすけたま

へ

百七十八
むがくちびるの讚美をいだすべし汝はきに律法我をしへたま

へむあり

我^レの舌^舌のみにこそを隠^隠ふべし、なんぢの一切^{一切}のいましめい義^義な
れバなり

あんぢの手^手をつねあわぐ助^助となしたまへ、とれなんぢの訓諭^{訓諭}を
えらび用^用ゐたれバなり

エホバよ我^我なんぢの救^救をまたへり、なんぢの法^法のいまだのしみ
なり

願^願くは我^我が靈魂^{靈魂}をながらへしめたまへ、さらバ汝^汝をはめたまへ
ん、汝^汝のさそきの我^我をたすけんことを

見^見えり亡^亡れたる羊^羊のごとく迷^迷ひいでぬ、なんぢの僕^僕をたづね
たまへ、とれ汝^汝のいましめを忘^忘さされバなり

第百二十篇 京詣^{京詣}のうた

とれ困苦^{困苦}にあひてエホバをよびしかバ我^我にこたへたまへと
エホバよねがとくは處^處僕^僕のくちびる 欺^欺詐^詐の舌^舌より我^我が靈^靈魂^魂を

たすけいだしたまへ

あきむきの舌^舌よなんぢに何^何をあたへらば何^何をくえらるべき
か

ますらをの利^利き箭^箭と金^金荏^荏花^花のあつき炭^炭となど
わきはひなるかな我^我のノセタにやせりケタルの幕^幕屋^屋けかたそ

らに住^住り

とれたまひしひの平安^{平安}をにくむもれど偕^偕あすめり
とれ我^我の平安^{平安}をねがふ、されど我^我ものいふときにかれら戦^戦争^争をふ

のみ

第百二十一篇 京^京さうでの歌^歌

とれ山^山あひかひて目^目をあぐ、我^我が扶^扶助^助のいづこよりきたるや
とれたすけり天地^{天地}をつくりたまへるエホバよりきたる

エホバのなんぢの足^足のうでかさるゝを容^容したまふと汝^汝を

まもるものの微睡あぐさたまふことなし
 視みよイスラエルを守りたまふものの微睡あぐさこどもなく寝るふも
 なからん

エホバの汝をまもる者なりエホバのなんぢの右手をあはふあはる
 なり

ひる日なんぢをうたす夜の月なんぢを傷いたじ

エホバのなんぢを守りてもろくの禍害をまぬりしめ並ならな
 んぢの靈魂たましひをまもりたまへん

エホバは今よりまゐしへにいたるまで汝のいづるど入るどを
 まもりたまへん

第百二十二篇

ダビデがよめる京みやこさうでの歌うた

人ひととれおむかひて幸さいエホバのいへおゆかんどいへるとき我われよ
 ろあべり

エルサレムよまゐらのはななんぢの門のうちふたてり

エルサレムよなんぢの細くつらかりたる邑のごとく固かたくたて

もろくのやから即ちすなはちハの支派しはいかしみお上りきたりイスラ

エルおむかひて詔詞みことばをふし、またエホバの名おかんしやをなす

彼處あそこおささむきの寶座たからざさうけあらる、これダビデの家のみくらなり

エルサレムのためお平安をいのれ、エルサレムを愛するものの

榮さかゆべし

ねがはくおなんぢの石垣いしがきのうちお平安あり、なんぢの龍殿りゆうどののう

ちお福祉ふくしあらんこと哉

まが兄弟のためまが偲おもひのためはまれ今なんぢのなかお平安あ

まどいせん

まれらの神エホバのいへのために我われなんぢの福祉ふくしをもとめん

第百二十三篇 京さうでの歌

一 天^{てん}あいますものよ我^{われ}なんぢにむかひて目^め我^{われ}あや
二 みよ僕^{わが}その主^{しゅ}の手に目^めをうゝぎ婢^{こひめ}女^をうの主^{しゅ}母^{はは}の手に目^めをうゝ
三 ぐダとくわれらの目^めを神^{かみ}エホバに目^め我^{われ}うゝぎてその目^めを
四 憐^{あはれ}みたまへんとををまつ
五 ねがとくわれらを憐^{あはれ}みたまへエホバよわれらを憐^{あはれ}みたまへ、
六 ろい目^めをらお輕^{かろ}侮^へみみちあふれぬ
七 かもひ目^めをびなきものゝ凌^{あまた}辱^しどたりふるものゝ輕^{かろ}侮^へどれれ
八 らの靈魂^{たましひ}おみちあふれぬ

第百二十四篇 ダビデのよめる京さうでの歌

一 今^{いま}イスラエルにいふべし、エホバもし目^めをらの方^{かた}にいまさず
二 人^{ひと}々^び目^めをれらおさからひて起^たりたつときエホバもし我^{われ}憐^{あはれ}のかた
三 に在^ありしならんお

四 かれらの怒^{いかでか}の目^めをれらおむかひておこりし時^{とき}目^めをれらを生^はるまゝ
五 おて吞^のじならん
六 また水^{みづ}の目^めをれらをふはひ流^{なが}れり目^めをれらの靈魂^{たましひ}をうちこえ
七 高^{たか}ふる水^{みづ}の目^めをれらの靈魂^{たましひ}をうちみえしならん
八 エホバのはむべきかな我^{われ}憐^{あはれ}哀^{かな}かれらの齒^はお目^めたして喘^{あは}くらえ
九 せたまへさきき
十 我^{われ}憐^{あはれ}のたましひ捕^{とら}鳥^{とり}者^{もの}の目^めををのぶるゝ鳥^{とり}のごとくおのゐ
十一 れたり羅^ろのや衣^えきて目^めをれらのがれたり
十二 目^めをらのお助^{たすけ}天地^{あめつち}をつくりたまへるエホバの名^なにあり

第百二十五篇 みやこ詣^{まが}のうた

一 エホバに依^よ頼^{たの}むものいシオン^{しおん}の山^{やま}のうたをかさるゝことなくし
二 て永遠^{えいぞう}あるおごとし
三 エルサレム^{エルサレム}を山^{やま}のかこめるごときエホバも今^{いま}よりどこしへお

うの民をかみたまえん
 惡の杖のたましきものゝ所傾あどまるとなるべし斯て
 たましきものゝ手の不義あゝあることあらじ
 エホバよねおえくの善人どこゝろ直きものぞお福祖をはどこ
 したまへ
 されどエホバの轉へりてあのが曲れる道あいるものを惡きわ
 きをなすものどもあふしめたまえん平安のイエスエルのう
 へあわれ

第百二十六篇 京まうでの歌

エホバのオンの俘囚をかへしたまひし時われらの夢みるもの
 のごとくなりき
 うのとき笑ひわれらの口あみち歌われらの舌あみてり
 エホバかれらのためあ大あることを作たまへりといへる者もろも

ろの國のなかにはありき

エホバわれらのためあ大なることをなしたまひたれば我情の
 たのしみり

エホバよ願くわれらの俘囚をみなきの川のごとくお歸した
 まへ

涙どももお掃くものゝ歡喜どももお積ちん

うの人の種をたづさへ涙をなすしていでゆけど禾束をたづさ
 へ喜びてかへりきたらん

第百二十七篇 シロモンがよめる京まうでの

うた

エホバ家をたてたまふあらず建るものゝ勤勞のむなしく
 エホバ城をまもりたまふあらずを衛士のさめをるゝ徒勞な
 り

二 なんぢら早くあき速くいねて幸苦の糧をくらふにむなしきあ
 り斯てエホバの愛しみたまふものお寝をあたへたまふ
 三 みよ子輩のエホバのあたへたまふ嗣業にして貽の質の報
 のたまものなり
 四 年壯きころはひの子にますらをの手ある矢のごとし
 五 矢のまきたる顔をもつ人のさいはひなりかれら門ありて仇
 六 どものいふとき恥ることあらじ

第百二十八篇 京まふでの歌

一 エホバをおろれうの道をあゆむものの皆さいはひあり
 二 ういなんぢおのが手の勤勞をくらふべけれなりなんぢの福
 三 祉をえまた安處ををるべし
 四 なんぢの妻いへの奥をりておほくの實をむすふ葡萄の樹
 五 のごとく汝の子輩のかんぢの庭に圓居してかれらの若樹のこ

六 福よエホバをあるゝ者にかく福祉をえん
 七 エホバのシオンより恵をなんぢお賜せんなんぢ世にあらんか
 八 ぎりエルサレムの福祉をみん
 九 さんぢおのる子輩の子をみるべし平安ハイスラエルの上にあ
 一〇 り

第百二十九篇 京まうでのうた

一 今イスラエルのいふべし彼等ハエバ我我わかきときより
 二 悩めたり
 三 あきらみえを我をわかるときよ悩めたりされどこれお
 四 弱きものを得きもき
 五 弱きもののわが背をたさへしてその味をなほくせり
 六 エホバの義しあしきものと繩をたちたまへり

シオンをにくむ者のみな恥を蒙ひて去りておかせらるべし
 かれらの長きるさきおかるゝ屋上の草のごとし
 これを刈るものゆゑの手あみたす之をつかぬるものゝ事
 よとこゝろふ盛ざるなり
 かたぢやを過るものバエホバの恵なんぢの上おあれといへず
 されちエホバの名およりてなんぢらを祝すといへず
 第百三十篇 京まうでの歌
 あゝエホバよまれふかき淵より汝をよべり
 主よねむるゝの目を聲をきよ汝のみよをわが懇求のこゑお
 たふけたまへ
 ヤハよ主よなんぢ若もろくの不義お目をさめたまはし誰か
 よく立ちてをえんや
 されどなんぢお救われバ人おかうれかしこまき給ふべし

見よエホバを俟望むもの靈魂のまぢの予び見よの聖言お
 よりて望をいだく
 わびたましひの衛士があしたを待おまさり誠おえじび且をま
 つにまさりて主をまてり
 イスラエルよエホバおよりて望をいだけうのエホバおあこれ
 みありまたゆたりなる救頭あり
 エホバのイスラエルをろのもろくの邪曲よりあがなひたま
 せん
 第百三十一篇 ダビデのよめる京まうでのう

エホバよわが心をさすわが目をたかふらすわれの大なること
 我にあよむ事じき事をつとめざりき
 わきいじが靈魂をもださしめまた安からしめたり乳飲たちし

嬰兒みどりこのうの母ははあたまよるごとく我われがたましひの乳ちちをたちし嬰兒みどりこの
のさぞくまにに恃たのれり
イエラエルイスラエルよ今よりぞこしへあエホバエホバあたまよりて望のぞみをいだけ
エホバエホバよねおそくのダビデダビデの爲ためあうのもろゝの張はをこゝろ
あ記しるたまへ
第百三十二篇 京みやまうでの歌
ダビデダビデエホバエホバにちかひヤコブヤコブの全能者じんのうしやあうけひていふ
われエホバエホバのためふ處ところをたづねいだしヤコブヤコブの全能者じんのうしやのため
あ居すまひ所ところをもどめうるまでいミが家いえの裏うら屋やにいらすわが臥床ふしどに
のぼらずミが目をねぶらしめすわが眼瞼まなこをどちしめざるべし
ぞ
われらエフラエフラあて之これをきよヤアルヤアルの野のあて見みどめたり
われらわうの居すまひ所ところあゆきてうの承足しやうそくのまへふ俯伏ひれふさん

エホバエホバよねがはくの起おきてあんちの秘ひ威いの權りつどしもあなんちの
安居處やすこころあいらたまへ
なんちの祭司さいしたちを義よを衣きなんちの聖徒せいとのみな歡よろこびよをふべ
し
なんちの僕おんなダビデのためあかんちの受膏者じゆあうじやの面おもをまうけた
まふあられ
エホバエホバ眞實まことをもてダビデに誓ちかひたまひたれば之これにたふふこと
あらじ曰いはくわれなんちの身みよりいでし者をなんちの座くら位ゐにさ
せしめん
なんちの子輩こゝろもしわがをじふる契約けいやくと證詞あかしをまもらばかれ
ちの子輩こゝろもまた永遠とこほあなんちの座くら位ゐあさすべしと
エホバエホバのレオンレオンを擣おびてあのお居すまひ所ところあせんどのすみたまへり
曰いはくみれの永遠とこほにわが安居處やすこころありわれふまに住すまんろわかれ之

一 其の予みたればなり
 二 われハ^レオン^ノの糧^シをゆたかみ祝^スしくひものをもてうの貢^{ミツ}者^ノをあ
 三 かしめん
 四 われ我^レをもてうの祭司^スなちに衣^キせん、うの聖徒^スみな聲^{コエ}たから
 五 かによろこびよをふべし
 六 われダビデのためにあしこに一つの角^{ツノ}をはえしめん、わが受^{ウケ}膏^{カウ}
 七 者のために燈火^{トウカ}をうなへたり
 八 われかれの仇^{トコロ}にはちを衣^キせん、されどかきうの冠^{カウ}弁^{ベン}さかゆべ
 九 し
 一〇 第百三十三篇 ダビデのよめる京^{キョウ}まうでの歌
 一一 眼^メよりはらから相^{アイ}睦^ムてまもにをるひかに善^{ヨシ}いかに樂^レきみあ
 一二 首^{カミ}あうよがれたる貴^{タカ}きあふら顯^{ハカシ}あなされアロン^ノの鬚^{ヒゲ}あなされ
 一三 うの衣^{コト}のすうあまで濡^シれきたよるよることく

一 またヘルモン^ノの露^{ツル}くだりてレオン^ノの山^{ヤマ}あおるよむことし、そ
 二 のエホバ^ノかしこに神^{カミ}祖^ソをくだし第^{ダイ}なき生^{ナマ}命^メをさへあたへたま
 三 へり
 四 第百三十四篇 京^{キョウ}まうでの歌
 五 夜^ヨ間^{カン}エホバ^ノのいへあたちエホバ^ノあ事^{コト}ふるもろくの僕^{オコ}よエホ
 六 バをはめまつれ
 七 なんぢら聖^{セイ}所^{ショ}あむかひ手^テをあげてエホバ^ノをはめまつれ
 八 ねがえくのエホバ^ノ天^{アメ}地^{ツチ}をつくりたまへるものシオン^ノより汝^{ナニ}を
 九 めをみたまごんことを
 一〇 第百三十五篇
 一一 なんぢらエホバ^ノを讃^{ホメ}稱^{ショウ}へよエホバ^ノの名^ナをはめたまへよエホバ
 一二 の僕^{オコ}等^トはめたまへよ
 一三 エホバ^ノの家^{イヘ}われらの神^{カミ}のいへの大^{ダイ}殿^{テン}にたつものよ讃^{ホメ}稱^{ショウ}へよ

三 エホバの恵みのし、なんぢらエホバをほめたまへよその聖名の
うるをせし讃うたへ

四 そのヤハラの爲のためにヤコブをえらみイサエルをえらみて
その珍寶となしたまへり

五 われエホバの大なるとわれらの主のもろくの神にまされる
とをしきり

六 エホバその聖旨にかなふことを天にも地にも海にも淵にもみ
なことをよく行ひたまふあり

七 エホバの地のはてより霧をのぼらせ雨のために電光をつくり
その庫より風をいだしたまふ

八 エホバの人より畜類おいたるまでエザブトの首出をうちたま
へり

九 エザブトよエホバのなんぢの中にゐるしと奇しき事跡とをあ

十 くりてバロどの僕に臨ませたまへり

十一 エホバのあはくの國々をうち又いきほひある王等をころした
まへり

十二 アモリ人のわうレハンバレヤンの王オグならびにカナンの國
々なり

十三 かれらの地をゆづりとしらの民イサエルの嗣業としてあた
へたまへり

十四 エホバよかんぢの名いとこしへに絶ることなし、エホバよかん
ぢの記念のよろづ世にあよむん

十五 エホバのその民のために審判をなし、その僕等にかゝはれる聖
意をかへたまふ可れなり

十六 もろくのくにの偶像のまろかねと金にして人の手のわざなり
うのとらさうの口あきといはず目あれと見す

耳あれゆきかず、またその口に氣息あるみとなり
これを造るものと之によりたのむものとの信これにひどしか
らん

イスラエルの家よエホバを求めまつれ
アッロンのいへよエホバを
はめまつき

レゼの家よエホバを求めまつれ
エホバを畏るものよエホバ
を求めまつれ

エルサレムにすみたまふエホバのレオンにて讃まつるべきう
ちエホバを求めたまへよ

第百三十六篇

エホバに感謝せよエホバのめぐみふかし、その憐憫どこしへ
お絶ることなけれとなり
もろくの神の神にかんじやせよ、その憐憫どこしへにたゆ

ることなけれとなり
もろくの主の主にかんじやせよ、うの憐憫どこしへにたゆ

ることなけれとなり
たゞ獨りあはれなる奇跡あしたまふものに感謝せよ、その憐憫
いどこしへにたゆることなけれとなり

智慧をもてもろくの天をつくりたまへるものお感謝せよ、う
のあはれみ永遠にたゆることなけれとなり

地を水のうへに布たまへるものお感謝せよ、うのあはれみ永
遠にたゆることなけれとなり

巨大なる光をつくりたまへる者おかんじやせよ、うの憐憫どこ
しへお絶ることなけれとなり

晝をつくりさだめするためお目をつくりたまへる者おかんじや
せよ、うの憐憫どこしへにたゆることなけれとなり

夜をつかさどるためお月もろ／＼の星どをつくりたまへる者にかんしやせよ、うの憐憫はどこしへにたゆることなけれとなり
 もろ／＼の首出をうちてエザブトを賣たまへるものも感謝せよ、うのおはれみの永遠にたゆるふとなければなり
 イスラエルを率てエザブト人のなかより出したまへる者もかんしやせよ、うのあどきみはどこしへに絶ることなければなり
 臂のをしつよき手をもて之をひきいだしたまへる者もかんしやせよ、うの憐憫はどこしへにたゆることなければなり
 紅海をふたつに分たまへる者にあんしやせよ、うの憐憫はどこしへにたゆるふとなければなり
 イスラエルをしてうの中をわたらしめ給へるものに感謝せよ、うのあどきみの永遠にたゆることなければなり

パロとうの軍兵どを紅海のうちにお仆したまへるものも感謝せよ、うのあはれみの永遠にたゆることなければなり
 うの民をみちびきて野をすぎしめたまへる者もかんしやせよ、うの憐憫はどこしへにたゆるふとなければなり
 大なる王たちを撃たたまへるものに感謝せよ、うのあどきみの永遠にたゆるふとなければなり
 名ある王等をころしたまへる者にかんしやせよ、うの憐憫はどこしへにたゆることなければなり
 アモリ人の首をころしたまへる者にあんしやせよ、うの憐憫はどこしへにたゆることなければなり
 パレヤンのわうガを誅したまへるものに感謝せよ、うのあはれみの永遠にたゆることなければなり
 かきらの地を嗣業としてあたへたまへる者もかんしやせよ、う

の憐憫のこしへにたゆることなけれをなり
 一の僕イヌツニルにゆづりどして之をあたへたまへるものに
 威厳せよ、うのわはきみり永遠にたゆることなけれをなり
 わきらの微服かりしときに記念したる者にかんしやせよ、
 一の憐憫のこしへに絶ることなけれをなり
 わる歌よりわれらを助けいだしたまへる者にらんしやせよ、
 一の憐憫のこしへに絶ることなけれをなり
 すべての生るものに食物をあたへたまふものあ感謝せよ、うの
 わはれみりとあしへに絶ることなけれをなり
 一の神あかんしやせよ、うの憐憫のこしへに絶るみどなけれ
 をなり
 第百三十七篇
 わきらバセロンの河のはどりあすわりレオン茂おもひいで

歌をながしぬ
 一のわれらうのあたりの樹にわが琴をかけたり
 一のわれらを夢にせしものわれらに歌をもどめたり、我憫をく
 るしむる者われらにあの心を慰むせんとてレオンのうた二つ
 うたへといへり
 われら外邦にありていで、エホバの歌をうたえんや
 エホバレムもよし我なんぢをわすれおぼわ右の手にうの巧
 をわすれしめたまへ
 一のわきら汝を愛もひいでず、もしわきエホバレムをわすすべて
 の歡喜の極となさずばわが舌をわが唇につかじめたまへ
 一のエホバよねがはくのエホバレムれ日エホバの子輩、これを
 誦唱せられ基座でもはちひはすけといへるを聖意にとめたま

八 ほろぼさるべきバビロンバビロンの女メデバよあんちをわれらに作しごどく
汝にむくゆる人いさいそひあるべし
なんぢの嬰兒メデバをとりて岩のうへになげうつものゝ靈メデバひなるべし

第百三十八篇 ダビデのうた

一 わきわめる心をつくしてなんぢに感謝し、もろゝの神のまへ
にて汝をはめうたえん
二 我なんぢのきよき宮にむりひて伏拜プロタナき、なんぢの仁慈ミセリコルディアとまこと
との故によりて聖名ホノリにうんしやせん、そは汝そのみこととをも
ろゝの聖名ホノリにまさりて高くしたまひたればあり
三 汝わがよそよりし日にわれにこたへ、わが靈魂ソウルにちからをあた
へて雄々メカニうらしめたまへり
四 エホバよ地のすべてての王いなんぢに感謝せん、うれらひなんち

五 の口乃もろゝの言をききたとをあど
六 かれらひエホバのもろゝの途についてうたえん、エホバの榮

七 光あはいなれとなり
八 エホバの高くまじませども卑きものを顧みたまふ、されど亦あ

九 されるものを遠より取りたまへり
一〇 綴ツグひわれ悲難ヘリのなかを歩アムひども汝わきをふたよび活サカシし、うの手

一一 をのそしてわが仇のいかりをふせき、うの右の手われをすくひ
一二 たまふべし

一三 エホバのわきに餘あまれるふとを全うしたまはん、エホバよなんち
一四 の憐憫ミゼリコルディアいどこじへにたゆることあじ願ネガフく、なんぢの手れもろ

一五 もろの車跡クルマノアトをすてたまふなかれ
一六 第百三十九篇 伶長ソングスマンあうたえしめたるダビデ

の歌

一 エホバよあんぢの我をさぐり我をえりたまへり
 二 あんぢのわが坐るをも立をもたり又ぞ得くよりわが念をわき
 三 まへたまふ
 四 あんぢのわが歩むをもわが臥をもさぐりいだし、わがもろくの途をこそく知たまへり
 五 うのわが舌ふ一言ありとも祝よエホバよなんぢこそく知たまふ
 六 なんぢの前より後よりわきをかこみ、わが上に手の手をねきたまへり
 七 かゝる知識いどくすしくして我にすぎ、また高くして及ぶことあたはず
 八 我いつこふゆきてなんぢの聖靈をはかれんや、われいつこに往てなんぢの前とのまれんや

八 わき天にのぼるをも汝かじこにいさじ、われわが榻を陰府にまうくるとも祝よなんぢ彼處にいます
 九 我あけぼのの翼をかりて海のはてにすむとも
 十 あじこにて尙なんぢの手わきをみちびき汝のみぎの手われをたもちたまへん
 十一 暗ハかならず我を救はひ我をかこめる光の夜とあらんと我いふとも
 十二 汝のみまへに暗きものをかくすことなく夜もひるのごとくに輝けり、なんぢにのくらきも光もことなることあじ
 十三 汝のわがはらわたをつくり又わがはらの許にわれを組成たまひたり
 十四 われなんぢに感謝す、わきの畏るべく奇しくつくらきたり、なんぢの事跡のことくくすじ、わが靈魂いどつをらに之をえ

色り
 わき隠れたるをそころにてつぐられ地の底所にて妙につまりあ
 とささしどきわの骨赤んちにかくるよことなかりき
 わの體いまだ全からざるになんちの目にはやくより之をみ日
 日かたちづくられしわの百體の一だにあらきりし時にこそこ
 とくなんちの形にあるされたり
 神よなんちのもろの思念のわれに實きこといかをかりそ
 や、ろのみおもひの總計のいかに多きをかり
 我これを算へんとすれどもうのかすの沙よりもあはし、わき眼
 さむるときも尙なんちをさきにをる
 神よなんちのかならず惡者をころしたまへんされば血をなが
 すものよ我をはなれされ
 か色らわあしき金匱をもて汝にさからひて言ふ、なんちの仇の

二 みだりに聖名をとなふるあり
 一 エホバよわきの汝をにくむ者をにくむにあらすや、なんちお違
 ひておこりたつものを服ふにあらすや
 三 われ甚くか色らをにくみてわの仇をす
 三 神よねおそく我をさぐりてわの心をとり我をころしてわ
 二 おもろの思念をとりたまへ
 二 ねおそく我およこしなる途のありやなしやを見てわれを
 永遠のみちお導きたまへ
 第百四十篇 俗長にうたはしめたるダビデの
 一 エホバよねおはく我惡人よりわれを助けいだし我をまもりて
 二 強暴人よりのおれしめたまへ
 二 かれらの心のうちに被害をくさだてた文士戰闘をかこす

二 かれらの蛇のごとくかの舌を利す、うのくちびるのうちに蜂
 の毒あり、セツ
 四 エホバよ願くわわきを保ちてあしきひとの手よりのおれしめ
 我をまもりてわが足をつまづかせんと謀るあらざる人よりの
 おしめ給へ
 五 高ぶるものわがために路と索とをふせ路のほどりお綱をは
 りかつ綱をまうけたり、セツ
 六 われエホバにいはらく汝わが神なり、エホバよねがはく
 わが敵の心をききたまへ
 七 わが衆のちからなる主の神よ、なんぢたたかひの日にわが首
 をあはひたまへり
 八 エホバよあしきひとの欲ひのまゝあすることをゆるじたまふ
 なかれ、うのあしき企圖とどげしめたまふなかき、あうらくい

九 等みづから誇らん、セツ
 十 われを圍むものよ首のふのきのくちびるは殘害にあはくるべ
 し
 十一 もえたる炭火かきらのうへにあちかれらの火をあげいさられ、
 ふかき穴あなげいさられて再びたきいづることあたえざるべ
 し
 十二 惡言をいふもの、世にたてりてす暴ふるもの、わききはひに通
 及してたふさるべし
 十三 われの苦しむもの、訴えまづしきもの、義とをエホバの守と
 たまふを知る
 十四 義者のかならず聖名おかんちやし直者のみまへに住ん
 第百四十一篇
 十五 エホバよ我なんぢを呼ぶ、ねがひの達めあわさるたりたま

へ、われ汝をよそふときわゆる聲ふ耳をかたふけたまへ
 わるの驚物のおどくにわする所をみまへおさうげ夕のそなへも
 のゝ如くおわが手をあげて聖前にさうげんことをねがふ
 エホバよねがはくわが口お門守をかきてわがくちびるの戸
 をまもりたまへ
 惡事おわがところを傾らしめて邪曲をおこなふ者とともに惡
 きわきおあづからしめ絶ふなかれ、又かれらの珍饈をくらとし
 めたまふなかき
 義者、これをうつとも我のこれを愛まみとし、うの我をせむるを
 頭のあふらとせん、うの頭、これを辭ます、かれらに禍害おあふ
 ときも、うが断つたえし
 うの審士、いは得の榮おなげられん、かれらにうのこの甘美
 およりて聽こをすべし

人つちを新しううつるごとく我情のはねのはかの口おちりさ
 る
 されせ生エホバよ、うの目、な得汝おむかふ、我なんぢお依頼め
 う、ねがはく、うの鑑境をともしきまは、お抱あきたまふなかれ
 我をまもりてかれら、わがためおまうくる路、よこしをを行
 ふものゝ模をまぬかれしめたまへ
 わるの全くのされん、あしきものをあ、のれの網にねちいらしめ
 たまへ

第百四十二篇

ダセデ、詞ありしときよみ

われ聲をいだしてエホバあまをう望聲をいだしてエホバあて
 ひもとむ
 わるのその聖前、お息をうきいだし、うのみまへおまひ

患難をあらはす
わが靈魂をさうちにおきえうせんとするるときも汝をのみちを
たまへり人を見ればをどらへんぞては汝もくみちをかくせり
願くは我がみぎの手に目ををろときて見たまへ一人だお我を去
るものなし、さればおの過所なくまたは靈魂をかへりみる人な
し
よわばよまれ汝をよそふ我いへらく汝の言さけどころ有生
の地にてわがうべき分なりと
ねおはくはくわが號呼おみこころを定めたまへ、されいたく卑く
せられたるばなり、我をせむる者より助けいだしたまへ、彼等の
にまざりて強けきなり
願くは言たまひを固よりいだし、されに聖名を感謝せし
めたまへ、なんぢ豊かおされを得たまふべきは、第百四十二篇を

めをらん

第百四十三篇

ダビデのうた

よわばよわはくはくわが祈をきき、言を懇求おみこをかたふけ
たまへ、おんちの眞實なんぢの公義をもて我をあへたまへ
汝のまもれば審判おかきつらひたまふなかき、うのいけるもの
一人だにみまへに義とせらるゝのなし
仇を言がたまひを迫め、言が生命を地おうちずて死てひさし
く世を経たるものよとてく我をくらき所あすまはせたり
又言がたまひひ言が裏おきえうせんとし、言が心わ言がうち
お囁さひれたる
されわいおしへの目をあもひいで汝のかきあひたまひも一切
のこを考へなんぢの手のみ言きをかもよ
言を汝おむかひてわが手をのべわたましひの涙きおどろへ

たる地のとどく汝をあたへり、セラハに
 エホバよ速かにわれにこたへたまへわが靈魂のあどろふ、われ

に聖顔をかくしたまふならき、あそらくのまき穴あくだるもの
 のとどくあらん

朝ふなんぢの仁慈をかしめたまへ、まれ汝よりたのめばあ
 り、まが歩むべき道をあらせたまへ、われまが靈魂をなんぢに舉

れをあり

エホバよねおそくわ我をまが仇よりたすけ出したまへ、まれ匿

れんとして汝にまじりゆく

汝のまが神なり、わきお聖言をあこなふこと我をまへたまへ、愚
 ふかき聖靈をもて我をたひらかなる國あみちびきたまへ

エホバよねおそくわ聖名のためお我をいうし、なんぢの義およ
 りてわがたましひを患難よりいだしたまへ

又なんぢの仁慈よりてまが仇をたち靈魂をくるしむる者反
 こどろく滅したまへ、まが我あんなの僕なり

第百四十四篇
 大ヒテのうた
 戦することをもて手おをしへ闘ふふをまが指にをしへたま

ふ、わが鎧エホバのほむべきかな

エホバのまが仁慈わが城なり、まがたかき櫓まをすくひたま

ふ者なり、まが盾まが依頼むものなり、エホバのまが民をまきお

またおとせたまふ

エホバよ人のいかなる者な色バ之をまらり人の子はいかなる者
 なれば之をみこころお記たまふや

人の氣息おことならず、その存らふる日すすきゆく影おひとし
 エホバよねおそくわなんぢの天をたれてくだり手を山につけ
 て煙をたしめたまへ

六 電光をうちいだして彼等をちらし、かんちの矢をさちてかき
 七 らを敗りたまへ
 八 上より手をのべ我をすくひて大水より外人の手よりたすけい
 九 だしたまへ
 十 あれらの口いひおしき言をいひ、その右の手いつそりのみぎ
 十一 の手あり
 十二 神よ、見れ汝おむひて、驚らしき厭をうたひ、十絃の琴あはせ
 十三 て汝をはめうたえん
 十四 かんちの王たち、お敵をあたへ、僕ダビデを置き、ひの劍よりす
 十五 くひたまふ神あり
 十六 ねがえく、我をすくひて、外人の手よりたすけいだしたまへ、あ
 十七 れらの口いひおしき言をいひ、その右の手いつそりれみぎの
 十八 手あり

十九 見れらの男子、いとしわうきとき育ちたる草木のごとく、見
 二十 れらの女子、宮のよりおさらひて、新みいだし、隅の石のごと
 二十一 くおらん
 二十二 見れらの倉いみちたらひて、さまぐ、のものをおさへ、見れらの
 二十三 羊の野、おて、千万の子をうみ
 二十四 見せらの牡牛、よく物をおひ、見れらの衛兵、いせめいることお
 二十五 く、亦おしむることお、明ふことお、さうらん
 二十六 かまる狀の民、いさひあり、エホバをおのが神とする民、いさ
 二十七 いさひあり
 二十八 第百四十五篇
 二十九 ダビデの讚美のうちた
 三十 見が、かみ王よ、見れ汝をおおめ、世々かぎりお、聖名を得めまう
 三十一 らん
 三十二 われ、日ごとに汝をはめ、世々かぎりお、聖名をはめたまへん

三 エホバの大あましをせよ最も得むべきかな、主の大あることの
 尋ねあることあたし
 四 この代わりの代あむりひてあんちの事跡を得めたりへ、あんち
 の大能のはたちきを宣つたへん
 五 われ汝の得せられの榮光ある後威どあんちのくすしみとさと
 六 を深くおもはん
 七 人のあんちのあうるべき勳作のいき得ひをうたり我のあんち
 の大あることを宣つたへん
 八 うきらのあんちの大ある恵の跡をいひいで、あんちの義を得め
 九 うたさん
 十 エホバの恵ふりく憐情みちまた怒たまふことおろく憐憫あは
 十一 いなり
 十二 エホバのよろづの者にめぐみあり、うのふなき憐憫のみとさの

十三 上にあまねし
 十四 エホバは汝のすべての事跡のあんちに感謝し、なんちの聖徒の
 十五 なんちをはめん
 十六 かれらの御國のえいくわうをかたり汝のみちからを宣つたへ
 十七 て
 十八 うの大能のはたちきとろのみくにの榮光あるみいづとを人の
 十九 子輩にあらずべし
 二十 なんちの國のどこしへの國なり、なんちの政治のよろづ代にた
 二十一 ゆることなし
 二十二 エホバのすべて倒んとする者をさへ、あふむものを直きたし
 二十三 しめたまふ
 二十四 よろづのものよ目のなんちを待かんちの時にあたりひてかれ
 二十五 らふ程をあたへたまふ

一六 なんぢ手をひらきてもろくの生るものと願望をわかしめた
 一七 まふ
 一八 エホバのろのすべての途にたゞしく、うのすべての作爲にめ
 一九 みふかし
 二〇 すべてエホバをよぶもの誠をもて之をよぶものにエホバの近
 二一 くましますなり
 二二 エホバの己をあるものと願望をみちたらしめ、うの號呼を
 二三 きよて之をすくひたまふ
 二四 エホバの心を愛しむものをすべて守りたまへと惡者をこ
 二五 どくく滅したまはん
 二六 わが口のエホバの頌美をかたり、よろづの民の世々をたりにく
 二七 うのきよき名をはめまつるべし
 二八 第百四十六篇

一 エホバを讃稱へよ、主がたましひよエホバを得めたよへよ
 二 エホバを生るかぎり、エホバをはめたよへ、主がなごらふるはせに
 三 主の神をはめうたはん
 四 もろくの君によりたのむこと、かく人の子によりたのむなか
 五 れ、かれらに助あることなし
 六 ろの氣息いでゆけば、れ土にかへる、うの日、かれがもろくの
 七 企圖はろびん
 八 ヤコブの神をたのむ助、主の望を、おのが神エホバにおくも
 九 のの福ひなり
 一〇 此のあめつちと海、どろのなかなるあらゆるものを造り、どこし
 一一 へに眞實をよもり
 一二 虚げらるゝものゝために、審判をおこなひ、餓たるものに食物を
 一三 あたへたまふ神なり、エホバのどらはれたる人を、ときはなちた
 一四 七
 一五 六
 一六 五
 一七 四
 一八 三
 一九 二
 二〇 一
 二一 第百四十六篇

八 エホバのめしひの目をひらきエホバの屈者をなほくだせせ
 ホバの義きものを愛くしみたまふ
 十 エホバの他邦人をまもり孤子と寡婦とをささへたまふされせ
 忍きものを復くつがへしたまふなり
 十一 エホバのいとしへに統御たまさん、レオンよなんぢの神のよ
 づ代まで統御たまさんエホバをはめたまへよ
 一 第百四十七篇
 エホバをはめたまへよ、それらの神を得めうたふの善ことなり
 樂しきことあり稱まつるよろしきは過へり
 二 エホバのエルサレムをきづきイスラエルのさすらへる者をあ
 つめたまふ
 三 エホバの心のくだけたるものを醫し、うの傷をつきまたまふ

四 エホバのろくの星の数をかへてすべてこれに名をあ
 へたまふ
 五 じきらの主のあついでなり、うの能力もまた大なり、うの智慧のき
 ことまりなし
 六 エホバの柔和なるものをささへ忍きものを地にひきあとした
 まふ
 七 エホバに感謝むてうたへ琴にあてせてじきらの神を得めうた
 へ
 八 エホバの雲をもて天をあついで地のために雨をうなへまろく
 の山に草をはえしめ
 九 くひものを獸にあたへ、並なく小鴉にあたへたまふ
 十 エホバの馬のちあちを喜びたまえ、歩人の足をよみじたまえ、歩
 十一 エホバのあのを畏るもの、あのをの憐憫をのぞむものと

十二 エルサレムよ エホバをほめたまへよ、^シオニよなんぢの神をほめたまへよ
 十三 エホバのなんぢの門の關木をかたうし汝のうちなる子輩をさきはひたまひたれをなり
 十四 エホバの汝のすべての境にやはらぎをあたへいと嘉宴をもて汝をあかしめたまふ
 十五 エホバのそのいましめを地にくだしたまふ、^クの聖言いひどすみやかにほしる
 十六 エホバの雪をひつじの毛のごとくふらせ霜を灰のごとくにまきたまふ
 十七 エホバの氷をつちくれのごとくに^シ彫ちたまふ、たきかうの寒冷になふることをえんや

十八 エホバ聖言をくだしてこれを消しその風をふかしめたまへば^シもろくの^シ水になさる
 十九 エホバのうのみことををヤコブに^シ所しそのもろくの^シ律法と^シの審判とをイスラエルに^シあめしたまふ
 二十 エホバのいづれの國をも^シ如此あしらひたまひしにあらす、エホバのもろくの^シ審判をかれらに^シあらざるなり、エホバをほめたまへよ

第四百四十八篇

一 エホバをほめたまへよ、もろくの^シ天よりエホバをほめたまへよ、もろくの^シ高所にてエホバをほめたまへよ
 二 ^シの天使よみなエホバをほめたまへよ、^シの^シ萬軍よみなエホバをほめたまへよ
 三 日よ月よエホバをほめたまへよ、^シの^シ星よみなエホバをほ

四 めたまへよ
 三 もろくの天のてんよ天のうへなる水よエホバをはめたまへ
 二 こきらのみかエホバの聖名を得めたまふべし、らのエホバ命じ
 一 たまひたれをかきらの造られたり
 六 エホバまた此等（こら）をいやどはながに立たまひたり又（また）すきうすま
 七 とき（とき）命（いのち）をくだしたまへり
 八 龍（りゅう）よすべての淵（ふみ）よ地よりエホバを得めたまへよ
 九 火（ひ）よ霧（きり）よ雪（ゆき）よ霧（きり）よみこをにえたがふ狂風（きやうふう）よ
 十 もろくの山（やま）もろくのをか實（み）をむす木（き）樹（こ）すべての香柏（かうはく）よ
 十一 眠（ね）もろくの牲畜（けだもの）はふもの翼（つばさ）ある鳥（とり）よ
 十二 地の王（わ）たちもろくのたみ地の諸侯（しよこう）よ地（ち）のもろくの審士（しんし）よ
 十三 少（す）きをのこ若（わか）きをもち老（おい）たる人（ひと）をささきものよ

一五 みかエホバの聖名（せいめい）をはめたまふべし、その聖名（せいめい）いたかくして顔（かほ）
 一四 かくそのえいくわうの地（ち）よりも天（てん）よりもうへにあきばなり
 一三 エホバの民（たみ）のために一つの角（つう）をあげたまへ、このものも
 一二 ろくの聖徒（せいと）のはまれエホバにちあき民（たみ）なるイスラエルの子（こ）
 一 輩（たぐひ）のはまれなりエホバを讃（ほ）稱（めい）へよ

第百四十九篇

一 エホバをはめたまへよエホバに對（たい）ひてあたらしき歌（うた）をうたへ
 二 聖徒（せいと）のつぎひにてエホバの頌美（しょうび）をうたへ
 三 イスラエルのかのれを造（つく）りたまひしものをよろこびレオン（レオン）の
 四 子（こ）輩（たぐひ）のかの王（わ）のゆゑによりて樂（よろこ）むべし
 五 うれちをせりつゝその聖名（せいめい）をはめたまへ琴鼓（しんこ）にてエホバをは
 六 めうたふべし
 七 エホバの民（たみ）をよろこび救（すく）ひて柔和（にやわ）なるものを美（う）しくし

たまへばなり
 聖徒の交いくまうの故によりてよろこび、うの寢牀にてよろこ
 びうたふべし
 その口に神をはひるうたあり、うの手にもろはの劍あり
 このもろくの國に仇をかへしもろくの民をつみなひ
 りれらの王たちを鏖にて、あきらの貴人をくろあねの域にてい
 ましめ
 鏖したる審判をりれらに行ふべきためなり、欺るはまれいその
 もろくの聖徒にありエホバをはめたまへよ

第百五十篇

エホバをはめたまへよその聖所にて神をはめたまへよ、うの能
 力のあらざるを誇るにて神をはめたまへよ
 その大能のはたらきのゆゑをもて神をはめたまへよ、その秀て

かはいなることの故によりてエホバをはめたまへよ
 ラバの盤をもて神をはめたまへよ箏と琴をもて神をはめた
 たへよ
 つとみと踊舞をもて神をはめたまへよ絃索をもて神をはめ
 たまへよ
 昔のたかき鏡鍔をもて神をはめたまへよ、なりひよく鏡鍔をも
 て神をはめたまへよ
 氣息あるものの舌々をはめたまふべし、なんちちエホバをは
 めたまへよ

詩篇終

卷之四
 一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

860
立教大学図書館



95-91146